山岳

第二十九年
第三號

山岳

第二十九年第三號

目次

（第二十九年第三號　昭和十年一月）

本欄

ウェストンと歩んだ頃　浦口文治　一頁
アルバータ遠征の追想（二）　三田幸夫　六五

雜錄

スノウドンの思出　田中薫　九三
一月の日高山脈　相川修　一〇一
上信境御飯岳四阿山縱走　角田吉夫　一二三
大平晟氏の壽像建設計畫　高頭仁兵衛　一三一
遭難顚末概報
鹿島槍ケ岳に於ける國澤武氏の遭難報告（岡田美雄）　一三四

穂高屏風岩に於ける黒田勝喜氏の遭難報告（島田眞之助）　一三六

圖書紹介

一四二―一六二
小鳥烏水　書齋の岳人（藤島敏男）――邦譯「日本アルプス」（黒田孝雄）――松井幹雄　霧の旅（黒田孝雄）――
西岡一雄　泉を聽く（額田敏）――荒井道太郎譯　山！（伊藤愿）――北大山岳部々報第四號（田中菅雄）――關西
學生山岳聯盟報告第五號（黒田孝雄）

會　報

會務報告（一六三）――第六十三回小集會（一六四）――第六十四回小集會（一六四）――有志晩餐會記事（一六五）――新入
會員紹介（一六六）――退會者（一六六）――「山岳」投稿規定（一六七）――日本山岳會會則（一六八）

圖　版

アルバータ東南面（クラィネアルバータ中腹より）　岡部長量　對頁　六四
アルバータ西南面（ベースキャンプ裏山より）　岡部長量　六五
ヂャスパー・パークロッヂ前に於ける一行　Davis　六八
下降中休息をなしたる唯一の個所　六九
アサバスカ河右岸山火事の跡　七四
途中の露營地にて　七四

第一圖　田中薫　九二
第二圖　田中薫　九三
第三圖　田中薫　九六
土鍋山より四阿山根子岳　水野啓治郎　一四
四阿山・東北肩二千二百米附近より望む　水野啓治郎　一五

挿圖

コロンビア・アイスフィールド
アルバータ附近
スノウドン山彙概念圖
日高山脈札内川上流
上信國境御飯岳方面
鹿島槍ヶ岳概念圖
穂高屏風岩略圖

カット

『山岳』第二十九年總目次　卷末　坂本直行

ウェストンと歩んだ頃

——第六十四回小集會に於ける講演——

浦口文治

開會の辭

田部重治

只今から立教大學教授浦口さんの「ウェストンと歩いた頃の思ひ出」と云ふ講演があります。浦口さんに此の話しを御願ひするに至つたことについて面白いいきさつがあります。實は私は最近まではシェークスピアやブラウニングやラスキンの研究者としての浦口さんを知つてゐましたが、登山者としての浦口さんを、全然知らなかつたのであります。丁度、九月に這入つてから間もない頃のこと、浦口さんに御會ひして、色々英文學の話しをした時、私は「ことしの夏はどうして暮しましたか」ときゝました。それは浦口さんにも山へでも登りなさいとすすめる積りであつたのです。ところが浦口さんは、ことしの夏は金峯から增富に降り、信州峠を越えて梓山に至り、更に十文字峠から栃本へ行つた。其の時に甲武信岳へもと思つたが、甲武信の小屋には番人がゐないことをきいて斷念した旨を話されました。私は意外なことをきくと思つて「あなたも山に登りますか」と云つたところ、浦口さんは今から四十年以前にウェストンの通譯をして山に登つたことがあり、最近にも當時のことを想ひ起して笠ヶ岳に登つて見たと話されました。其の時、私の頭に浮んだのは、たしかウェストンの「日本アルプス」に浦口と云ふ名のあつたことです。私は珍らしいことをきくと思つて驚いて小島君に其の事を話し、是非、日本山岳會に來て頂いて、其の時代の話を聞かうではないかと云つたところ、小島君も大喜びで、早速、實行しようと云ふことでした。そこで、愈々、十一月の小集會に御願ひすると云ふことになつて、左樣申上げたところ、浦口さんは、只今「ハムレット」の校正で忙がしいので、何とか、もう少しく延期して戴れないかと云ふ話でしたが、會の方では期日が定つてゐるので、無理に御願ひして今日やつて頂くやうになつたわけであります。會員諸君の御謹聽を深く希望する次第であります。

一、まえことば
二、ウォタア・ウェストン氏の立場
——博士ヘボン、教授ロイド、小泉八雲との比較
三、ウェストン氏の第四回目北アルプス旅行
四、ウェストン氏と私との縁故
五、山登りの四階段
六、大蓮華のぼり
七、鹿島槍のなげやり
八、三度目に登攀の笠ヶ岳
九、常念ヶ岳の山料理
十、御岳まゐり
十一、山岳愛と近代人生活

一、まえことば

先刻は食堂で、この會の長老諸先生、並に幹部の方々に、御面會を得ました上、鄭重なおもてなしをいたゞきました。玆ではまた、かやうに多數の會員諸君の、御目にかゝる機會を與へられました事は私にとつて、眞に近來稀れな喜びで御座います。只今田部先生の御紹介中に、色々御親切な御言葉がありました。そのうちには、私にとつて過分で、敢て自ら當り得ぬ處も御座います。が、しかし折角司會者が今晩の談話者にもたせてくださつ

た花を分類したり、またその各部を解剖したりしますと、その結果に於て、あるひは私の方では現實暴露の危險があり、また御列席諸君の方では、sorrows of the disillusionment——幻滅の悲哀にかゝられるかも知れません。それでは、双方殘酷です。で、田部先生のお言葉はあの儘にありがたくお受け致しまして、早速おはなしの山道にはいりませう。

いやもう一つ、先日田部先生からの御言葉に、會の方の希望は「ウェストンと歩んだ頃」の思ひ出を語つてくれる事で、題はその儘會員諸君に通知して置いたからとの事でした。この思ひ出話は、私にとつて、何と言つても四十年前の昔話。この與へられた話題に面しますと、申し述べたい事が色々出て來ますが、なるべく一本筋のとほつたお話を致したい。時間は一時間以上なら、いくらでもいゝ、講演者は君一人だから、遠慮は無用とのこと。で、少しばかり、まえことばと、あとことばとを、加へさせていたゞきます。

二、ウォタア・ウェストン氏の立場

さてウェストン氏が日本アルプスにおける、パイオニア・エクスプローラアであつたのは、云ふまでもないことですが、彼の本職は聖公會派の宣教師でした。で、まづお互に考へて見たいのはウェストン氏の立場——エ・パイオニア・ミッショナリ・イン・ジャパンといふ立場です。一體、開拓者時代の宣教師は、皆外國の文化を日本に輸入して呉れた恩人です。同時にそのなかに少數の傑れた人々が日本の寶を——我々の間に隱れてゐて、それまで世界に知られてゐなかつた寶を——外國に紹介して呉れました。かやうな功勞者は其の數がかなりに多いでせう。私の狹い見聞の範圍内で申せば、まづその第一人者が Dr. Hepburn. 彼が日本へ來られたのは丁度七十五年

前の三週間まえ、卽ち一八五九年十月十八日の事ださうですが、日本紹介者としての彼の記念碑の一面に幾久しく傳へられるのがあのヘボン先生の日本語字書。この字引の御恩を日本初代の英學者が蒙つた事は今更云ふ迄もないが、外國の方から見れば、日本の言葉が、國語が、組織的に世界に紹介されたのは彼の編纂物の御蔭です。

次に日本紹介者として誰にもすぐ思ひ出されるのはあの Lafcadio Hearn. この小泉八雲さんも明らかに一種の文化的ミッショナリであられます。が、もつと狹い意味の敎會宣敎師の方から先きに申せば、ヘボン先生のお次ぎが Arthur Lloyd 先生。彼はウェストン氏と同じ監督敎會派の宣敎師であつて、後に東京帝大の講師になられました。此の人の宗敎敎師としての、また英文學敎授者としての貢献もまた大でありますが、私が玆に彼をあげるのは日本紹介者の一人としてです。Dr. Hepburn の字書を通して、日本の Language を知つた世界が Prof. Lloyd を通じて明快に紹介されたのが、日本人の Life 生活です。彼の名著の一つに Every Day Life in Japan といふのがある。もはや二十數年前の事ですが、その一讀以來、この書物の印象は私に忘れられない。例へばその一章 At the Asakusa Temple の如き、なるほどなるほどとうなづかさせられた處が多い。あの淺草雷門の情景をどんな視角からロイド先生は見たか、またどんな筆致で敍してゐるかといふ處に於いて、この書の味ひは深い。日本人の日常生活に對する彼の angle of sight 幷にその一場一景を描き出す彼の pen の運び、此等二つの要素が結成してそこに出てゐるのが日本人の Every Day Life の紹介者としてのロイドさんの charm でせう。處が、彼の取扱つたのは寧ろ Every Day City Life in Japan であつた。それに比較して見て、一層はつきりとわかつて來るのが我々のウォタア・ウェストン氏の立場。彼によつて、それこそ初めて世界に紹介されたのは日本の山岳と山人（やまびと）、いや山間村落の生活とです。そこにウェストン氏の獨り往く道筋、獨り占めの壇場がある。そこま

では、いやそんなに奥深くまでは、其の他の方々の目が屆いてゐない、筆が運んでゐない、脚は勿論行つてゐない。

茲であの小泉八雲さんを對照の一例に引いて云ふならば、彼の名著の一つの表題 Glimpses of Unfamiliar Japan から判斷し得られるやうに、彼がかいまみた日本の側面は、其の時まで世界が見慣れてゐない、聞き慣れてゐないもの。そして彼は生れつきの詩人肌で、想像豐富、その上に、筆は自由奔放、ために世界に聞えた文豪の一人となられました。然るに今ウェストン氏を思ひ出すにつけて、此等二人の日本紹介者を比較すると、そこに出て來るのが面白いコンツラスト。小泉八雲さんは私から見ると西洋文明の餘りに物質的に偏した處、その社會生活の餘りに複雜化した處に愛想をつかしてゐられるらしい。かやうな氣持で、日本にやつて來て、あの横濱上陸の第一歩からぶつつかつたのが日本人のシンプル・ライフ。そして彼の驚き、かつ心醉してしまつたのが日本人の生活、殊にそのアンファミリア・サイド。しかも彼は一目見た事柄を十頁の詩的散文に書きのばすだけに筆力拔群の文章家である。で、彼の書物を讀んだ世界の旅客があこがれの日本に到着して、いや神戸や横濱に上陸して、まづ第一に拍子ぬけの感じをもつのは Lafcadio Hearn's Japan がさほどに遺つてゐないといふ事らしい。彼は本來の詩人かたぎで、その上に西洋の文化に愛想をつかしてゐる。本國に愛想をつかしてゐるだけ、彼は異國日本にほれこんでゐる。さてこの情愛要素をしばらく分離させて、單純に思想方面から見ると、彼のかいてゐる處にバランスが取れてゐないとも評し得られませう。ところが彼に比して、ウェストン氏は勿論自國の文化をあくまでも愛してゐる人で、同時に日本の山と山人の生活とに心から親しみを持つてゐる人です。美文家として、彼は Lafcadio Hearn ほどの人でないでせう。併しながら思想にバランスの取れてゐる方から言へば、彼の方が遙かに穩健着實でありませう。といふのが最近の私の考へ方であります。

で、このウェストン氏と一緒に歩いた頃のお話しをするとして、「さうですな、我々の登つたのはとても高い山山でしたよ」位では濟まされない。といふ譯で、ウェストン氏の書物、『日本アルプス登山と探險』のうちで、私の同行した部分の記事を、仕事のあいまあいまに今朝までかゝつて一讀しました。それが私にとつて、よい review になつたし、お蔭でウェストン氏の立場の特異性――今述べたやうな特徴がはつきりして來ました。また私にとつてその思ひ出のなつかしい、昔の友達の一人が、日本紹介者としてかやうな働きをして呉れたといふ認識の故に、甚だ愉快な氣持で、私は今晩茲へ參りました。

三、ウェストン氏の第四回北アルプス旅行

ウェストン氏は、御列席諸君の御承知の通りに、彼の最初の日本滯在期に北アルプスに四回旅行してゐます。それから一應歸國。その間にこの『日本アルプス登山と探險』の原著を出版。その後、日本に來た二度目滯在の時に探險したのは、主として南アルプスの山々。そして彼の第三回目の日本滯在中に、彼の健脚が再び跋渉したのは北アルプス。ウェストン氏がかやうに終始一貫愛したのは日本アルプス。處が、我々山岳人にとつてなつかしいこの大山脈の名稱に就いて、小島烏水先生がおかきになつた隨筆を先達東京日々新聞(九年十月十七日)紙上で拜見しました。私もまた此の頃時々唱へられる名稱――この大山脈をさして中部山岳などと云ふ名稱を殺風景至極のものと感じてゐました。そんな命名に附和雷同する人々は多分あの日本アルプスの實景に親しんでゐない方方だらうかとさへ思つてゐました。小島先生の御主張通りに、「日本としては、ズバ抜けた大規模の連嶺であり、峻銳の高山であり、眞夏にも氷雪が輝き、山頂にはお花畑を展開し、裾には無双の峽谷を抱いてゐる、この觀念を

簡明直載に表はす言葉」として日本アルプスといふ名稱は眞にいゝ。同先生の江戸ッ子式の喝破「況んや中部山岳などゝいふ名はありや何だ」に至つて、私もまた快哉を叫びました。いやこれは一寸わき途へそれました。山中には脇途が多いですな。で、はなしの本筋に立歸りませう。我々のウェストン氏の最初の日本滯在期に行はれたうちで、最後の、卽ち第四回目の北アルプス旅行は彼が第一回目英國歸國直前の旅行で、またそれが彼の日本滯在——前後三回のそれを通じての最大旅行であつた。今思ひ出すと、いろ／＼の特色がそこに現はれて來ます。彼自身もこの書物の第十一章の始めに記してゐる、『一八九四年……夏の……計畫は中央日本のアルプス全山系を北から南へ横斷する事であつた。さうする事に依つて、また今まで登山しなかつた主な山々を登る事に依つて、この山系の全體としての主な特徴の一層正しい概念を得やうと望んだ。この試みはその結果から見て大成功だつた』と。（邦譯書二四一頁）

この「大成功」を來した要素が數多くあつた。第一、彼の年齡はまだ三十四歲の男盛り、しかも獨身者で、氣も輕ければ、身も輕い、脚は勿論輕いといふ元氣旺盛な時であつた。次に、この旅行の期間。前三回、相次いでの彼の日本アルプス旅行はいづれも一ヶ月の旅であつたが、この第四回目のは七、八の二ヶ月に亘つてゐる。第三に、その span（幅）を計ると、北は親知らずから南は木曾の御岳までゞ、大づかみに云つて延長一百哩に近い。それから彼が目ざした山々を平面的に拾つてみると、まづ大蓮華、小蓮華、次ぎが南隣りの鹿島槍、それから西へ大まわりして笠ヶ岳、燒岳、再び東へもどつて常念ヶ岳、更に南へ飛んで木曾の御岳といふ順序。此等を立體的に列べて、それぞれの海拔をしらべると、蓮華がウェストン氏其の時の觀測によれば、九千八百尺、笠ヶ岳が八千八百尺、燒岳が八千一百尺、常念が八千六百尺、木曾の御岳が九千二百尺。だから、この旅行は詰り日本の大

屋根渡りでした。此等以上に高い處は云ふ迄もなく富士の秀峯と槍ヶ岳の穗先きですが、槍の絶頂を彼は第二回目（一八九二年）のアルプス旅行にきはめてゐますし、富士のぼりに就いては、實はこの第四回目旅行の終りに、私の方から彼に、「こゝまで來たのだから、富士に行つてはどうか」と提案しましたが、「なあに、富士なんか北アルプスの山々に比してはね」といふ調子で、その時一向相手にして呉れなかつた。それはとにかく、此等二つのとがりを除いて、日本本土での一番高い處「八千一百尺」から「九千八百尺」の間を我々はこの時歩いてゐる。歩くと言つても、縱走は勿論出來ない時代で、横斷したのです。處が、その横斷といふのも小刻み仕事で、一つの山へ這入つて、その絶頂へ登つては、すぐ國道へ引きかへし、また這入つてはまた出て來るといふやりかた。それが小刻であるだけ、時間もかゝれば、骨も折れた。但しまた同時に、それだけ興味も多かつたのです。これが第五の要素。次ぎに、第六の要素として著しいことは、かなりに魅力のある峠を我々は越えてゐる。あの蓮華溫泉への途中の千國揚（チクニアゲ）（五千七百尺）、あの笠ヶ岳への途中の安房峠（五千尺）と神坂峠（四千八百尺）、それから燒岳の下の中尾峠（六千三百尺）、丁度その向ふの、梓川を隔てゝの德本峠（トクゴ）（六千四百尺）、飛んで木曾福島から信州伊那への途中の權兵衞峠（四千五百尺）、以上六つも、我邦屈指の峠をとほつてゐる。處が、山と云ひ、峠と云へば、そこに當然聯想されて來るのが谷、森、川、湖等の要素である。この旅行に於いて私等がたどつた谷として指折りのものは安房峠のそれと神河内のそれ。前者の溪谷美に對するウェストン氏の描寫ににじんでゐる氣分をば田部先生もまたこの譯書の跋に於いて讃嘆してゐられますが、この溪谷の丸木橋で七月三十一日の午頃とられた寫眞は私等二人のそれ（邦譯書の一八六頁對向所載の）は私にとつてこのなつかしい谷あひの貴重な記念品となつてゐる。さて神河内の溪谷美は今更玆で述べ立てる迄もない。次に森として私等に最も印象の深いのは中尾の密林。

それに就いてのウェストン氏の記事は後に御一緒に讀みませう。またあの前穂高の麓の林や、御岳麓の黒澤御料林などの魅力は既に世間周知の通り。川としてはあの梓川、蒲田川（笠ヶ岳南麓の）、烏川の上流（常念ヶ岳東麓の）に加へて、あの富士川の激流下りも此の行に一役を勤めてゐる。湖水として此の行の初程に私等を歡迎してくれたのが青木、木崎の二つで、中程にたゝへられてゐるのが信州の諏訪湖、そして最後に我々の旅裝束の塵をサッパリ洗つてくれたのが本箱根の芦の湖。

以上數へて見ると、七の要素が相集つて、ウェストン氏のこの大旅行に齎らしたのがあれ程の好成績。今思ひ出すと、其等が私にとつてもまた益々忘れられなくなります。

四、ウェストン氏と私との縁故

偖て、この第四回目の北アルプス旅行――ウェストン氏の最も得意とする旅行に不思議な御縁で同行した一人が私。私にとつて、これは甚だ愉快な思ひ出。その愉快な思ひ出を御列席諸君がお聞き下さるので、その愉快さが今夜幾倍かまして來る。その喜びを感謝しつゝ、茲に申述べたいのはウェストン氏と私との縁故です。

この第四旅行の同行者として名古屋から加つたのが H. J. Hamilton 氏。當時、名古屋在住の同じく聖公會派の宣教師。此の人はカナディアン・ロッキーに於ける登山の經驗者。ために意氣投合、ウェストン氏と同行する事になつた。彼がこの一行のために、引受けられたのは寫眞技師兼臨時料理主任といふ二た役。この料理主任といふのは其の實、パン燒き主任であつた。あれ程の高山峻嶺、しかもその奥の奥まで、數日分のパンをもち廻る事は出來ないので、ハミルトン氏が到る處で手づからそれを燒いてくれた。この人は昨年のクリスマスまで名古屋に居

られた。在任四十幾年、そのうち最近二十二ヶ年のあひだ中部日本の監督といふ重任に當つてゐられたが、今はカナダに餘生を養つてゐられるとのこと。

かやうに脇立を御紹介する以上は、茲に當然一言申上ぐべきは中央の本尊、ウェストン氏の近狀に就いてでありませう。この方の事をよく御存知なのが副會長の松方さん。しかも昨年ロンドンで御再會になつた同氏が私にも最近に知らせて下すつた事柄一つ二つを順序上茲に織り込ませていたゞきます。ウェストン氏現在のお住ひは 57, Iverna Court, London, W. 8. で、既に七十四歳の高齢にかゝはらず、今なほ聖職に在つて、ロンドン市中央の Kensington 區の立派な一教會で働いてゐられるとのこと。今夜のこの御集會の事を文通したら、嘸かし喜ばれることと思はれます。彼は英國の山岳會や地理學會で、日本關係の問題に於いて、つねに大御所の重きをなしてゐられるかたはら、萬事につけて日本のためにはかつてゐられるとのこと。もつともつと我々に親しみのあるお骨折りをあげれば、我が秩父宮殿下英國御滯在中、並にあのアルプス御登攀中に、隱れた處で一方ならぬ斡旋をなされた事は諸君も既に御存知でありませう。またロンドンの日本人海員ホームのためには、十年一日の如く世話を仕續けてゐられるとのこと。とりわけ滿洲事變で、日本が四面楚歌の中にあつた眞最中に、自ら幻燈をかゝへて田舍の學校等を廻つて、日本の國民性や武士道等の說明や論證をしてくれられたさうです。

このウェストン氏を中心として、ハミルトン氏が第一の同行者、第二の同行者がかく申す浦口文治。當年とつて……それは申上げないでもいゝでせうが、その時はまだ二十二歳の青年。處が、紅顏の美少年ではなくて、かなりの神經衰弱に惱まされてゐました。親爺は長々の病人、家はその頃一層貧乏と云ふので、この神經衰弱は私にとつて至極合理的のものでした。その私にウェストン氏が同行を申込んだ。これには譯があつた。彼はこれ

より前、三夏つゞけて北アルプスに踏み込んだ。しかし折角目ざした登山をあつちこつちで果し損ねてゐる。これには何か譯があらうと考へて、彼の思ひ當つた其の一つは、その頃どこの開港場にも巣を喰つてゐたプロフェッショナル・ガイズの祟りだらうといふのであつた。そんな惡風はもはや跡をたつてゐると信じますが、此等の案内人が外國人のお客を連れて宿屋にとまると、所謂袖の下なるものがコッソリと彼等の手にはいるし、俥屋を傭ふと、そのウワマエがはねられるし、商店で買物をすると、そこにチャンとが行はれたのがコミッションの制度、それは公然の秘密。この當り前の役得が都會人には一向あやしまれないでも、もしもあの飛驒の田舍や、信濃の山奥にまで侵入すると、あの質樸な村人達はこの袖の下のさぐりや、上前のかすり取りに氣持を惡くするに違ひない。その氣持がお山の上まで祟るのだらうと考へたらしい。そこで、彼は明治二十七年の夏の初めに神戸のクリスチャン仲間のうちに物色して、誰か英語がかなりにわかつて、脚の達者な、しかもコミッションを取らない青年はゐないかと牧師がたに相談した。處が、神戸組合教會員の一人に浦口文治が居る、あれなら大丈夫、袖の下などに頓着しない、それは保證附きだといふので、副牧師さんが、私のところへ相談に見えた。

私の方でも丁度好都合で、なに二ヶ月の山旅び、それは神經衰弱の保養にもなるといふので、この相談は立處に——實際、立ちばなしで一決した。さて報酬をどうしようかといふ段となつて、先方の條件——旅費は無論全部受持つ、また失禮ながら君の例月の收入全額をお禮として進上するといふ。それに私は直に滿足した。たゞのこる一　條はどんな待遇をしてくれるかといふこと。その時私はまだ中々向ふ意氣の强い剛情もので、俺をあのガイド仲間と見て呉れちや嫌だといふ。先方もその仲間にこりてゐた處だつたので、いや〳〵フレンドとして來てほしい、コムパニオンとしてねといふ。この日英會商の進行振りは至極圓滑。私はたゞ山岳愛に引きづけられ

て、毛頭慾張り心を出さなかつた。そのお蔭で、當時の神經衰弱が私の身體組織から何處へか飛んでしまつたし、その上に今夜與へられたのが四十年ぶりに諸君の前でこんなお話をする名譽。

ところで、私のことがこの書物の原書に Bunji Uraguchi of Kobe, an archaeologist of some knowledge と書いてある。ウェストン氏によれば、私は二十二歳で既にひとかどの考古學者であつたらしい。今からかれこれ十餘年前のこと、上野の圖書館でこの原書を初めて見出した時、私は好奇心に驅られて、あちこち開いて見たが、あの安房峠溪谷の入口での寫眞を見出して、自分ながらオヤと驚いた。それからこゝかしこと讀んで行くと、一八九四年同行者の一人として私の名に加へてあるのが今申す肩書、いや附けたりです。そこを邦譯書には「また浦口は多少學識のある考古學者であるが、他の方面、特に土地の慣習や迷信の調査にかけて、非常に役立つた。これ等の調査研究で、私達の旅行の面白さは二重になつた」と譯してある。私自身がかやうに認識されたからでなくて、全く impersonal な公平な立場から茲に申したい事が一つ二つある。其の一は語學上の一點で、原文 of some knowledge の some が「多少」と譯されてゐる處です。私は今、英語教師の一人として云ひますが、茲の some は實際譯しにくい。これを「或る」と譯すると、それは「或種類の」と取り違へられやすい。さればとて「いくらか」と云ふと、「左程多くはない……少しばかりの」といふ方に合點されやすい。そこで利用されて來るのが漢語の「多少」でせう。本來漢語の句法として、「多少」と云ふのは「多」の左端と「少」の右端と、兩端をたゝいて讀者をしてその中程を諒解させるのでせう。處がそれは漢語の習慣で、日本人がこの形容詞を讀むと、それを日本語の「いくらか」と同意義に解しがちである。然るに英語の some は眞によい言葉です。茲の用例に出くはして、私が今更ながら感心させられたのはその事です。もし浦口の(よろしいか、これは impersonal

なはなし、一例としての事ですよ）知識を多いと云へば、それはウェストン氏の心にもないお世辭となるし、その反對にそれを少いとほのめかすとやはり事實にあはない。そこで多いとも云はず、少いとも思はせないで、some と云ふ處は流石に英語だ、丁度よい言葉ですな。で、この some を一體どう譯したらよいでせうか。この宿題がこの一兩日私にも氣にかゝつてゐました。處が、見附けました。丁度あつらへ向きの言葉が我々の間にあります。近頃とてもはやつてゐる日本語――「相當なもの」がそれです。例へば、浦口は相當に知識のある考古學者だとか、浦口の考古學者としての知識は相當なものだと云へば双方ともにあたりさはりがない。これはほんの言葉使ひの事。第二の點として私が持出したいのはもつと學問的の事。of some knowledge の譯し方よりも、多分もつと大きな問題となり得るのは an archaeologist（一考古學者）といふ言葉が浦口文治にあてはまるかどうかといふ方でせう。私はいまだかつて考古學をやつた事がない。しかしあの時のウェストン氏にとつては、ひとかどの考古學者であつたらしい。彼の必要に應ずるだけの用事は私で辨じられたらしい。「土地の慣習や迷信の調査にかけて、……非常に役立つた」といふウェストン氏の證明の下に、この考古學者といふ免狀を私は素直にうけて置きます。なるほどあの御岳のお頂上で印結びの奥義をウェストン氏と一つ心になつて神主の栃山さんに根掘り葉掘り聞き糺したり、大阪難波の神卸しをわざ〳〵夜なかに參觀して、行者本人にも返答のしやうのない秘密をほじくつたりした事等が記憶に浮んで來ます。ウェストン氏と私との共通學問――考古學はまづこれ位のもの。それでも結構、一冊に纏められて、この書物となつてゐます。

五、山登りの四階段

考古學の考證はまづそれ位にして、本題の山登りの思ひ出に歸りますと、私の山ずきが始まつたのは物心のついた幼時から。其處は兵庫縣、有馬郡、三田藩の屋敷。私の家は高臺にあつて、見晴しがよかつた。朝起きて椽に出て見ると、まみなみ數里のかなたに蜿蜒つらなるあの六甲山脈、その白雪皚々の頂が朝日の光にかゞやく光景がいまだに眼前にちらつく。これが一つの成因で、いつとはなしに私について來たのが常平生、遠きを望み、高きを仰ぐ癖。それを一段と根深くしてくれたのが京都同志社の感化。そこでうけた教育的恩惠が色々あるうちで、最も大きなのゝ一つは山登りの習慣。そこでは毎週土曜日課業一切なしで、大概の生徒の仕事は朝早くから草鞋穿きの山登り。其の頃私等のよく行つたのがあの比叡山に愛宕山、北は鞍馬の奥の院から、南はあの天王山の頂まで。もう少し遠い處で、午前四時出發、午後十一時頃歸校といふのがあの琵琶湖の西側に屏風のやうにそばたつてゐる比良山か、同じ湖水の東南にうづくまつてゐる蜆蛤山。それも乘物一切ぬきで、終始一貫あるきどほし。隨つてその頃の同志社の土曜日は、寄宿舍はがらあき、校内に生徒は一人もゐない事が屢々であつた。

こんな昔話まで聞いていたゞけると、も一つ茲におはなししたくなるのが當時の社長、新島先生の御性格。或る土曜日の事、例によつて生徒出はらいのあとへ、立寄られたのが伊藤博文公（その頃は何爵であられたか覺えない）。案内者は新島先生お一人、廣くもない校内一巡、チャペルへ來られた。その表戸の鍵のありかを知つてゐたので、仕合せにもこのお二人についてまはつたのが私。漸く十三、四の小僧の私、その時の伊藤公を別段にエライお方とも感じなかつた。それよりも私等にとつてエライ事はあの新島先生が前もつて伊藤公のお立寄りを知

つてゐられながら、生徒等の山行をとめもしないで、素知らぬ顏で、生徒不在の學校をこの大官に見せられた事。その事が翌日知れ渡ると、年長の學生共が感激して、我が新島先生はやはりエライよと喜んだ。故先生のこの態度があの上州魂から來たのか、または亞米利加仕込みの democratic spirit の所產であつたのか、いやそれら等々の結成物であつたか、そんな精神分析は今夜の私の仕事ではない。それはとにかく、私が愉快に思ひ出すのはあのチャペルのなかで、先生がこの貴賓に向つて、今日は生徒が皆山のぼりをしてゐますのでと平氣で、頭をさげもしないで、話してゐられた處。私自身の誇りは其の時うらやまれたやうに、私一人があの大政治家のお伴をした事ではなくて、寧ろあの可塑的青年期の五ヶ年間に、私の山ずき癖を助長してくれた母校が、當時の日本では唯一の登山奬勵學校であつた事。いや出身學校の自慢話まで出しまして、失禮しました。

處が、私等の時代の登山はたゞ登らんがための山登りであつた。一寸高い山が目につくと、あいつに一つ登つてやらうと早速のぼる。とにかく登る。徑がひどければかへつて愉快だと、がむしやらに登る。途中で散々汗をかく事を痛快がつて登る。登つて頂上に達すると、持參の握飯をぱくつきながら、爽快感に襲はれる。その感じだけで、自分が天下を取つたやうに快活になる。眞に他愛のないこと。至極淡泊な山登り。今から顧ると、私等の戸籍はやつぱり日本登山史に於いてその第一期の古代史に屬するもの。そして血筋は、例へて云へば、まづ役の行者百何十代目の末裔。いや、役の行者式の歩きかたの一例を申せば、ウェストン氏同行後の三年目、私が札幌で中等教員の豫備試驗をうけた日の夕方、直ちに發足。あの大曲、千歲經由の國道を進んで行つた途中、とうとう宿をとりそこねて、向ふ見ずに徹夜徒歩。夜あけがたに、あの苫小牧（トマコマヘ）の手前の沼の東北隅に出た。然るにそれより前、午前三時頃でせう、既に彼是十里餘り歩いて來た疲れと睡氣とにたへかねて、あの林道のみちばた、電信柱

の根もと、とある十字路のかどで、うた〻ねしてしまつた。といふのを聞いて、あの沼端の小屋の老人夫婦が四つの目を見張つて云つた、「あんたまあ仕合せだつた、あそこは熊のよく通る路筋だがな。あそこで熊に出喰はしたら、あんたの生命はもうないよ。あそこで食ひ殺されたのが何人だかわからないな。大變な事をする人だ、あんたは」と。叱られたのか、または祝福されたのか、其の時は勿論、いまだにわからない。その判斷の困りかたよりも、私にとつて、もつと強かつたのは熊の餌食となる恐しさ。しかしあとからなんぼこわがつても、我知らず寢込んでしまつたのだから、もう仕方がなかつた。そんな危險圏内とは知らずに、なに内地の田舍の田圃路ぐらゐに思つて、通り越してしまつたのだから、尙更に仕方がなかつた。この事を函館へ歸つて、そこの同僚某君に語ると、この親友が大笑して「君のしさうな事だよ」と云つた。そして札幌農學校の新渡戸先生に文通して、「なに浦口があんな事をしたのは for the pleasure of mere marching です」と云つた。"For the pleasure of mere marching,, これはよい言葉。流石に親友の知言。その頃は山坂でも、野ッ原でも、mere marching の愉快に引付けられて、歩き廻つた私等でした。

隨つて、山を科學的に考へるなどといふのは私等の柄ではなかつた。その私へこの會の幹部の方々から、講話をしろとの御希望。私は一寸面喰つて、「どうも日本山岳會のお歴々の前で、四十年前の昔話をするのは所謂釋迦に說法の類ひ、私には一の難題だ。なぜつて私には一向サイエンチフキックな知識がないから」と申しました。處が、豈に圖らんや、田部教授の曰く「そこだよ、近頃の若い人たちはよく云ふ、山を科學的に考へなくちやならぬと。しかし僕も不贊成なのは其の事だ。昨年關西の小集會によばれた時も、言つた事だが、山にはローマンスの氣分がある、それを味ふのがよいのだ。此の頃の山岳人には科學的の側がかちすぎてゐる。君がウェストンと歩い

た頃の經驗が丁度あつらへ向きの材料だ。僕が保證する。心配せんで、やつたが宜い」と。かやうにけしかけられました。

今しがたお話しました北海道新開地の森のなか、熊のがれの一條は明治三十年の事ですが、役の行者の血の氣は昭和九年の今日にもまだ私にのこつてゐる。つい先達てのこと、久振りで新宿の映畫館へ行つた。子供を連れてとは名のみで、實は彼等に連れられて、見たのがあの「銀嶺征服」。その面白さを思ひ出して、數日の後食事時の話し中に、私はあの題を間違へて「銀嶺征伐」と云つた。處が子供等が「ワアッ」と大笑ひして「征伐とはお父さんらしい、をかしい。」と云つた。この間違へに閉口したが、實を言へば、私等時代の山のぼりは一つの征伐行爲であつた。峻嶺征服慾の滿足よりも、私等の求めたのは寧ろ征伐的精神のもらしかたであつた。何處でも高い山が見付かると、云はゞ、癪に障る。あいつのあたまに一つ草鞋の足跡をつけてやれと、まるで山を見ること、あだ敵のやう。そのかたきを征伐して置かないと、氣がやすまらない。そして、その山の絶頂に登ると、すぐ仲好しになる。私等にとつて、山は登る時には敵、登つてしまふと友達、そして降つて來ると戀人。そしてそのロマンチックな思ひ出が幾久しく、いや、一生涯續く。四十年前の北アルプスに對して、私の胸にいまだにたゝへられてゐるのは一種ロマンチックな情愛であります。

しかし何と言つても、私等時代の山登りは甚だ非科學的であつた。處へ、ウェストン氏が日本へやつて來た。私一個人から云へば、やつて來たのではない、私を引張り出してくれたのです。ウェストン氏は流石に歐羅巴本場のアルピニストであつただけに、科學的である、組織的である。その道具立てが中々に大きい。一つの山の頂へ來ると、直ぐに出したのがあのアネロイド・バロメタア。この氣壓計で、そこの高度をはかる。それで滿足しな

いと、人夫にかつがせた荷物のなかから取り出すのがモレキュラァ・バロメタア。今頃は手輕なのが出來てゐるでせうが、その頃のはまだ隨分億劫なもの。その大層なので觀測を始める。その委細を一々ノートにとる。その他まだ一つ二つサイエンチフックな道具が使はれたが、其等の名さへ私は未だに知らない。次に地圖の方は、今頃は既に古物扱ひされてゐるでせうが、當時に於いては最大の權威であつた地圖――あの農林省――いやその頃はまだ農商務省――の地質調査所で作つた地質調査圖、色附けで土質も高度も一目瞭然、但し大形で携帶に不便なもの。それを擴げて、一々確めつゝ、進んで行つたのが山奥の道筋。こんな器械と地圖とに私は生れて初めてお目にかゝつたので、時代がまるで違ふ。まるで役の行者の末裔の山伏小僧が突然と地質調査技師の助手を仰せつかつたやうなもの。しかしそれは私だけの事ではなくて、察するにその頃の日本での山のぼりは一般にそんな程度のものであつたでせう。そこにウェストン氏の貢獻がある。彼が日本に來て始めて示してくれたのが科學的な山登りの實行。この先蹤を間接直接にたどつて、日本の山岳人等がその後サイエンチフックな山登りをするやうになつた。私は今なほ信じてゐます、歴史的に云つて、あの科學的な山登りの初めをなした一人が卽ちウェストン氏であつたと。

この明治二十七年から十年ばかり後、八月の中頃に、熊本より越後長岡へ轉任の途中、大阪ステーション――その頃の名はまだ梅田驛――を通つた時、私が驚かされたのは山の宣傳の盛んになつてゐた事。この十年間に北海道から九州に轉任した私は不相變山道樂をつゞけてゐたが、その間に鐵道省までもが商賞氣を出して山を資本にかなりにもうけてゐた。論より證據で、もうからない事には、なんぼうお役所でも、あれだけ宣傳費をかける筈がない。抑もあんなに宣傳したから、山のぼりがはやり出したのか、それがはやり出したから、お役所まであん

なに商賣氣を出したのか、どつちがどうだか、私にはわからない。またそんな事はわからずともいゝ。とにかく其は明治三十六年夏の事、日本國家の重大事件で云へば、あの日英同盟の成立が前年一月の事、そしてあの日露戰役の開始が翌年二月の事、此等二大事件の間にはさまつて、朝鮮邊境の風雲いよいよ急、我が國力大陸進出の鋭氣ますます充實。かやうな社會情勢の下に我邦青年の元氣がまづ國内山々の踏破に注がれたのも蓋し自然の勢でありませう。かやうな氣運に――山のぼり流行のそれに――はらまれて來たものと、今更ながら追懐されるのが、もともとこの日本山岳會の育ての親であられて、また現に諸君が會長として推戴してゐられる高頭先生の日本山岳研究でありませう。かやうに諸君の前で、しかも高頭先生御本人のすぐ御面前で、述べるのをぶしつけだとお聞取りでないやうに希望しつゝ、私は申しますが、先生の御著述「日本山岳志」が出版されたのは明治三十九年二月。この大著こそ日本に於ける山岳の科學的研究の一大記念作として幾久しく屈指せらるべきもの。それは私風情が今更申上げる迄もない事。先刻食堂でおもてなしをいたゞいた際、幸にも先生のすぐお隣の席を與へられたので、色々と近しくおはなしの好機會を得ましたが、實はその四月まで、私は先生の御郷里、越後長岡の中學校で英語主任や教務主任を勤めてゐた。で、私もまた、自分の方では、お親しみをもつてゐたのが高頭といふ御姓とあの御著述。但しあの書物は高頭式著とあるので、この著者は或は御親戚の方かといふ疑をも少しはもつてゐた。で、先刻その事をお尋ねした處、いや、式といふのは自分の最初の名――式太郎の式で、自分の家の代々の仕來りに隨つて、自分も家督相續の時に、仁兵衛と改めたとのおはなし。すれば、今年から數へて丁度三十年前に、先生と私とは、同じ長岡の町で、所謂袖の振り會ひ位の御緣故はあつたもの。お目にかゝるのは今夜が初めての事でも、私の方からは同じ山岳愛を通じての舊知。これまた一の奇緣と申し得られませう。

處が、承れば、この日本山岳會が城、高頭、高野、梅澤、小島、武田、山川その他諸先生の御盡力によつて創立されたのが同じく明治三十九年の事。それを今夜のおはなしの中心本尊、ウェストン氏の方から見れば、彼がその第二回目、日本滯在四ヶ年間の南アルプスの探險跋渉を終つて、再び英國へ歸へられた一九〇五年の翌年の事。いやそのウェストン氏がとりもなほさずこの山岳會の生みの父親で、そして高頭會長その他の方々がまたその育ての母親であられるとの事。これらの古事を今夜御列席諸君の前に持出して、かやうな再吟味を御一緒にする趣意は勿論私自身の單なる追懷趣味からではありません。寧ろ近代日本に於ける山のぼりの第二期、即ちScientific Mountaineeringのそれ、しかもその組織化の頃の歴史的材料としてである。例へば、ウェストン氏が北アルプス旅行に於いて、その實行を、輸入しかつ示された、科學的な山のぼりにこの時初めて與へられたのが日本人自身の勞作になつた一大書冊と、また日本人自身の團體的結成になつた一大協會とであるといふ見方からであります。

この山岳會中堅部の御一人として令名ある立教大學の山岳部々長、辻教授の「思ひ出」(本會報三十七號所載の)によれば、「大正二、三年頃が日本登山界の一の黄金時代であつた」。それはこの會創立の後八、九年目のこととて、一讀成程と私等にもうなづき得られる。同氏の記事によつて、また推察し得られるのが其の頃日本青年學生の間に流行して來た科學的山のぼりの初期の樣子である。丁度この頃ウェストン氏の方は彼の第三回日本滯在中で、再びやつてゐたのが北アルプス旅行。但し彼の神河内を根據としての槍、燒、穗高等への山遊びに、同行したのは武骨な私ではなくて、彼の朗らかな令夫人。「神戸の考古學者」はその後北海道で、その同僚から學位を貰つた。それが即ち「草鞋博士」。彼は此の頃臺灣の阿里山のぼりを濟して、その絶頂から飛んで行つて、今度はゆきかへ

り共に極めてサイエンチフィックに越えたのがアメリカのロッキー山。但しこの旅に彼のはいて行つたのはあのTourists' Car の汽車わらぢ。

茲で、丁度二十年をもう一飛び飛越して、今年の夏の事。私が三男を連れて、いや、またもや連れられて、登つたのが田部先生の御領分、秩父連峯の中でも一番の奥、この山脈の西の突端、金峯の頂き。道は甲府から昇仙峡を溯つて、あの上黒平(カミクロビラ)に一泊。翌日楢峠、水晶峠を越えて、御室小屋から、あの急勾配をよぢのぼつて、絶頂の五丈岩に著。豫定はそこから北面、直に信州側の股澤を下つて川端下(カハヘゲ)經由、千曲川べりの秋山へ出るのであつた。然るに何様八千五百尺の高山、四方の展望流石に絶佳と見てゐるうちに、吹き出した強風に横飛びの細雨、身に當る事石つぶての如くその傷さと寒さとに五體はわなゝき、手足はちゞかむといふ形勢不穩。おまけに北への下り途不明。とうとう我を折つて、私等は大日岩から左折、降つたのが増富方面。丁度同じ日(八月二十四日)の朝、國師ヶ嶽の小屋を出て、金峯へ峯づたひの途中に、あの烈風に出喰はした一人の健脚家、少し遅れて私等と同じ道を大日岩へ來て右折、頑張つて降りたのが急傾斜の谷あひ。あの大日岩の手前に立つてゐた道標が「増富村役場」と公式に銘を打つてあるに拘らず、甚だ misleading で、私等も一寸迷はされて、彼是半時間の徒勞をした。然るにこの後續の勇士はこの道標を信じて、川端下への豫定遂行の向ふ意氣強く、私等があとがへりした右手の細徑をくだつてしまつた。その翌日私等は信州峠を越えて、あののんびりした牧場の下り道に自身もまた放牧された氣持を味ひつゝ、あの縣道を東へ進んで、秋山の近くに來た時、向うから來たのが一人の青年。其のリュックサック姿で一目直に山岳人と知れたが、それと同様にこちらの草鞋、脚胖の愛山姿を一見すぐに同志同好の仲間と見て取つたらしく、双方同時に立留つた。時に彼の語り出した話の續いた事確に三通話以上。聞けば、これこそ昨

日後續の勇士で、あの大日岩右手の下り口を突貫したおかげで、途中のグロまたグロに顏や手を引掻かれ、そして其の下の苔蒸す岩からすべり落ち、足の小指を痛め乍ら、かへすにはかへされず、夕暮にはなる、元來單身獨行の氣樂さがこんな時には進退兩難のもととなつたが、それでも、とうとう遂二無二おりてしまつたとの事。その手に卷かれた數ヶ處の繃帶、その兩頰につけられてゐた沃度チンキに膏藥の片々、さてはコートやヅボンの裂けめ、そのいづれもが歴然と語つてゐるのは昨日遭難のあとかた。見ればその手に携へ、その背にかつぎ、その腰にさげてゐる辨慶の七つ道具は皆これ近世式サイエンチフヰックな武具。その武裝姿を見て、私は合點させられた、私等のと違つた時代――山のぼりの新時代――サイエンチフヰックな武裝時代、しかも、其の全盛期が茲までやつて來たな、しかしそのサイエンチフヰックな登山にもやはり伴ふのはアトヴェンチュアだな、そして役の行者時代と科學的登山時代といづれに於いても、冒險的探險は等しく壯快だな等々……と。處が、この科學的冒險家は一方に於いて私の印象觀察などには一切無頓着で、他方に於いて自分自身の昨日の苦痛などは素知らぬ顏で、その言葉と樣子とにサイエンチフヰックな確信をたゝへながら、更に一歩踏み出して來て、語り續けた。「私はこの一週間の休暇に、秩父の四十二山に登るのです。今日で、もはや三十幾山通りました、あとは、もう六つです。今夜は御所平泊り、明日はあの瑞牆（ミヅガキ）山にかゝります。あの關東一の岩磐の名山を越えなくちやいけませんや。そしてあの瑞牆山から再び金峯を越して、乙女鑛山へ這入つて、それからそれから」と立て續けに三つ四つの山の名を列べて、「それから銀座の勤先に歸ります。山は二十代の事ですな。私も三十代になれば溪谷まはりをしますよ」と快辯滔々。其を聞いてゐる中に、私の胸にわいて來た快感の對象は山岳愛がかやうに學生層からサラリメン階級に浸潤してゐる事實であつた。そしてこの勇敢な山岳人のおはなしを科學的登山時代の一シムボルとして諸君に御紹

介する時、私はひそかに想像したくなります。彼はもしもこの山岳會員の御一人でなければ、少くとも諸君の感化の下に生長された健兒の一人であらうと。

只今かやうな思ひ出ばなしを申上げる時、私には初對面の諸君の半數以上の方々は、察するに、科學的登山家であられませう。さやうな近代的山岳人の代表團體であられる、この御會のお招きをうけて、私どとき古代人が昔し話をすると、何だか私もまた時勢に呼びかけられて、あの Old Cave から連れ出されて來たものゝやうな感じがします。その招かれた客分、私の方から申し述べる事のぶしつけをお許し願ひますが、今や日本の山のぼりが這入つてゐるのはその第三期、卽ち Reminiscences のそれではありませんか。凡そ世間の物事はその始めが Adventures で、次ぎが Science そして Reminiscences に入るといふ順序で進み行くもの。これは Alpinists ばかりの徑路ではない、すべての Arts の進歩がその通りでありませう。しかしそんな理論めいた事よりも、もつと手近い證據材料の一つとして私の最近面白く拜見したのがまた辻教授の御文。その冒頭第一に曰く、「かれこれ六七ヶ月前、日本山岳會の耆宿諸家が殆ど總動員の形で語られたのは主として本會創立當時の思ひ出ばなし」と。この御文の日附、昭和九・六・一五から數へてみると、玆の「六七ヶ月前」とは昨年末から今年頭にかけての事。この記事によつて判斷しますと、昨今この御會での主要な、また多數の、話題は思ひ出式のものであつたらしい。その追懷的傾向が逸早くもウェストン氏の身邊に集つたと見えて、諸君の機關誌「山岳」昨年十一月號に掲げられてゐるのが黑田氏の御編纂物「ウェストン氏の杖の跡」。この一覽表は、私にとつても大變によい手引となつて、そのお蔭で、四十年前の思ひ出がまづ第一に私自身にはつきりして來ました。かやうな個人的價値ばかりでなく、この御表が豐かにもつてゐるのは、もつともつと廣い意義——時代標徵的のそれでありませう。黑田氏のこの御

編纂物を右にして、また上に掲げた辻教授の御文を左にして、此等二つを眼前に列べて見ると、そこに一層鮮かにあらはれて來るのが我々の山のぼりが昨今著しく思ひ出氣分を帶びてゐる事でせう。そしてその一ケ年の終りにお呼び出しになつた私への御希望もまた思ひ出ばなし。私のやうな山のぼりの第一期人が第三期人に早がはりをして、今夜この席へ參りましたのも實はこの時勢の進展觀に勇氣づけられたからであります。

さてかやうな後押しを頼みとして、諸君の御前に立ちますと、私の想像の面に新たに開けて來るのが山のぼりの第四階段、卽ちAdventuresとScienceとReminiscencesと、此等の三要素が渾然と相抱合して、いづれにもかたよらないで、そしてまた、いづれをも取り落してゐない大成圓熟期であります。玆に三度辻教授のお言葉を借用しますが、――同氏と私との間にある同縣、同僚、また同山岳愛のよしみから、同氏幷に御一同のお許しを願つて置いて、以下のお言葉を借用しますが――所謂「若き生活者」の前に將に來らんとしてゐるのは「積極的意義ある思ひ出」のうちより出て來る「新らしき飛躍のためのポーズ」、並に其の中にほのめかされてゐる山登りの「轉形期」そのものではありますまいか。左樣なよろこばしい時代となつてしまはないうちに、卽ち今のうちに、皆樣のお招きを幸ひとして、御一同のお聞きを願ひたいのがあのウォタア・ウェストン氏の一同行者として、私が實地にのぼつた山々に對する山々の思ひ出であります。

六、蓮華のぼり

さてウェストン氏の第四回目北アルプス大旅行の踏出しはさきに申したやうに、親知らず、子知らず。諸君の皆よく御存知の通りに、玆はあの信飛山脈――明治二十七年頃にはさう稱へられてゐた――あの大山脈が突然日

本海へもぐり込む處で、そこの寫眞があのハミルトン氏の撮つた最初のもの――少くとも私自身の所藏してゐるうちで最初のもの。それが岡村氏譯、田部教授御校閲の邦譯書の二四八頁に出てゐる。この御影石の絶壁の裾、北海の白浪が寄せて、碎けて、飛んで、散つてゐる處、――流石に昔の北國第一の難處を想像させる處へ私等が行つたのは七月十九日の午後。この日の天氣都合も上々吉、糸魚川から來て、あの「如砥如矢」の國道に立つて、約一百七十メートルの直下に、私等がのぞき込んだのは、まづ子知らず、それから親知らず。此等の兩不知と無難に知り合になつて、此の行の幸先よしと喜びつゝ歸つて其の夜一泊したのが糸魚川の「古川屋」。

翌日あの姫川に沿うての松本街道をさかのぼつたが、さあ是から先の道筋のこまかいお話しは私にも出來ない。なにさま二十二才の書生が、神經衰弱保養旁々同行したので、其の時は勿論の事、四十年後の今夜めがけての野心も何もなかつたので、日誌など無論つけてゐない。日誌と云へば、日本山岳會御發行の「山日記」を昨年以來私共一家は至極重寶がつてゐますが、あんなのが一八九四年に出來てゐたら、私のおはなしが這入つて行くのはもつともつとこまかい處でせう。然るにそんな山日記がないから、私が今夜拾つて歩くのは自然に大きい處。處が、幸にも大所川といふのがチャント地圖にのつてゐる。それはウェストン氏の記事によれば、糸魚川から約十五哩ばかりのところ。その大所川の谷を南へ登つて、私のたどたどしいながらの記憶によれば、最後の小村落「木地屋」を過ぎて、次ぎに「八丁坂」を越えて、めざして行つたのが蓮華溫泉。

その溫泉安着の前晩の事、私等が泊めて貰つたのはたしか「大所」村の村長さんの御宅。この屋敷の主人、長倉さんの事を始めとして、ウェストン氏がこの書物に淡泊に、卒直に、別段の想像的色彩を加へないで書いてゐるのは山間村落の風俗――まだ外來文化の惡影響を少しもうけてゐない生地のまゝの、單純そのまゝの日本人生

活の實狀です。そこが卽ちウェストン氏の叙事・記述に價値のある處でせう。日本の山々と山人とを叙する時、彼の筆は双方倶に、そのありの儘に――いや彼自身の見た儘に動いてゐる。西洋の文物に對する心醉に伴ひやすい對東洋蔑視の心持が微塵も見えないし、さればとて認識不足の好奇心から出て來る過度の買ひかぶりも毛頭あらはれてゐない。例へば、彼の至極あつさりした記事のうちから、彼をうれしがらせた日本人の名前を拾つて見ると、大所の巡査、山崎さん、同じ村の村長、長倉さん、中尾の獵師頭の中島、常念岳の麓、岩原の村長、山口さん、飛んで御岳へ行くと、その頂上の祠を守つてゐた神主の栃山(トチヤマ)さん等々が出て來る。

處が、此等名士の間に數へられて、その名前が度々この書物に出されてゐる一日本人、しかもウェストン氏のアルプス旅行に同行した日本人が數あつた筈だのに、殆どたゞ一人、その名の出て來るのは、かく申す浦口文治。まあ一寸辛棒して、私の自慢話をお聞きください。勿論私自身の方では、國民代表などゝいふ大それた計畫は一切なしに、たゞ山ずきと保養氣分とで彼に同行したのですが、相別れて數年、しかもその本國で書物をかく時まで、その名を覺えてゐてくれて、しかもその書き振りが友達的で、ハミルトンが浦口がとミスタアも君もつけてゐない處が私には嬉しい、またほこらしい。この氣持は多分松方さんあたりに(と申すのは特別ウェストン氏とお親しいやうだから)十分共鳴していたゞける事と察します。對ウェストン一人に限らないで、其の他多くの外來紳士に對してもまた、相似た感じをおもちの方々が御列席の諸君中にも現在おありでせう。イヤ、そんな國民外交談は打切りとして、今夜の本題にかへりませう。上に數へたやうな田舍の人々の親切振りに接して、山々のはなしを聞いてゐる中に、ウェストン氏が感じたのは日本の風俗のうるはしさと日本人の氣質のうつくしさ。彼の見た日本は東洋の君子國、世界に紹介してはづかしくない紳士國。但し彼にとつて、この國の代表的の君子、紳士と

いふのは勿論袴を着けた人士でもない、また四書五經の素讀や外來宗教の早呑込でこはばつてゐた階級でもない。極めて平民的な、またその職業から云つても、寧ろ下層的な人々。此等その名の知れてゐる人々以外に、またその名の知れてゐない君子人、紳士人が數多くあつて、ウェストン氏の心を今なほ我邦の mountain villages に引着けてゐるに相違ない。でなくば、あれほど根氣のよい骨折を、而かも隱れた貢獻を我日本の爲めにしてくれる筈がない。このウェストン氏にとつて、その名ある日本の友達の第一人者が今し方申した山崎さん。この巡査さんは「なにあなたがた蓮華のぼりをする、ぢや、私も一緒に行きませう」といふ調子で、眞に氣輕に同行してくれた。果してそれが新潟縣廳の命令であつたか、この邊の警察署長が許したのか、どうか、そんな事は判らぬ。まさか、西洋人が來るから、それとなしについて行けといふのではなかつたでせう。そんな事は私等に無關係、とにかくありがたい事に、山崎さんがついて來て呉れた。處が、村長長倉さんの家に泊つた夜の事。一つの逸話がある。ウェストン氏は持參のハンモックに安眠してゐたが、丁度その下に山崎さんが臥してゐた。夜なかに寢返へりしそこねて、この倔强なアルピニストの體重がヅシンとこの巡査殿の腹の上に落つこつた。「イヤお邪魔しました」といふ山崎さんの挨拶を耳にして、びつくりしたのがウェストン君。自分の方が他人安眠の妨害者であるのに、その被害者がまづお邪魔のわびごとをする！なるほど彼の驚いたのも、無理はない。この無邪氣な山崎さんに進呈してもよいのは日英親善史上の有功章でありませう。

翌日早朝出發、前に云つた通り、路を八丁坂に取つて、迂餘曲折、幾度か上つたり、降つたりした後、夕方五時頃やつと蓮華溫泉着。そこの溫泉は清澄でいゝが、その設備は甚だ原始的。彼の書物に載つてゐるその寫眞の通りで、第一、浴場を蔽うたのはたゞ雨を遮ぎるだけの屋根、四方は吹き拔けで、空氣の流通が理想的。次に、

部屋に這入ると、そのしきりは荒板を横にぶつつけたまゝ。隣りの部屋の蠟燭の灯がちよろちよろ見える、と云へば優雅らしいが、そこのお客人は大抵下の村々から來たお百姓。農閑期の骨休めに銘々米を二、三升擔いで來てゐる同勢。宿泊料は部屋代と風呂賃と合計一日四錢、十日遊んでも總額四十錢。これほどに原始的な木賃制度は私自身にも初めての經驗。木賃宿と云つても、薪炭は無論無料・百姓の自炊連中が一年かゝつても使ひ切れぬ程の燃料が浴場の近くに散らばつてゐる。私等の飯は勿論溫泉宿でたいてもらつたが、一寸面喰つたのはそれ醬油、それ砂糖と一々味つけ材料の注文命令を發しなければならぬ。それはまだよいとして、さて困つたのは此等の材料の注文分量のさしづ。へイお砂糖、二錢分ですか、三錢分ですか、へイお醬油、五厘がたあげませうか、一錢がたにしませうかと尋ねられる。その答案の出し方を私は山崎さんに相談したり、宿の主人に加勢してもらつた。其の事をいまだに記憶してゐる。かやうに簡單で、經濟的な溫泉場だから、お客さんがたの農村青年諸君は至極ノンキ。山に來たとて疲勞など感ずる階級ではない。寢食の時間のきまりなど當然ありつこはない。浴場でも部屋でも、徹夜の放歌談笑。土地が既に五千尺以上だから自分の聲の高いのに遠慮など全然無用。これにはウェストン君も困つた。ハミルトン氏は風邪發熱。その靜養妨害を私から交渉する迄もなく、れつきとした巡査殿が一行中にゐる。その西洋人の顏色や山崎さんの存在などを此等の田舍の人々はちつとも感じない。困りながらもウェストン氏がこれほどの無邪氣さ・無遠慮さに對して、とうとう覺えて來たのは一種の好奇心であつたらしい。今から丁度十年前、私の次男、健二が白馬から峯づたひに糸魚川に出る途中、この溫泉場を通つた時、見ればその設備は自來三十年間に大したかはりがないらしいとの事。今夜こんなお話しをすると、私はもう一度ウェストン氏と同行して、あの若い衆連中のあたり構はぬ夜どほしの野良歌を聞いてみたいやうな氣持がします。

翌日ハミルトン氏は熱氣のため、登り方を控へられたので、ウェストン氏と私と山崎さんと、別に案内人夫一人、一行四人で、西南の谷へ下つたり、向うの雪渓を上つたり、漸く蓮華銀山の製錬所へたどりついて、それから幾峯かまはつて、とうとう極めたのがあの大蓮華の頂上(と信じてゐます)。そこからの展望は私の主觀著色をまじへないで、かへつてウェストン氏自身の筆のあとをたどる方がいゝと思はれる。同じ趣意で、あの笠ヶ岳の登攀、常念ヶ岳のぼり等の實景描寫もまたウェストン氏の言葉に讓りませう。但しその第一引抄の前に加へたいのが私の一言。今夜のおはなしの用意として、私が一通り讀んでみたのはウェストン氏の第四回目北アルプス旅行の紀行。原著が一寸手に入りかねたので、たどつて行つたのがこの譯書の記事。で、私もまた、これはこれはとばかり敬服させられたのはその譯者岡村氏と校閲者田部教授と、兩先生の細心なお筆附き。特に小島先生の御附言中にある「校閲の役を引き受けられた、田部重治君の表面に現はれない努力」といふ御一文の奥深かさは私等の推測に餘る處があるのではありますまいか。そんな事は斯道の苦勞人仲間がうなづき得る處でありませう。とにかく一讀明快なこの記事によつて、御同樣にあの蓮華絶頂の展望を想像しますと、『此處からは雄壯で茫漠とした風景が眺められる。南に當り、甲州山脈の彼方、百哩の向うに、富士のなだらかな火口丘が聳えて居る。もつと間近には、南に當り、立山や主山系の雪鎬を附けた巨峯が見える。北西には黒部川の急流が日本海へと閃き流れ、又富山灣の西部の波が長い能登半島の海岸を洗つてゐるのが見える。東に當つて、直ぐ眼下には、雪に掩はれた野生的な峽谷が嶮岨に切り下り、又一つの雪の尾根が西南の朝日岳と云ふ秀麗な岩峯に續いてゐる』(邦譯書二五四——五頁)。この蓮華溫泉からの下り途はあの千國揚(チクニアゲ)の方をとつて、また大所から松本街道へ出て、途中下り瀨に一泊。それから四ッ家、青木湖、木崎湖を經て大町に入りました。

七、鹿島槍のなげやり

私等が大町に泊つたのは、木、金、土の三日。どうしてそんなに長逗留したのか。其事はこの書物に一切書いてない。で、私の記憶をさぐつて、そして推定してみると、ウェストン氏の目がけたのはあの鹿島槍のぼりにあつたらしい。彼が宿屋で私を通じて確かに頼んだのが針の木峠行きの案内者。ところが、時は丁度七月の下旬、所謂蠶時で、案内人になつてくれるものが中々ない。近頃では、どなたでも大町の對山館宛に葉書一つ出して置かれると、山案内がちやんと待つてゐて呉れるさうだが、四十年前にはどうしてそんなものぢやない。ウェストン氏の針の木峠越えといふ交渉は中々熱心であつた。が、宿屋の主人が幾度か客間に來て、丁寧にあたまをさげて、斷つた。その理由は案内人がどうしてもありません、そのうへ針の木峠のすぐ先きのかけ橋がこの頃の出水で落ちてしまつて、とても渡れませんといふのであつた。しかし考へて見ると、ウェストン氏は、その前年、千八百九十三年に長野から來てこの峠を越えて、立山溫泉を經て、立山、雄山と登つてゐる。前年と同じ道をまた繰返す筈がない。此の年の特別計畫は the Japanese Alps from end to end を北から南へ大觀しようといふのだ。隨つて、そんな無駄足を踏む筈がない。この時、その針の木峠といふのについで、彼の口から出たのが槍、槍といふ言葉。それが私の頭に殘つてゐる。それを種にして私が推察すると、あの穗高の奥の槍には茲から餘りに遠くてとても行ける筈はない。その上に、その槍には前年既に登つてゐる。で、この時槍と云つたのは鹿島槍の事でせう。茲で申す迄もなく、鹿島槍は後立山の主峯で、蓮華から下つて大町の方へ來ると、第一に目に立つのがこのやり。この鹿島槍へウェストン氏は茲から登らうとしたのでせう。これは私の推定です。處が、丁度昨日お出

會ひした東京外國語學校の大岩教授（この方はかくれた登山家で、その足跡が中々にお廣い、特に立山地方の事には實に詳しい）に、ウェストン氏の鹿島槍登りといふ計畫を話した。すると、同教授の云はれるに「僕が今聞いてもそうだと思はれる。針の木峠から鹿島槍に行く、途中にキレットがある。近頃は棧道が出來てゐるといふが、その頃は勿論ない。そのキレットを綱で降つて、またその反對側を登るだけに一日かゝつたといふ處もある。大町の宿の主人の云つた橋も立山への途中のではなくて、鹿島槍への途中のものだらう。またウェストン氏ほどの探險家があの鹿島槍を見逃がす筈はない。僕もあなたの意見に同意する」と。また田部先生や冠先生のおはなしにも「鹿島槍とは鹿島村の槍といふ意味で、この鹿島槍をさして、大町の人々はたゞ槍と云つてゐるのだ」と。これで私の推定に幸に與へられたのが此等諸權威者の證明。鹿島槍のぼりはウェストン氏のやりさうな事とまづ決定しました。が、しかし天候は私等をして終にこれを事實上、投槍にさせてしまつた。

八、三度目に登攀の笠ヶ岳

大町から眞直に松本へ行くのに、今頃は電車で確か一時間十分で充分だ。しかし四十年前にこの山岳人一行はあの坦々たる街道を大股に、但し、暢氣にぶらり〳〵と一日がゝりで歩いた。その大股の、但し、暢氣なぶらり〳〵のうちからこそ、出て來るのが山行の氣分。市内の鋪道を行くやうな氣忙しい、しかも小刻な足取りには、とても山の氣分を味ひ得べき餘裕のありやうがない。そんなケチくさい山登りに伴う思ひ出では、精々の處、『山へ行つた、登つた、歸つた、よかつた、以上終り。』ぐらゐのものでせう。私は時々、朝はやく、品川驛前から白金經由のバスに乗るが、同乗客人のなかには、わづか一停留所先きの新坂上でおりるのがある。それが、多くは小

學校通ひの坊ちやん達、いづれこの邊に屋敷構へをしてゐるブルジョアジーの子供であらうが、その清楚な身なりに、小形のランドセルを背負うた姿は、見るから凛々しい。しかし彼等の乘車時間は、あの見事な鋪道の快走で、ほんの數十秒。あの坂下の停留所で、待合はす時間の方が、屢々長いでせう。道理で、彼等は乘る時も、降る時も、チョコ〳〵セカ〳〵してゐる。彼等の足附きや、神經の働き按排が、私の目につくと、そゞろに感じさせられるのは、これから先き二代目、三代目の都會人の人柄は、どうなりゆく事やらといふなさけなさ。どうぞ、諸君、こんな小僧どもを一日も早く日本山岳會に入れて、諸君の山あるき氣分で、此等未來の東京市民を濟度してください。

いや、これはわきみちばなし。どうも山に多いのはわきみちですな。で、お互に本道へかへりますと、あの時、ウェストン氏と同行のお蔭で、悠長に歩き通して、その日の午後早くも着いたのが松本。茲は、その頃も今日この頃と同樣に、日本アルプス中の所謂 The heart range への探險に誘へ向きの根據地。茲を出發地點として、ウェストン氏のことし第三回目の探險行が目がけたのはあの笠ヶ岳。この一山のぼりのみに事實上費やされた日數は前後一週間。加ふるに、この行の出發に際し "If at first you don't succeed, try, try again" といふ古い歌を口ずさみつゝ、自ら勇氣づけたウェストン氏にとつては、この夏の成功に面して彼は確かに衷心に欣喜雀躍したでせう。彼に同行した當時の私自身はまだ若かつた。また努力的大山のぼりの體驗を別段にもつてゐなかつた。隨つて彼の立場と抱負とに對する共鳴力がまた淺かつた。しかし今度のこの思ひ出ばなしのお呼び出しを機緣として、再びたどつて見たのが彼の足跡。すると、そのお蔭で、私にも幾分か察し得られるのが彼の尊敬すべき苦心慘澹と、並にそれに酬ひられた天佑に對する彼の感謝の念とである。元來喜怒哀樂の表現に於いて、米國人ほど

には示威的でない英國人として、とりわけ日常の生活態度に於いて、沈着さと端正さとを貴ぶ聖公會派の一教役者として、彼の前夜の窮境に於ける力落しも、またその翌日の素晴しい登攀に際しての得意さも俱に彼の溫容を動かす處が割合に少なかつたやうである。但しそれは皮一重外側の事、人間ウェストンの胸の中は蓋し登山の體驗者たる諸君に於いては、その兩面ともに充分にお察しが出來るでせう。

この笠ヶ岳のぼりの絢爛たる記事は彼の原著の第十二章に滿ち溢れてゐるが、梓書房出版のこの譯本に於いて、それが占めてゐるのは實に四六版の三十頁。その長さばかりが、玆に注目すべきではない。その筆の運びの鮮かさと、並にその中身に對する著者自身の感興と、此等の双方に於いて、この章は蓋し全篇の壓卷と評するもまた可なりでせう。「この笠ヶ岳はどうしたものか、僕にはまだ御緣がない。それを殘念に覺えてゐる。」といふ前置きをして、田部先生がくりかへし御所望くださつたのが私等一行の笠ヶ岳登攀談。また私自身がウェストン氏のこの夏の大旅行に參加するやうになつたのも前二回引續いて失敗したこの山の探險を今度こそは敢行するぞといふ彼の苦心の結果の一つであつた。この山と私自身との間にあるのはかやうな因緣。あの日本アルプスの群岳連峯中で、見上げる度毎に、私にとつて魅力のまして來るのはあの大陸的岩山の豪壯さと雄大さとをもつてゐる穗高の山々。しかし私自身にとつて四十年來の思ひ出の最も深いのはむしろこの笠ヶ岳。さやうな因緣に引き著けられて、昨年の夏、三人の兒女同伴で、再び遊んだのがこのおやま。隨つて自然の勢として、今夜のおはなしに於いてもまた、まんなかの絕頂となるのがこの一章。

今でこそ、松本から西に向つて電車で一時間そこそこの距離にある島々——日本のアルピニスト仲間にかなりのなじみをもつてゐる島々も、その頃はあの野麥街道から少しく北へそれてゐて、まだみすぼらしい小村落であつ

た。その頃かなめな宿場はむしろあの橋場（ハシバ）――今では島々と一續きになつてゐる橋場で、その名稱が示してゐるのはこの村が既に山の谷あひにある事と、またかやうな山村に於いて最も大切な建築物は橋梁である事とでせう。その橋場の名物――雜炊橋の寫眞がこの書物の一九二頁に出てゐる。そこで中食を濟した後、私等が稻核（イネコキ）を經て、その夜一泊したのが大野川。

『大野川に着く前の終りの二三哩の路は、澤山の場所が頽雪や地辷りや洪水で壞れてゐたので、左岸へ渡り、普通は木樵や炭燒の小屋へ行く時だけに使ふ舊道に沿つて登つた。あちこちで、下から支柱で不完全に支へられた二本の搖れる松材の上を越え、絶壁の面を横切り通つた。私の後に居た仲間の日本人が滑つて、數百呎下の湧き立つ急流へ、眞逆様に墜落しようとするところであつた。幸ひなことに、彼は猫のやうに敏捷に、一瞬の中に體勢を取戻した。併しすつかり眞青になつた彼の頰は、身内に感じた驚きを示してゐた。』

この書物（邦譯書――編者）の二六五――二六六頁に叙せられてゐるこの九死一生の難を、"With cat-like agility" 所謂猫腰のお蔭で、危機一髪の處で、はづし得たのが、私であつたと解する讀者もある。なにさま原文記者御自身が遠く英國にゐられるので、この推察の當否を急に尋合せる事が出來ない。が、常識的に云つて、こんな足滑べり "a slip" はこの邊の路を踏み馴れた玄人の荷もち人足等にはまづなかつたであらうし、また玆に所謂「仲間の日本人」の原文 "a Japanese companion behind me" は一日本人同行者で彼の背後に續いたものと解し得られるので、これを普通の人夫とは受取れないといふ風に考察範圍を縮めて來ると、この際の墜落未遂者は多分私であらうとなつて來る。

處が、私本人に一切ないのがそんな記憶。私の山のぼりの經驗に於いて、覺えがちなのがその快樂感、そして

寧ろ忘れつぽいのがその苦痛感や危險感の方。隨つてあの大野川を中心として、私がたえず思ひ出すのはその手前のがけ崩れの難場ではなくて、むしろそれより數里先きの阿房峠の下あたりにたゝへられた溪谷美である。七月三十一日の朝、私等は大野川の古風な宿屋（奥田屋）を立ち出でゝ、あの幽邃な溪谷を溯つて、但しあの白骨溫泉へは行かないで、また勿論中ノ湯まではまわらないで、今ははや餘り人通りのなかるべき山徑——其頃ではそれが唯一つの通路であつた——を辿り辿つて、あの阿房峠の上り口へ來た頃、私等の感覺にしみこんで來たのはあの紫外線の多い日光の膚觸りの心地よさ、俗塵を微塵含まぬ谷風の爽やかさ、快活に流れ下る溪流の清らかさ、兩岸にこんもりと茂つた立木のおちつき、さては我等のわたりを出迎へてくれる丸木かけ橋のおのづからに風雅な趣等々であつた。こんな場所に來ると、私等のうち誰が言出しても、日英米の三國協調が立所に、成立して、一憩ひしたあたりの風景はいまだに私に忘れ得られない。この寫眞（この書物一八六頁對向所載の）に落ち著きよく這入つてゐるウェストン氏と私との山旅姿は私にとつて幾久しくなつかしい思ひ出の好材料。もしもその頃ではまだ口にするさへ贅澤であつた物足らなさを口外するならば、それはたゞ一つ。もしもあのセルフ・タイマアがあつて、あの背高いハミルトン氏——いつも蔭まわりの役目を一行のために勤めながら、不愉快らしい顏色を見せられた事がたゞの一度も思ひ出されないハミルトン氏——後には「中部日本の監督」として、この邊の山々谷々までをも、その敎區内に包容されてゐたハミルトン氏——其人の見上げた姿をも、この寫眞の中に一緒に、傳へ得られたらうにといふその一事ばかり。

八月一日朝、平湯溫泉出發、高原川の岸を下つて、途中一轉、神坂峠を經て、一行蒲田村に着。但し目的の村には安着したが、それから先きはかなりに多事であつた。第一に宿泊豫定の甚兵衛さん方では——前二回のなじ

みに係らず、泊りをことはられた。隨つて山への案内御斷りもまた言ふ迄もない。流石のウェストン氏も困りはてた。彼は書いてゐる、

『村の神社に通ずる嶮しい段々の上に、打ち沈んで腰かけてゐた時、私達はまたも無駄な議論をした。さうしてすつかり失望して、立去らうとしてゐた時、側に見てゐた一人の男が私達を泊めてやらうと、云ひ出してくれた。彼こそは困つた時の友だつた。そして彼が色々と親切に氣を付けてくれたので、私達の元氣も出て來た。』

と。玆に卒直に告白されてゐるのがこの一行の氣持。それは山岳探險の經驗者が誰でも直に同情し得る處でせう。かやうにして私等が幸に案内されたのが村の溫泉宿。その途中で出會つた若い獵師が山の案内を引受けてくれた上、早速連れて來たのがその頭分の中島市右衞門さん。そこで直ちに開かれたのが五頭會議。向ふが獵師二人に、こちらが異人二人。その間に立つたのが私。當然の豫備交渉が長々と續いたうちに、すつかり解つて來たのがこれまで三ケ年間ウェストン氏の笠のぼりに對して邪魔となつてゐた此村の人々の迷信のかたまり。中島さんは打開けてくれた、

『蒲田の人達は、仕方のない程に迷信的な人間です。笠ヶ岳の淋しい絶壁や峽谷には、力强い山の精が歩き廻つてゐると信じてゐます。もしもこの谷間に住んでゐる人達が、穀物等の收穫時に、あのお山の境内に見知らぬ人を案内して行つたなら、きつと破壞的な嵐がこの谷を襲ふに違ひないと信じてゐます。そして彼等はこれを、聖瀆の罪を犯す事を助けた人に歸して了ひ、それにふさはしい罰を直ぐ加へます。』

と。要するに、蒲田の村人達は外國人が笠ヶ岳に登る事をこはがつたので、そのもとはこの八月の嵐月にお山を汚がすと、山の神樣の祟りが來て、それで村中の作物は臺なしになつてしまふといふ心配。だから、この村の人

人には知らさないで、私等隣村中尾のものがこつそりと案内しようといふ事。この目出度い決定を見ると、今まで控へてゐた私等三人の胃の腑が急にその活動を開始して、特別にうまかつたのが此夕のお料理——あの谷川で取れるイワナの御馳走。次に、明朝は早く出發と云ふので、其夜は割合に早く寢た。處が、十一時頃に、ゆり起された。私等の寢耳に水と持出されたのが「どうもこの村の衆が承知しません、お山登りは中止にして戴きたい。」といふ新交渉。これには困却しながら、ウェストン氏は頑張つた。彼にとつては、それこそ a case of "Now or Never" で、今度すてたら、「笠ヶ岳」はいつ自分のものになるかわからぬと考へたでせう。この(登攀)中止案にいつかな承知しなかつた。一方の蒲田人は頑固、他方のウェストン氏は頑強。此等二つの「頑」の間に挾まつて、幸にこの交渉を決裂に陷れないだけのお役を勤めたのが私の貧弱な英語。もしも通り一遍のガイド君式に「甲は頑固で、山に行けないと云ふ」、「乙は頑強で、行くといふ」、「あとはうるさい、俺のもうけにならぬ、以上終り」で、横向いてしまつたら、この會商は双方全然の行詰りであつた。然るに、双方のこまかい言分を一々正直に傳へて、出來る限りこの談判を纏めたいといふ氣持が私にあつたのでせう。こんな思ひ出話をすると、それに伴つてわいてくるのはウェストン氏の笠のぼりの成功に私もまた舌さきだけの一役はつとめてゐるなといふ滿足感。

處が、彼の成功に對するもつともつと大きな貢献者が別にあつた。彼の功勞に比較すると、私など迚も鼻さきを出されない。その功勞者はその名前を上にあげて置いた中尾の獵師頭。彼の智力と膽力とのお蔭で、私等はこの村を引拂つて隣り村へ宿がへをして、そこから山へ出發する事になつた。時間は夜の十一時過ぎ、蒲田の村人の大抵寢靜まつてゐる頃、くらがりの上り路を二十町餘りたどつて、おぼろな提灯のあかりに導かれて、私等三人が中尾の中島家についたのが既に十二時前。私の眼にはいまだにちらついて來ますが、あの蒲田川の幅狹い橋

を渡つて行く時、前面の森にこんもりと茂つた木立のくろずみと、その上、遙の空、澄み切つた空に燦爛たる星の光り――私等の足下を見守つてくれて、しかもあすの登りを祝するかのやうに、まばたきしてゐた星の光りは定めしウェストン氏にも忘れがたい光景でせう。しかし幸にも、この氣高い光りに比して、幾倍か人間味のあるあかりと熱とが間もなく私等を歡迎してくれた。中尾の村の中程の中島家の前庭には、かゞりがたいてあつたし、その家の入口や緣端には三つ四つの提灯が元氣よく動いてゐた。そのあかるさとあたゝかさとを直に感じたのが私等の心。あの大野川の手前の難路で所謂「九死に一生」"a narrow shave"を得たのがウェストン氏の「一日本人同行者」であると、この書第十二章の見出しに書き出してあるが、この中島家の歡迎をうけたこの英人探險家と彼のカナダ人同行者との氣持をさして、私は敢て申したい、正しく「九死一生」のそれであつたと。

この家の主人の名は中島市次郎とこの本のどこにか出てゐるやうだが、これは原文の間違ひで、實は市右衛門です。去年の夏私が再び笠ヶ岳へ行つた時、この村（正確に云へば、上寶村中尾區）のみちばたで出喰はした老爺さんに話かけたところが、えゝあれは私の祖父ですよ、今生きてゐれば八十三ぐらゐ、祖父さんがあの異人さんの笠のぼりの世話をしたのは私の子供の時の事、そしてあの異人さんはまたこの村へ來て私のうちへ寄つてくれました。その時は奥さんと一緒、それは二十年も前の事……と色々懷舊談をしてくれた。この老人の名は中島忠太郎。これもまたその時に聞いた事ですが、別に奥村市次郎といふのがあつて、それは川下の栃尾の獵師、今一人はやはり中尾の獵師で山本竹次郎、この人が二つばかり市右衛門君より年上であつたらしい。これもよい材料になりますが、とにかく山本竹次郎と奥村市次郎とが私等一行の笠ヶ岳の寶地案内者で、原文に於いて中島市右衛門と奥村市次郎との名が一緒になつてゐるらしい。これだけは昨年の夏私自身が得た材料、それだけ信用が

出來ませう。

この中島家で私等が再び床についたのが十二時頃。そして三時出發といふ豫定で、二時頃には早や呼び起された。この笠ヶ岳登攀に私等が實際費した時間は、登りが十二時間、下りが七時間、合計十九時間。だから夜半の二時頃に起される筈。私等の出發は丁度三時頃、そして歸つて來たのがその晩の十時頃。昨年夏、子供等とあの槍見溫泉から登つた時に、私は案内人に尋ねて見たが、その答に曰く、登りが六時間、下りが三時間、合計九時間と。そこに十時間の差がある。これは四十年前の事ばかりではない。田部先生のお話しに故人辻村伊助氏もこの山登りにやはり十八九時間費してゐられる、そしてそれは今から二十二、三年前の事。どうしてこんなに時間がかゝるかといふと、それはその筈。近頃の道筋は以前のと違ふ。ウェストン氏一行が案内されたのは中尾の村から、北に向つて眞直に、外ヶ谷の川べりへ出る道。村とこの川との間に鬱蒼たる森林、晝なほ暗き處がある。この森の横斷難をウェストン氏は叙してゐる。

『籔が通れないやうな狀態になつてゐたので進行ははかどらず、この上もなく困難だつた。木々は非常に密生してゐたので、光は道を殆ど照してくれなかつた。この道は、露で濡れ繁つてじめ〳〵した草や羊齒の中に通じてをり、處に依つては、滑り易い苔の生へた丸石の上や、仆れ木の丸い腐ちた幹の上を、屢々登つて行かねばならなかつた。この毛氈のやうな苔は非常に密生してゐるので、時々どれが堅い地面だが解らなかつた。おまけに時には足がはまりこんだ。そして私は、一方の足を底知れぬ穴にぶらりとさげたまゝ、片足で立ち、丁度不注意な旅人が思ひがけない氷河の割目に入つたやうな姿だつた。この籔を跛き進んでゐた時間は、たつた一時間だつたが、何年かのやうに思はれた。で私は日本内でも日本外でも、山を放浪してゐる間に費した時間

の中で、これが一番つらい時間だつたと、何時迄も覺えてゐると思ふ。』（邦譯書二七〇――二七一頁）

このこまかく行屆いた譯文を讀んで、私の家族中、一切外國文を知らない上に、山のぼりに殆ど無經驗な一人までも、あの森の有樣が眼に見えるやうですと感嘆した。この感じは當時の實地閲歷者としての私に於いては一入の事です。たゞ玆に一言添へたい處が一ケ處。それはあの木々の非常な密生のため、「光は道を殆ど照してくれなかつた」"The trees were so close together that but little light was cast upon our way"とある處の「光」は日光の事ではなからう。時はまだ午前三時過ぎ、處はあの密生林のなか。八月始めの闇夜で、月は出てゐない。星々の煌めきも無論玆までは屆かない。玆のライトとはカンテラか蠟燭かのそれ。それを二人の獵師が携へて、一行の先達をしてくれたが、其光は私等の道を殆ど照してくれなかつた。其筈で、道と名附け得べきものは玆になかつた。其上、先達の手から向けられたのはほんのおほあかり。私等の足下はたえず半くらがり。「この藪を跪き進んでゐた時間はたつた一時間、それが何年かのやうに思はれた。で、私が日本國内でも、日本國外でも、山を放浪してゐる間に費した時間のうちで、これが思ふに the most trying of all だつたと、何時迄も覺えてゐる。」と最後にかいてある處は、私自身もまた至極同感。あの森のなかの行惱みだけは、四十年後の今日でもハツキリと記憶の面にのこつてゐる。これが私等の笠ヶ岳登攀の第一難場。この森を通り拔けて蒲田川の岸を溯つて、左股、右股の落合口までにあの急流を何遍渡つたか判らぬ。勿論の事、そこに橋などあらう筈がない。二三本の松の木の横倒しにされてゐる上を、しかも溪流の瀨は早いし、雪どけの水かさがましてゐるので、この臨時の丸木橋さへぢり〳〵流されがち、その上をおつかなびつくり、いのちからがらで、渡つて行つた。これが第二の難所。その先きにそば立つて、私等を壓したのが第三惡路の穴毛谷（アナゲダニ）。昨年の笠のぼりに實はこの一歩一息の

舊跡を再び通つて見たかつたが、此頃はそんな舊式な惡路は通用しない。私等が登らされたのは栗屋谷。しかし四十年前に、あの穴毛谷の急傾斜をよぢのぼり、這ひのぼりして行く間に、流石のウェストン氏も少々閉口の態で、覺えず口走つたのが"O, this is the most arduous ascent I have had in Japan"。その時あの穴毛谷のけはしさと一緒に、私の記憶にしみこんだのがこの arduous といふ英語。さてこれを和譯して、どう云へばよいかと推敲の果、先頃やつと得たのが嶮峻といふ譯語。その嶮峻な狹い谷を昨年の夏、上の方からのぞき込んで成程 arduous だ、いかにも一足滑れば、忽ち千仞の谷底に落つこちる。その途中に一寸小休みしても、熱汗冷汗こもごも至るで、此等すべての要素を取纏めたのがあの arduous 嶮峻といふ一語だなと實感しました。第四の惡所はあの尾根傳ひの幾回かの左まき、右まき。そして最後があの安山岩の石版石のもりあげられ、積みあげられた頂上。その絶頂を叙してウェストン氏曰く

『私達は右へ折れ、北東へ鋭い尾根に沿うて頂上迄突き進んだ。この尾根は含響石安山岩で出來てゐるが、この安山岩は、多くの場所で、奇妙に平たく積まれた岩板のやうに重なり、一枚づゝ上へ上へと、丸で屋根瓦のやうに横はつてゐる。これ等の石は丸で自然に依つてつくられた鐘のやうに、ピッケルで打つと、りんりんと響くのである。

双六川の谷間へ傾いてゐる左側の傾斜は、主に偃松で掩はれてゐる。併し右側には、野性的な碎けた岩が、槍ヶ岳の西の斷崖へ突出てゐる。穗高山と槍ヶ岳とをつなぐ壯麗な岩稜は高さ數千呎の城壁のやうな巨大な絶壁の列を表はしてゐる。これは日出づる國にその比を見ない程素晴らしいものである。灰色の水蒸氣の渦卷く幕が、其處此處に立並んでゆら〳〵してゐるが、北には立山、南には富士が、その間から見える。頂上へは二

時四十五分に達した。』（邦譯書二七三頁）

昨年行つて見ると、この頂上より東へ少し下つて、槍ヶ岳に正面向いた處に立派な山小屋が出來てゐる。下の槍見溫泉から番人も來てゐて、泊るに便利また安全であつた。また聞けば、諸大學の山岳部でも其コース中にこの笠ヶ岳を入れ始めたさうである。しかし四十年前には中々それ處でなかつた。元來笠ヶ岳登攀のレコード保持者と云へば、何でも約百年前の古文書に一人はあるそうで、それを外しては、中尾、蒲田、栃尾邊の獵師が得物に追ひすがつて、この山の頂へ一年に一度來るか來ないか位の處。外國人の登山者としては勿論ウェストン、ハミルトン兩氏が天地開闢以來の最先登者。日本人のうちでも十何番目位にはなりさうなのがこの浦口文治。などと私も自惚れかゝつた。時に山に馴れた獵師兩人にせき立てられて、私等の向つたのが歸り途。その途中で幾度かとても歸りつけさうにない、不得已どこかの岩穴で夜營かなといふ懸念に脅かされたが、幸に一行五人、一人も穴毛谷の轉落者を出さず、蒲田川の溺死者も生ぜず、また自ら例の森の迷兒をも見出さないで、山運目出度く中尾の宿に歸りついて、あの市右衛門さん一家の滿足顏に歡迎されたのが夜の十時頃。

此行に於いて私等が文字通りに、夜半の出しなに戴いたのが星、夕べの歸りしなに戴いたのがまた星。しかも處は海拔三千五、六百尺の飛驒の山村。時は八月一日二日の星月夜。その星々の燦爛たる光りは今後も幾久しく私の眼に映じてくれるでせう。しかし私等の思ひ出は空の事ばかりではない。もつともつと土のかほりのする事もある。この歸り途にウェストン氏が岩角や石ごろの飛び下りに降參して、とうとうはいたのが草鞋。これが彼の草鞋のはき初め。幸ひに成功したので、彼が此時實感したのが、山登りのはきものとしての草鞋の結構さ。尤もこ

の時、彼はそれを靴の上にはいたので、その見かけは甚だ無細工。それにも係らず、この舊式なはきものを利用して、彼がぬぎすてたのは彼自身の近世式鋲釘澤山の登山靴。それを見て喜んだのは中尾の獵師兩君ばかりじやない。私自身もまたその一人であつた。御列席諸君、諸君の大多數はむしろ科學的山岳人であられませうが、はなしの序でに、一寸御覽にかけたい物があります。（一對の草鞋を携帶カバンより取出して、それを高くさしあげつゝ、講演者は數歩前へ聽衆席へ割込みつゝ、はなしを進める——編者。）これは東京わらぢ。東京で、わらぢはもはや大森あたりにすら求め得られない。あちこち探がして、一兩日前漸く府立高等學校近くの柿ノ木坂の荒物屋で見出したのがこれ。處がこれは江戸ッ子のはく伊達わらぢ。こんな幅狹のでは山のぼりの役に立たぬ。山によいのはやはり信州草鞋。そしてまたあの麻草鞋もだめ。あれは水を含むので、岩石の上では、滑りやすい。だから、だめ。やはり藁のわらぢに限る。以上が草鞋の原産地差別觀とその材料比較論。次きがそのはき方の研究。私が自分免許で浦口式と申すのは過去五十ケ年間に、しかも北は北國の奥から、南は臺灣の生蕃山まで、わらぢ旅びをした間に、實地に行はれてゐるもろもろの流儀——山人や、百姓や、仕事師の間に行はれてゐる流儀をためして見て、其等の長所と特徴とを集めて今日の大成に達したもの。かやうに大變な歴史來歴をもつてゐるのが私のわらぢはき方。で、早速御覽に入れるのがその浦口式はき方の實演。普通のはき方では、このつまさきからのわら紐二本を足指の股ですぐ左右にわけるでせう。だから、この股の左右の皮膚の柔かい處にすぐ出來るのが豆。我々歩き人にとつて、大事なのは兩足。足は出來る限り可愛がつてやらなければならぬ。で、此等二筋のわら紐をこういふ風により合はして、足の甲羅の上で結び目をつくつて、そこで二本を左右に分ける。すると、足指の股が藁にこすれない。かやうに足の股のデリケートな部分を傷つけないやうにする。これが私の式の第一要件。次ぎは草鞋の右左兩側にある四つの乳首へ紐を通す仕方の工夫。こ

れも普通の流儀通りにしめつけるのは無用の束縛。その結果はたゞくたびれまうけ。私のは甚だルーズなやり方で、さけ得られるだけの痛みはさけ得られるやうに工夫する。草鞋の紐は決して我々の大事な足を痛めるための責め道具ではない。たゞ手輕にくゝりつけて、それがにげてしまはないやうにして置けばよい。第三の要件は腱に對する用心。普通の流儀に於いて、脚力浪費の最も甚しいのが腱の無用の緊縮より來るもの。脚の運動に於いて最も自由自在であるべき筈の關節――下脛と兩足とのつけね――を無理に縛るから、いけない。私の仕方に於いて、腱の壓縛は最小限度に止められてゐる。その爲に、草鞋の踵の紐は決してあの後乳首（あとちくび）にはめも、通しもしない。此等のループは二本ともその儘重ねて――より合はせもせず、またねり合はせもしないで、――重ねた儘、眞直に立てゝ、そしてその最高部に、前述の二本紐を通して、其等を左右にわけた儘に、下脛にくゝりつける。その場所は勿論踝より下ではなくて、遙に上の方。普通式に於いて踝の下で縛ばりつける結果が卽ち腱の緊縛となる。それを避けてゐるのが私の式。踝より遙に上の方、しかも實際は脚胖越しに、その紐を下脛にくゝり附けるやうにする。以上の三要件を守つたはき方をすると、外見上、甚だ不取締である處が、見た目ばかりでなく、これで歩くと、實際やがてぱく〳〵して來る。そのぱくつきが眞に結構で、草鞋の方でもいためられないし、足の方でも疲れない。兩方無理がなくて、長續きがする。現に私は一對の草鞋を四ケ日間はき通した事がある。それは但し臺灣での旅――あの乾燥した土砂みちでの旅の經驗であるが、日本內地のもつと、しかもいつも濕氣の多い山路の旅に於いても、それを三日間もたせた事もある。で、古草鞋の途にすてられたのを見ると、私は拾ひたくなる。それが勿體ないと感ずるのは、折角よく踏み馴らしてあつて、これから先きがはき頃と見るからである。以上が私の科學的わらぢ觀。私のわらぢ談はまだすり切れないが、まづこれ位で、ひと片附けしませう。

あの中尾に歸つた晩から翌朝遲くまで、ぐつすりと氣持よく寢込んだ私等は早ひるを濟して、中島家を出た。それから中尾峠を越して、途中燒岳に立寄つて、そのいぶつてゐる頂上を一廻りした。それからその東側へ下つて、「神河內」の高地へ這入つた。この本によると、私等一行はあの名高い嘉門治の山小屋に一泊してゐる。この事は私に記憶がはつきりしないが、しかし泊つたに相違ない。あの中尾から、燒岳にのぼつて、梓川を渡つて、德本越をして、それから島々、それからやはり歩き通しで、松本の宿に歸つた。その道あとから判斷すると、途中での一泊が必要になつて來る。そこがあの嘉門治君の山小屋であつたとすれば、惜しい事に、そこの主人公は不在だつたのでせう。私は同君に面會した記憶が一切ない。もし在宅であつたとすれば、ウエストン氏と彼との間柄とて、屹度何かはなしの種が出て來たに相違ない。その頃はあの燒岳も音なしくしてゐたので、あの大正池などはまだその影も形もなかつた。それは彼女の誕生以前約二十年の昔の事。この邊の記憶として、私にハツキリとのこつてゐるのはあの梓川のかち渡り。場處は今の河童橋あたりでせうか。中尾の案內兩君が先きに立つて、瀨踏してくれたので、元來鐵砲玉の私も安心して、渡涉した。その安心がよく覺えさせてゐるのは中流の處でさへその水深は一尺內外であつた事。次に覺えてゐるのはあの水の淸く澄み切つてゐた事とかなりにつめたかつた事。その淸冽な流れの面に朝日の光がきらきらと遊び、戲れ、舞ひ、躍つてゐた光景などいまだに忘れ得られない。そこを渡つて、今のテント地や牧場などを過ぎて、私等一行がのぼつて行つたのがあの德本峠。その中腹から私等三人が幾度か見かへり見かへりしたのは穗高の連山。とりわけあの前穗高、——明神岳の威容は幸にハミルトン氏の撮影によつて、私の手にも秘藏の一品として、今なほのこつてゐる。あの松本の寫眞師、堀氏が日本アルプス諸山のそれ等を撮り始めたのは察するに、この一行の撮影に刺激されての事。隨つてこのハミルトン氏

の撮影は蓋し穂高岳の突起以來、破天荒のものでせう。

我邦の千山萬岳は千狀萬態、其等の多くがそれぞれの特徴をもつてゐるそのうちで、いつ仰ぎ見ても、最大の威力をもつて、私に君臨して來るのはこの穂高岳。あの岩骨稜々、しかもその規模の豪壯雄大なる山容に面する毎に、私のあたまは其前に自然と屈する。あの四十年前の初對面の時にも、今から十年前の再會見の際にも、また昨年の夏、一週間の山めぐりに、この巨人を中心として、一大コムパスの圓を描いた折にも、寸毫のかはりを私等に見せなかつたのは此山。今夜この原稿に筆を走らせてゐる師走の月なかば、市人の歩み周章しく、小刻みになりがちの時、汝、穂高よ、われ瞑目一瞬、汝のどつしりしたおちつきを想へば、私は自然と衷心に祈りかつ願はさせられる、我が大和の國の礎にゆるぎなき限り、汝、穂高の威容にまた微動もなかれかしと。あの連山を仰ぐ度毎に、かやうな男性力を覺ゆると同時に、あの笠々岳に對して、そこへの第二遊以來、私の感ずるのはやさしみ豊かな魅力——あの穂高の男性的威力に對比させて見れば、女性的の魅力とも云ひ得べきそれ——卽ち美しい意味に於ける女性的のそれである。今更申す迄もなく、この岳に於けるあの四十年前の經歷を顧みれば、私の思ひ出に漲つて來るのはその近接難とその登攀難、そして此等の二方いづれに於いても、著しいその嶮峻さである。然るに私等一家四人の昨夏の逢遭は全く別天地のもの。まづ天氣のコンディションより云へば、前日私等をあの燒岳の直下、中尾峠の頂上に出迎へた强風雨は早くも遠く太平洋外に吹きとんでしまつた。隨つて、のぼり、とまり、くだりの二日を通じて、私等を包んでくれたのはあの嵐のあとのなぎ日和、天快晴、氣淸朗。到る處で、私等の意の欲するが儘に出來たのが遠近四方の好展望。次に私等のとつた栗屋谷のコースには、勿論あの森林のなやみもなく、またあの穴毛谷の險もなかつた。其上、この岳の絕頂から私等が飽看し得た東正面の大屛

風――その左翼にあの鎌尾根を二つも(北と西との)うねらせつゝ、大空さして突立つてゐる大槍、小槍と、その右翼に蟠踞してゐる西穂高との間に、素晴しく展開された六枚折の大屏風は正にこれ我邦では無二の偉觀、また世界にもさほど多くはあるまじき絶景。第三に、あの改築後まだ漸く一ケ月ぐらゐの山小屋のとまりはその設備に於いて、その接待に於いて、ともに私等の豫想以上。その所在の海拔が約八千五百尺であるとして考ふれば、迚もこれ以上は望み得られぬ程のもの。最後に、次ぎの夜の泊りを双六池の室堂に豫定して、そこへかさばつた荷物を自分等より先きに運ばせて、その上たき火用の燃料さへ拾ひ集めさせて置いたので、私等はあの砂徑なだらかな拔戸(ヌケド)岳の肩や、弓折れの曲りで、隨意撮影、任意採集、其のあいまあいまに渴をいやしたのは持參の Kocher でわかした紅茶に Glukose を入れたもの。また時々取り出されたのが cognac の小瓶。しかもこの一日の行程は漸く三里餘り。そこをかやうに悠々とくだつて、あの双六の無人小屋にはいる手前、しばしの見收めとて、ふりかへつて、眞南を見れば、あたかも私等四人の見送りに立出ててくれたやうな姿の笠ヶ岳。その truncate 形はさながら昔の女性用かぶり笠。その脇の少しうしろに見ゆるのが所謂小笠。此等大小二つの笠の立列んだその姿が私に聯想させたのはあの常盤御前が牛若丸を連れた旅姿。あの拔戸や弓折れの這松の間の散歩路をたどつて行くと、前方益々手近にやつて來るのがあの双六岳。その形のまるみとその滿山芝草の柔かみとがそゝつてくれる感じをあの奈良の春日山のそれ等になぞらへれば、この岳の麓のくぼ地に安らかに抱擁されてゐるあの双六池はさしあたり猿澤の池かとも見得られよう。この双六岳に面して、また、この双六池に臨んで、建てられてゐるあの双六の無人小屋に一同心のどかに落ちついた時、私の想が第一に走せて行つたのはあの大小の笠ヶ岳。この時もはやその影は夕もやのなかに沒してゐても、なほ彼女にふさはしく聯想されて來たのは、やはり常盤御前と牛若

丸との立姿。それ以來、私等にとつて、かやうなやさしみを增して來るのが笠ヶ岳。この岳はなるほど飛驒の山、やはり飛驒の奥からこそ、見事に見えるのがその笠姿。もしも出來る事なら、再びウェストン氏と同行して、もう一度見上げたいのがこの方面からのみ、仰ぎ得られる笠ヶ岳のやさしみある笠姿。

九、常念ヶ岳の山料理

日曜日一日松本で安息して、次に私等の登つたのが常念ヶ岳。この山へは實は昨年の夏、再び行つて見たが、そこで私等は大した魅力を覺えなかつた。が、しかし四十年前の常念のぼりはかなりに面白かつた。松本出發、豐科經由、山へののぼり口、岩原といふ村の村長、山口義人さんの御宅で泊めて貰つた。そこで傭つた荷もちとしての熊狩獵師三人にかつがせたのが、夜營用のテント、其の他所謂科學的山登りの七つ道具、並に食料品一切。そのうちには米が四五升、隨つて大鍋も一つあつた。一行は西洋人二人に、日本人五人。と云ふのは私の外に、今云つた通りに、獵師が三人。この一行について來たのが村長さんの若息子。で、同勢すべて七人。あの烏川のふちをつたうて一の澤を溯つて行つた途中のお花畠の高山植物をウェストン氏が嬉しがつたり、海拔七千二百尺の峽谷の絕壁の下での山椒魚あさりに獵師等が夢中になつたりした話は全部とばしませう。夕暮れの山徑は氣がせく。その急ぎ足の私等がいよ〳〵あの常念ヶ岳の鞍部に着いたのが午後七時十五分。

そこはウェストン氏當時の觀測によれば、海拔約八千六百尺。そこを今度通つてみると、勿體ない程に結構な小屋（常念小屋）が出來てゐて、その收容人員は二百人、婦人專用室まであるさうで、これが十五年前に建てられると、間もなく秩父宮殿下も御泊になつたと聞いてゐる。おまけにこの小屋は周圍までも綺麗に手入れが屆い

てゐて、そこはまるで小形の公園。この小屋を一寸のぞいて見て、私は一泊してみる氣持になれなかつた。その前夜とまつた西岳小屋、あの大天井の向ふの小屋の方が、いやその窮屈な處がかへつて山小屋らしくていい。茲の小屋はむしろ日比谷公園の奥へ引移して、菊の鉢植でもあしらつて、そしてアルプスの山小屋といふ表札を打つて置く方が遙かにふさはしいでせう。とにかく四十年前に我々の來た時には、この鞍部には五葉の松が一面にはえてゐた。その枝や幹にしばりつけたテントの下で、我々が聞いた獵師達の話のうちには、茲は德川幕府時代の間道で、この山道を通つたのは加賀藩、前田家から江戸往來の急飛脚か、でなければ公然と本通りの關所を通れない泥棒仲間であつたとか、昔この岳の絶頂には常念佛の坊さんがゐて、その讀經の聲や敲き鉦の音が時々下まで聞えたので、この山に常念坊といふ名がついたとかいふのがあつた。そんな罪のない夜話でも田舍人の口から、しかも四十年前にこの處で聞くと、氣味わるさと面白さとが、丁度よい按排に配合されて來た。が、やがてそんな話しの種が盡きた頃、一行七人は內外上下無差別に、皆そこにごろ寢した。

この夜の事をウェストン氏は書いてゐる、

『その夜の野營は、何と云ふ樂しいものだつたらう。黑い低い松の木影が、キャムプ・ファイアの燃え立つ後に一層黑く浮んで見えた。丸太がパチ〳〵と燃え立つ時、それ以外にこの靜寂の空氣を破るものは夜啼鶯の澄んだ啼き聲か、乃至は數千呎下の山の急流の絶え間ない響だつた。』（邦譯書二八九頁）

私にとつてもまた、これは生れて始めての野營、その思ひ出が極めて深い。夜中頃に、不圖目がさめた。氣が附くと、腰の邊りから、冷氣が全身にまわつてゐる。見ると、燃えさしの松の枝が二三本いぶつてゐる。それだけ、衰へてゐるのが焚火の力。しかし眞上の空一面に光つてゐるのは星々の白銀の數珠だま。其等のキラつきは

この山ふところに安心して、スヤ〳〵と寢入つてゐる私等の一團に、祝福の眼を向けてゐるかのやう。その見守りに一層安心して、私はねがえりした。その音に、めざとくめざめた獵師君の一人が焚火の手入れをしてくれた。で、私は再び夢あたゝかく眠りに就いた。しかし常念山上、その夜の星々の美しさと、そのあたりの靜けさとは、今後も幾久しく私に忘れ難いものであらう。これに似た御經驗を、もつてゐられる方々が、定めし御列席諸君のうちにも、數多くあられませう。御同樣、武藏野の平原にこの世のなりわいを營んでゆく間にも、想ひ一たび飛んで山上の夜、星斗闌干の光景に入れば、お互ひ現在の立ち所卽ちこれ聖地といふ感に包まれるではありませんか。私にとつて思ひ出される山々の星月夜のうちで、今から約十年前の夏、輕井澤碓氷峠の見晴し臺で、夜毎に仰いだその光り、次いで二三年間、引續いてあの甲州大菩薩岳の麓の雲峯寺の書院の庭で、小夜ふけて獨り親しんだそれ、それから數年前にあの秩父三峯の縱走に一泊した武州雲取の無人小屋で、滿天散布の星辰を指しつゝ、あの埃及人のトレミー式天文觀や、ヘブライ民族の星宿禮讃式宗敎詩の由來談を、同行の二青年と語りふかした一夜のそれ、さては昨年夏の笠の小屋、八千六百尺の高地、颱風一過の翌夜、物凄いほどに澄み切つた大空のあの夜のそれなど、いづれもその印象が深い。しかし此等にもまして今なほなつかしく思ひ出されるのは、やはりあの四十年前ウェストン氏と同行して、こゝ常念ヶ岳の鞍部に夜半露營の夢さめて、見れば、山風に傾いたテントのはし越しに、ごろねその儘で仰ぎ見られた星月夜。

その翌日早朝、まだ朝霧さへ、四方の谷々の底に、安眠してゐるうちに、私等の登つたのが、常念ヶ岳の絕頂。あの鞍部から、この岳の圓錐形の北側面を、眞直に、更に一千三百尺もあがつた。そこからの展望は流石に素晴しかつた。この展望を目がけて、茲までわざ〳〵、松本平から入りこんで來たゞけの甲斐があつた。それに滿足

したウェストン氏の印象記に曰く、

『翌朝、日の出前、曉の灰色の雲が徐々と消え去る時、素晴らしいパノラマがその姿を表した。私達の野營の眞西に當つて、中間の谷間の上に、槍ヶ岳の尖つた一つ岩の頂上が聳え、その南方の凹凸のある尾根は、穗高山の切り立つ山稜や峻峯に續いてゐた。東に目を向けると、遙かに松本平の上を見渡し、その波方の丘陵まで見えた。それ等の中で一番主なものは、噴火山淺間で、煙と蒸氣の交つた灰色の柱が、銀色の渦卷となつて、空に舞ひ上つてゐた。南東には、美しい雲を藏いた富士の火口丘が見え、それを見ると私達は、その麓の直ぐ近くに太平洋の長い磯波が、打寄せてゐることを想ひ出した。』（邦譯書二九〇頁）

處が、これはウェストン氏の思ひ出。私自身が茲で諸君のお耳に入れたいのはもつと下界向きの、いや食ひ氣の話。どうも山に登ると、誰しもお腹が空く。で、この章の題も「常念ヶ岳の山料理」として置きました。

第一にお話したいのは御飯ごしらへの事。勿論外國人側の主要食料品はパン。其方は心配無用、立派な主任者がついてゐる。然るに日本人側のは米。これが厄介な品物。まづ其原料は我々五人前の二日四度分をあの村長宅から背負上げたが、それを磨いで、炊くに必要な水がそこにない。そこから一町も二町も下の雪溪へ降つて、やつと見附けられるのが雪どけ水。それを汲んで、茲までもち上げねばならぬ。そのためのバケツがない。處が、そのバケツ代りの役に立ちさうなものがウェストン氏の七つ道具のうちにあつた。といふのはゴムシーツ。それは夜營の際、地面に敷いて、睡眠中の濕氣をよけるために持參されたもの。そのゴム布を臨時代用の水袋にした。それに汲んで來た水は元來萬年雪の溶液體、そこへ汚物が微塵這入りやうがない。また下界の黴菌など茲まで這ひ上つて來る心配はない。で、水そのものは至極結構。處が、それについてしまつたのがあのゴムの臭ひ。流石

のウェストン氏も、これには閉口した。閉口はしたが、水なしには口のあけられぬ私等にとつては、これが一等飲用水。しかしこの貴重な液體はその分量に制限があつて、米とぎ方に使はれない。その米とぎ用の二等水を得るために、山馴れた獵師諸君は早速そこの五葉の松の立木の枝から紐を釣下げて、それにつるしたのが持參の鍋。そのなかへ持込んだのが、その邊にいくつもころがつてゐた雪の丸太――とも云へるやうに長い棒狀にかたまつてゐた雪のかたまり。その鍋の下には焚火がパチ〳〵と燃えてゐる。この火責にも中々弱はらないで、ニヨキとその白い半身を鍋の緣から突き出した雪の棒のかさは容易にへらない。この火焰の上、空鍋の中に、その心頭を滅却して、横臥してゐた雪の棒長門守は松葉いぶしの煙にまかれ乍ら、またゝき一つしないで、隨分長く平氣ですましてゐた。その姿はこの時初見參の私の好奇心をかなりにそゝつた。しかしそのうちに出來た二等用水で、とがれたのが我々の米。そのとぎ方は不充分であつたらうが、そんな事に頓着しなかつたのが我々の胃の腑。このあらとぎの米に、あの雪溪產の一等水――ゴム布の香りつきの水を注ぎ込んで、そこに炊かれたのが我々の飯。それは一種の色あり香りある櫻飯。

第二は味噌汁の製造法。其時、この七人世帶に唯一の鍋は飯炊き專用となつたので、汁用には使はれない。その汁鍋の代用品を見て、私は驚かされた。諸君多分御存知でせう、田舍の百姓が野良仕事にもつてゆく辨當入れに面桶（メンツー）といふのがある。杉や檜の片木でつくつたまげ物です。ところが、田舍の百姓共よりももつと勞働がはげしいだけに、一層大飯くらいなのが山の獵師連中。彼等の使ふ面桶の大きさは實に偉大至極。それに例の一等飲用水をつぎこんだなかに、味噌を、しかも一切すらない――あらつぶその儘のを、ぶち込む。その中に入れた野菜は私の記憶に間違ひがなければ、この邊の獵師の所謂岩別當（ベツタウ）といふ植物。大概六千尺以上の岩石の膚にくつゝい

てゐる、色の黒ずんだ、ぶの薄い、そして縮れた地衣。それをはぎ取るに、我々の爪さき、指さきなどはとてもだめ、あの山刀のとがつたさきで、やつとこじ上げられるもの。それをあの味噌水、まだ汁になつてゐない味噌と山水との雜居物の中になげ込む。この岩別當の事を茲に御列席の武田久吉博士——日本山岳會創立の元老であられる武田先生に先刻お尋ねしましたら、そんな名はまだ聞いた事がない、しかしその物はわかつてゐる、それは「岩ふすま」か、「深山(みやま)こげのり」かだとのお言葉。ほかの事なら、ともかく、高山植物專門のこの大家に私風情が名稱爭ひをしてみても、どうせまけるにきまつてゐる。この次ぎの常念のぼりにあの岩原の村長さんにでも、もう一度聞き糺してみれば、私の方にも相當勝ちみが出て來るかも知れない。が、茲では殘念ながら武田博士に降參致します。なるほど「岩ふすま」、「深山こげのり」、ともによい名です。この名をお聞きになれば、諸君の想像にも高山の岩膚にこげついた、のり狀の地衣がうつゝて來るでせう。これが我々の味噌汁の第一の身。第二の身は動物性のもの。といふのはあの雷鳥(Ptarmigan)の肉。この山鳥はどこでも雪線以上でなければ棲んでゐない高山鳥。その羽毛の色が冬にはあたりの雪同樣、純白になる。その柔軟な羽毛一本々々が信州の養蠶地方でもつてゐるのは一種の產業價値。といふのはあのかいこの玉子が孵化して毛子(けご)になつた時、その掃き立て用にこの羽毛を使へば、毛子に少しもきづがつかぬ。この鳥の事をこの地方ではうつかり呼び捨てには出來ない。それはお雷鳥樣です。その雷鳥樣の祠が信州路のあつちこつちにあるし、そのしるしの大きな石碑がまた道ばたに立つてゐる。それは無論法律上の禁獵鳥であるばかりでなく、これを打取ると、その人間はその村中から破門されてしまふ。處が、常念ヶ岳の頂、外に見る人なき處では、私等の獵師先生も大膽になつて、そのねぐらを襲うて、無情にもぼんと一發。かくとは知らぬ私等の耳に聞えた銃聲。九千五百尺の山上、あかつきの空、それこそいさぎよくこだ

ましたので、オヤと振りかへり見る目の前に、得意氣にさし出されたのが丸肥の雷鳥一疋。その羽毛をあらつぽく、むしり取つて、次ぎには口もとからそれを八裂きにして、その肉のちぎり身をその儘に、あの面桶にほうりこんだ。さあこれで揃つたのがお汁の原料、味噌つぶに雪どけ水、それに「深山こげのり」と雷鳥の肉、以上四品。さて此等をどうして煑るかといふと、獵師連の工夫は愈々出でゝ愈々奇。まづ拳大の石を二つ、三つ拾つて來て、其等をあの飯たき鍋の下の、かゞり火の中に入れて、かなりに熱した頃、――石ころだから別段眞赤にはならぬが、內實あつあつになつてゐるやつを、松の小枝でつまみ出して、あの面桶のなかに落しこむ。と、その石ころの放射熱で、あの味噌水がにへくりかへつて、渦卷き、泡立つこと數分間、結局そこにうまく出來たのが上等の味噌汁。

第三がお椀の工夫。このキャムピングに、お椀といふやうな贅澤道具の揃つてゐる筈がない。處が、都合よくウェストン氏持參の食料品中にあつたのが Sardine（鰯）の罐詰。その中身を七人でわけ〳〵したあとの空罐に、この卽席料理の味噌汁を注ぎこんで二人、三人と呑み廻し、まるで抹茶、濃茶のお茶頂戴といふやうに、一人が一口吸ふと、お次に廻はす、それをまたそのお次に廻はすといふ次第。七面倒な作法はないが、順序はキチンと正しい。

かやうにして出來た櫻飯におみおつけ、それにあき罐のお椀、これが私等の舌鼓を鳴らさせた常念ヶ岳の山料理。それを私等三人も向ふ側四人にまけない位に、たらふく賞味した。これほどのお料理はあの常念小屋にあるまいと見て取つて、昨年夏私達はそこを通りこしたが、この常念料理は折角の事、宮樣方のこの次ぎにお出かけの時に、さしあげたいもの。先刻玆の食堂で山岳會幹部の諸先生から御馳走していたゞきましたが、私としてこの上のお願ひはこの山料理をあの不二屋ビル內に開店させていたゞく事。すれば明晩早速、私も家族同伴、その試

食に參りませう。

一〇、御岳まゐり

常念ヶ岳からずつと南へ飛んで、私等の登つた最後の山が、木曾の御岳。この山は、ウェストン氏にとつては、この夏の大旅行最後の絶頂。諸君御一同にとつて、このお山の事は既に餘りにコンモン・プレースでせうし、また御岳まゐりの宗教的意義もよくおわかりです。で、その委細の事は大飛びに飛ばしませう。但しこの山とウェストン氏との連想上、茲に私の述べたいことが二つある。

第一は、ウェストン氏がこの山を The Holy Ontake と稱してゐる事。この名稱は聖き御岳、聖山と譯されてゐるが、そのホーリといふのは、彼の口に於て、決して皮肉の言葉ではない。彼の立場がクリスチヤン・ミツショナリであつたのに拘らず、感心にも、彼のよく汲み取つてゐるのが御岳まゐりの眞心。それを汲み取つて貰つた途中に於て、私が幸に an interrupter（遮斷者——中斷の邪魔者）とならないで、まづ〳〵大過なしにつとめおうせたらしいのが the interpreter（通譯者——中繼ぎの解說者）としての仕事。その證明が、この書物のあちこちに出てゐる。あの御岳行者達の言動は、傍觀者等には、とりわけ外國人等の眼には、迷信的の分子が多いと見られやすい。其等の催眠術的な風習に面して、ウェストン氏もまた實際驚かされ、かつ怪まされたに相違ない。但しそれにも係らず、彼は中々よく見通してゐる。あの行者達や、このお山におまゐりする人々の胸の奥には、一種の眞心が宿つてゐると彼は見なしてゐる。外來宣教師達のうちには、我邦在來の宗教生活を目して、とかくに迷信呼ばはりするものもある。その中で、彼ウェストン氏の如きは、御岳まゐりの服裝——あの白衣に黑

文字や朱印のベタ〳〵と押されてゐる strange さ、そのおとなゐ題目――六根清淨のふしぎさ、さては、その雲切り印結びなどのあやしげな形に囚へられないで、其等の中身と奥底とに突き入つて、そこに存する日本人一般の敬神觀念をよく掴み出してゐる。そこは流石にエライと云はねばならぬ。

私等が木曾福島の宿屋からこの聖山にのぼつた道筋は黒澤口。途中の松尾小屋、千本松原、女人堂等を經て、其夜は一万一百尺の頂上小屋で一泊。くだりは王瀧口。途中に金剛童子の小屋、田ノ原小屋、中ノ小屋等を通つて、王瀧村に着。そこの神主の家に泊つた。その手前の王瀧そのものに立寄つた時の所見はやはりウェストン氏自身に語らせる方がいゝ。

『この瀧は、高い暗い杉で蔽はれた、人里離れた瀧壺に、絶壁から落ちてゐる美しい小瀧である。私達が、ぴか〳〵光る水の上の、光と影のたわむれを眺めて立つてゐると、たつた一人の巡禮者が、この溪谷へやつて來た。彼は、すつかり裸體になつて、氷のやうな冷い瀧の下に立つた。そして、胸に兩手を組んで、殆ど息苦しい迄に、贖罪と魂の純潔とのための、祈りを捧げ始めた。この純潔さがないなら、山頂へ登り、聖い社に頭をさげ、祈りを捧げても、無駄だと、彼は、私に話した。眞劍な氣持で、やつてゐるやうに見える。その祈りに私が耳を傾けてゐた時、ダビデの言葉が、はつきりと想ひ起された、――

『誰か神の丘に登らんや。また、誰か彼の聖所に立たんや。潔き兩手と純な心とをもてる其人、その魂を虚榮にさゝげず、僞りの誓を立てたる事なき其人ならずや。』

またこんな人達をさしてこそ、あの偉大な使徒が『あらゆる國民のうち、神を恐れ、正義をなす人をこそ、神は受け入れ給はん』と昔書き記したのではあるまいか。』（邦譯書三一三頁）

あの御岳行者のあら行を眼前にして、我々日本人自身ですら、これだけの觀察を下し得るものは、その數が多いとは云ひ得られまい。此等二つの名句を引抄した處にあらはれてゐるのは、流石にまじめな宗教的教養の深い、しかも私等日本人に對する親しみの厚い、紳士としてのウェストン氏の奥床しさであらう。

第二の特徴は、ウェストン氏が日本人愛國心勃發のクライマックスに直面した時の感慨。私等が、このお山の頂上に一泊したのは、明治二十七年、八月十三日の事。これより前、あの日清戰役の口火を切つた、豐島沖海戰の當日、卽ち七月二十五日に、私等はあの大蓮華を降つて、大町さして歩んでゐたが、その月の末、三十一日に、私等はあの安房峠あたりの奥床しい溪谷をたどり行きつゝあつた。丁度其日に、布告されたのが、この大戰役の宣戰詔勅。それより十三日目に私等はこの聖山に登つたが、我が明治天皇陛下が大本營を廣島までお進めになつたのがこれより丁度一ヶ月後の九月十三日の事。今とは違つて、四十年前の信州の田舍、特に毎日毎日、山から山へと旅してゐたので、新聞を見る事も稀れで、私等がくはしく知るよしもなかつたのが、この日清戰局展開のあと。あの常念ヶ岳からおりて、私等が松本の定宿に歸つて來ると、初めて氣付いたのが、市内に滿ちてゐた戰爭の噂とりどり。そのうちには英國が支那の尻押をして居るといふ流言もあつた。で、ウェストン氏のために心配して、餘りに内地の奥の方を旅行するのは、萬一の虞れがあると注意した人もあつたくらゐ。そんな時勢であつたので、御岳頂上の小屋に泊つた夜、そこの神主さんの色々の物語りのうちにも、多く出たのが時局談。この栃山さんは熱辯をふるつて、自分は弓術でも劍術でも出來る、天皇陛下の召集命令さへいたゞけば、明日にも戰場へ出征しますと云つた。そこに吐露されたのが、彼の胸中に欝勃たる愛國心。それと同樣の熱誠をもつて、私はこの鐵砲をかたげて行きますよとウェストン氏に語つたのが、あの常念ヶ岳案内の隊長、獵師頭の藤原さん。かやうに

横溢して來た國民一般の意氣精神に接觸して、自身は外國人でありながら、彼がつくづくと感心したのは、日本人の上下一般に行渡つてあらはれて來た愛國心。その感激を胸にたゝへつゝ、王瀧の神主の家を辭して、途中の橋渡(ハシド)を經て、あの中仙道の寢覺の床や、木曾のかけはしの少し手前で、ウェストン氏は名古屋歸りのハミルトン氏と南北相別れた。私等二人は、中仙道を東へ戻つて、再び入つたのがあの福島の俵屋。そこでの一日の休みを利用して、私の讀みふけつたのが、新聞、そしてウェストン氏が聞きふけつたのが、そこに滿載されてゐた戰爭記事。しかも、此等の新聞紙はウェストン氏の前もつての依頼によつて、松本からこの宿へ特送されてゐたもの。そのどれにもこれにもかきつらねられてゐたのが愛國の熱情もえたつばかりの記事。

先刻田部先生の御紹介もあり、私もまた一寸述べましたやうに、私は今年の夏金峯へ登りました。その時、甲府・昇仙峽から進んで、あの上黒平(クロビラ)で一泊した。そこへの途中、たまたま道連れになつたのが、六十臺のお爺さん、――この邊の郵便配達夫。で、我々あすは金峯のぼりだといふと、彼は直に應じて曰く、「わしも登つたよ」と。それはいつの事だと尋ねると、「なに若い時さ」といふ。それが緒となつて、色々のはなしが出たが、丁度日清戰爭の當時、農村の若い衆一般の熱望した通り、この老人――當時の一青年――もまた、戰爭に出して貰ひたさに、あのお山に願(グワン)かけに行つた。なに平常は年に一度のお祭りに行くか、行かぬかだが、その時はあのお山に祀つてある神樣に願かけに行つたとの事。「それで、その願が叶つたか」ときくと、「いやとうとう戰爭には行けなかつた」と、いかにも殘念氣であつた。

今から四十年前に、あの岩原村の獵師頭、藤原さんや、この御岳の神主、栃山さんなどの、老人達の胸に躍つた愛國心の意氣は、かならずや一層强烈な勢をもつて、この黒平の老配達夫、幷に彼と同樣に徵兵適齡期にあつ

た當時の農村青年諸君一同を動かしたに相違ない。その頃から、我邦でも、早くも三つまで、かはつたのが年號。この三代がはりの間に、我々國民が通過して來たのが、あの日清、北清、日魯、并に世界の四戰役。此等を經過して、我々の愛國心、とりわけ地方青年階級のそれは、果してどうなつてゐるでせうか。あの黑平の「愛國青年」の、今日この頃の姿を眼前にして、私は多少の感慨を禁じ得なかつた。その感慨の對象は、たゞに一個人としてのこの老人の現狀ばかりではない、寧ろ彼を一面の代表としてゐる全日本農村疲弊の實狀如何であります。その疲弊が、全國徵兵の士氣に、既に重大な影響を及ぼしてゐる處は、實に背に腹はかへられぬ事として、軍部の諸公をして、現在さしもに煩悶させてゐるらしい。その我國農村一般現狀の一側面を私等はこの夏、甲信武三ケ國の村々到處に見せつけられました。しかし、私の今夜の題目は、そんな六かしい政治經濟の問題ではない、もつ、と壯快な山々のぼりの朗らかな思ひ出ばなし。で、再びはなしの中心、ウェストン氏に戻りませう。

ウェストン氏はこの一八九四年の大旅行をかやうに滿足に果した後、福島から權兵衞峠を越えて、上諏訪をまわつて、甲府に入り、そこから鰍澤へ出て、富士川を舟で降り、途中あの身延山に一寸立寄つたが、再び舟で岩淵へ出て、それから箱根の本宿へ行つて、そこで一旦落着いた。私は、あの芦の湖にうつるその逆さ姿の美しさに引きつけられて、前にも云つた通りに、富士のぼりの希望を述べたが、それは、彼に容れられなかつた。それもその筈。これより以前に、この名山に、彼は三度も登つてゐる。私の方ではこれより三年前に初めて見た、この山にのぼらうと希望したのは、この時が初めての事。ウェストン氏はまた云つた、「北アルプスに登つて來ると、富士のぼりなどは、問題にならぬよ」と。が、しかし私に於ては、富士に限らず、凡そのぼらうと目ぼしをつけた山自體が、私の眼界中に存する限り、その希望は持續されてゆく。そして大抵の場合、それが早晩達せられる。

富士の場合もまたその通りで、その宿望が達せられたのは、それから二十四年目の大正七年の事。その折りの登り方が、比較的に氣輕に實行されたのも、やはり京都母校での五ヶ年間に養はれた山登り癖が、ウェストン氏の北アルプス旅行に同行した間に、大に强められたお蔭でせう。そのお蔭のこの夏にあらはれたのが、あの金峯山から十文字峠かけての山遊び。但しそんな後々の影響よりも、もつと卽坐にウェストン氏に感謝したのは、この二ヶ月かけての山旅のお蔭で、私の神經衰弱がどこへかすつとんでしまつた事。八月下旬、神戸に歸つた時、病床の父はよい事をして來たと喜んでくれたし、私自身は實際元氣をとりかえした。で、九月から就いたのがもとの通りの仕事やつとめ。今でも眼前に彷彿として、うかんで來ますが、歸宅後の第一の日曜日の事でしたらう、所屬敎會の禮拜出席の歸り途に、友達數人と供に、あの元町通りの基督敎書店・福音舍に立寄ると、あの神戸の銀座通りの眞中にありながら、流石に a Christian s'ore として、表戸はたて切つてあつて、僅にあいてゐるのが、くぐり戸だけ。しかし、その軒に、竹竿高く揭げてあつたのが、日の丸の旗。どこでの戰勝を祝ふためであつたか、そのいはれを只今一寸思ひ出しませんが、その國旗の翩飜とひるがへつてゐた姿は、勇ましかつた。日常の商賣は休んでも、安息日は靜かに守る、しかし國家のよろこびは、俱にこれを祝うといふ、その心根もうれしい思ひ出であるが、それに劣らずうれしかつたのは、あの北アルプスの山々が、私にも與へてくれた元氣の一新、――氣分のさはやかさが、私をしてあの日の丸の旗を、一入なつかしく見あげさせた事。

それは私自身の事。それよりも今夜のお話として、遙に大切なのは、ウェストン氏の方の事。あの北アルプスの山々、しかも外國人として前人未到の蓮華、笠、常念の山々によぢのぼつて、彼がその科學的の探險を、かやうに果した事は、たゞそれだけでも、實に無双絶倫の功勞でありませう。その功勞の絶對的の價値は、今更に申す

迄もなく、日本山岳會の諸君御一同の方が、私自身よりもより正確に、また、より適切に、御存知の事でせう。しかし彼の同行者として、私が玆に再び申上げたいのは、彼が一種科學者以上のまなこを以て、あの御岳を聖山と見た處と、また等しく科學者以上のハアートを以て、我國民全體の愛國的熱情のこの戰役に際しての迸りに彼自らが感激した處とであります。この書物に於て、彼はこの御岳を叙して云つてゐる。「地理的に言へば、この山は、一の深い大きな窪地にあつて、日本アルプスの中央山系から切り離されてゐる。また比喩的に言へば、この山は……その巡禮團の驚くべき催眠術的な行爲と風習との故に、尙一層、日本アルプス連山と區別されてゐる」(邦譯書二九七頁)と。この「離れ山」に於て、彼は一の科學者から一進轉して一の宗教者となつてゐる。しかも歐米人から見て異宗教の——また、同國人の目にさへ或は迷信的氣味滿々の——あの目ざはりのたゞならぬ——外殼の感じに避易しないで、その中身の奥までも見拔き得る、形式超越、正味賞美の眞宗教者となつてゐる。また、この「別れ山」に於て、彼は一派の宣教者から進一歩、Humanity 全體の一謳歌者となつてゐる。しかも、一宣教師としての彼の立場に於て、彼が自ら牧すべき羊群は居留外國人のそれで、固より土着日本人の會衆ではなかつた。また彼自身の教養と趣味とは、必然平和主義者のそれで、勿論好戰的挑戰的のそれではなかつた筈である。其等にも係らず、彼はあの第一次對外大戰當時に於ける、我國民一般の潑溂たる鋭氣に對して、かほどの理解と同情とを示しつゝ、國家別超越、人間性鑑識の眞人格者となつてゐる。我がやまとの日本に對する彼の愛情は、我國の山々から始つて、次に我々の山人等に移り、第三に進んで、我邦民衆の全體に及んでゐる。松方さんの在英中に屢々目擊された處によれば、彼は既に七十四歳の老軀を提げて、今もなほ a good friend of Japan いや one of her best friends として、つねに盡力奔走、しかも、その功名を他人に讓つて、自ら日蔭の勞苦

に當つてゐられるとの事。何が彼をしてかやうにならせたのか。私はくりかへして申したい、それは我國の山々が、次にそこの山人等が、そして第三にあの聖山御岳を轉機として、我邦の民衆全體が彼の胸の底より吸ひ出して來た、彼の愛情であると。彼が今なほ、ほこりとしてゐるのは我日本。我々もまた、我邦の一良友としてほこりとすべきは、彼ウォタア・ウェストン氏でありませう。

一一、山岳愛と近代人生活

私の最初の腹案では、この思ひ出話しの因みとして、ウェストン氏に同行後三十年目の、私自身の槍ヶ岳のぼりと、あのアルプス銀座の銀ぶらと、並に四十年目即ち昨年夏の、燒、笠、槍、大天井、常念、蝶、大瀧などの山々めぐりの物語を、お聞きいたゞくのでした。然るに時間は既に一時間を過ぐること、まさに三十分。にも係らず、只今高頭先生、冠先生などの長老がたよりかゝりましたのが「もつと、もつと」とのお聲。このお言葉は、私にとつて、面目至極です。しかし山旅びの原則として、とまりは早い方がいゝと云ひます。その原則に隨ひまして、私のおはなしもこゝらで結びと致しませう。さて最後一節の見出し——山岳愛と近代人——だけを御覽になつて、この上になほ一講演やるのかと御合點くださいませんやうに。實の處、私が今夜申上ぐべき材料は餘りのこつてゐません。で、要領だけかいつまんで申しませう。山岳愛がいかに我々近代人の生活に影響するかと云ふに、玆に論よりの證據が二つあります。

その第一は諸君の御會、即ち日本山岳會の存在、いな諸君御自身の御活動が即ちそれでありませう。先刻食堂で承れば、この御團體にとつて、來年は創立三十年目に當るさうで、その記念として、何かのお催しがあるだら

うとの事。またこの日本山岳會に列つて、互に山岳愛人としてのちなみあり、ゆかりあり、またつながりのある諸君の同志の數は全國に於て、既に八百に達してゐるとの事。この外に、無論の事、まだこの會に加入してゐない登山家が我邦に無數ありませう。山岳愛と近代人生活との交渉に對する證明として、此等代表的の數字以上に強いものを求める必要は一切ありますまい。

第二の證據は私自身の存在、いな今夜のおしやべり其物であります。正直な告白ですが、山は私にとつて生命の泉の一つのみなもとです。と云つて、私は別段やまこでも、山師でもありません。たゞ平凡な山好きの一人。これまで別段吹聽しなかつたので、私の山岳人としての生活は、東京での友達の間には、さほどに知られてゐないでせう。といふ次第で、九月の初めの會話中に、偶々出た私の登山談に對して、田部先生が意外感をおもちになつたのも、無理ならぬ事です。もつと近い處で申せば一昨日の事、今夜のこの講演の事を聞き傳へて、某大學の一クラス——私が平常講義に出るクラスの學生多數が「なに浦口さんが山のぼりって」と云つて、一向に信じなかつたそうです。もう一つ、茲に現在出席してゐられるお一人——京都以來のふるなじみのお一人も云はれました「あなたから隨分色々のはなしは聞きましたが、山のぼりの事は一向知らなかつた」と。それくらゐに音なしい山岳人である私。その私にとつて、いのちのいづみの一つは確かに山にあります。元來もつて生れた弱々しい體質にかてゝ加へて、明治の始め頃に發生した我邦社會の激變が、當然まづ私の兩親に、次いで間接に私自身に、與へたショックはかなりに深かつた。その間に私の心身兩面に加へられた弱味と痛手とを、漸次にいやしてくれたベスト・サナトリアム——私にとつての最良保養所の所在は、到る處々の山々であります。あの幼な時、朝な朝な私に呼びかけてくれた六甲山脈の峯つゞきから始まつて、爾來今日まで五十幾年かにわたつての事は云

ふ迄もなく、更に最近の事を申せば、この夏初めてとほつて見た十文字峠、――あの信州の梓山から、牛馬放牧の牧場をぬけて、溪谷を登つて、原始林をくゞつて、頂上の一休み、海拔六千六百尺の清風に汗を入れて、東へ一轉、あの急坂を直下して、栃本へおりて來た時のあの十文字峠に至る迄の間に、起伏蜿蜒、到る處々に私を歡迎してくれた山々にあります。またこれから後とても、幾久しく私を呼びよせてくれるらしい山々にあります。此等の山々に對して、私の捧げる感謝――この世に生れた一人前の人間として、十人並に惱みもし、働きもする間に、つねに遠きを望み、かつ高きを仰いでゆく人の子として、私の捧げる感謝は、まことに山々であります。

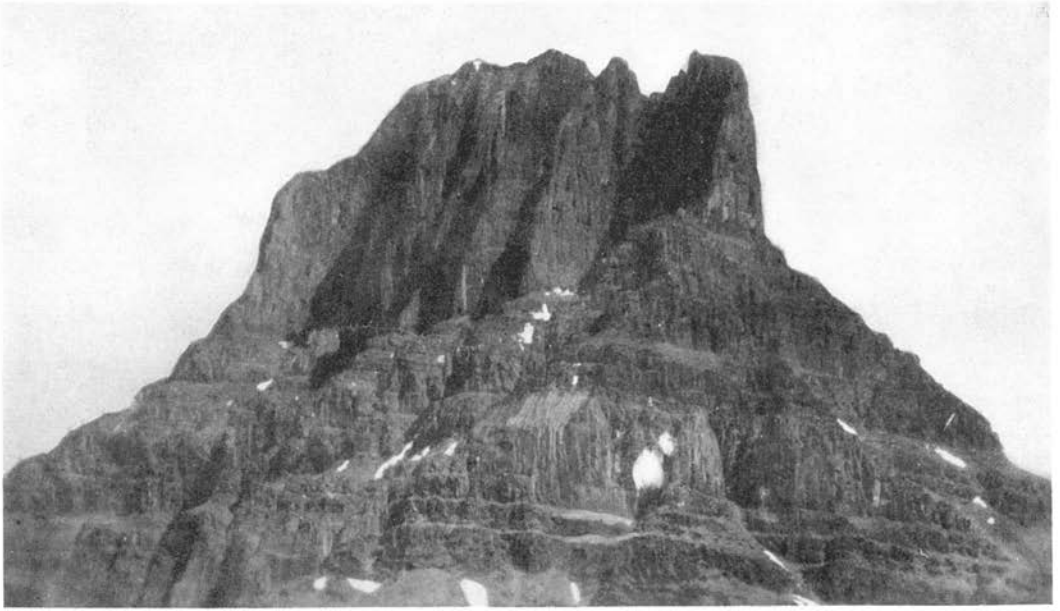
その山々の感謝の、また山々への感謝の、言ひあらはしとしての、私のこのおしやべりを、かやうにお引出しくださつた事に對して、私が玆に心から申上げるお禮言葉の、遠方のめあては、あのウォタア・ウェストン氏、そして手近な對象は、諸君日本山岳會の御一同。まことにありがたう御座いました。

あとがき

この思ひ出話の實際演述の時間は一時間三十五分、そしてその分量は勿論この稿の幾分かの一。丁度曾遊の山の地圖にしるしつけた赤線のあとのやうに、速記の復文を再びたどつてゆくうちに、詳說細叙の興を自ら禁んじ得なかつたり、また脇みち横みちにさそひ入れられながら、自ら迷ひ込まぬうちに、一本筋の本みちにとつてかへしたりした。その結果が御覽の通りのもの。この仕事は、私にとつて、全く "It gorws, in spite of me" の一ケースであつた。

（昭和九年、クリスマスの朝）

アルバータ東南面(クライネアルバータ中腹より)　　岡部長量



アルバータ西南面(ベースキャンプ裏山より)　　岡部長量

アルバータ遠征の追想（二）

三田幸夫

ヴアル・フィン氏との會見

ヂャスパー・パーク・ロッヂの第一夜は、正直の處、私にとつては、不思議な興奮と、不安と、又希望との交錯に依つて安眠が妨げられた。

汽車を下り立つと、プラットフォームのないヂャスパーの驛では、夜目にも直ぐ解る樺色のネル服の槇氏が、線路の傍に立つて私達を迎へて呉れた。そして、一人、一人と握手が濟む迄には、大事な會話は、至極簡單に濟んで了つた。

「此方（コッチ）（ヂャスパー）の準備は？」

「萬事大丈夫、然し君達の方は？」

「すつかり揃つた、寫眞丈が後から來る。」

荷物は出迎へのポーターに依つて運ばれた。私達のみ別の車でロッヂに向ふ。スピードが出ると頰を過ぎる風が仲々冷い。車は動搖しないが、小砂利を嚙むタイヤーが靜かな夜に寂しい音を軋ませる。

「然し」――話の途切れた時、突然槇氏が皆の注意を促す様な語調で云つた。――「アルバータを狙つて居る登山家が來た相だ。そして、此處を發つてから既にもう、幾日かになる」。皆は急に默つて顏を見合はせた。その事に就いて、皆は思ひ思ひの事を胸に藏ひ込んで何も云はふとはしなかつた様だ。

ヂャスパー・パーク・ロッヂはすつかり靜まり返つて居た。車は大きなメイン・ロッヂの手前で止まつた。そして私達は左手の、一番奥に離れた一棟のロッヂに通された。質素な丸木小舍は直ぐ私達の氣に入つた。皆の部屋の割當が濟むと、一同は槇氏の部屋に集合した。フーラーも來合はせて、改めて我々の一人々々に紹介された。そしてポートワインの栓が拔かれ、第一夜の祝盃が擧げられた。ハインリッヒ・フーラーは瑞西グスターフでの名のある案内者、C. N. R. (Canadian National Railway) の依頼で、ロッキーの夏山に出稼ぎに來て居た譯である。先着の槇氏とは既に舊知の様な親しさに見えた。ヘル・マキの名は勿論好く知つて居た。彼のゴツい英語で語られる山の話は何時迄も皆を惹き付けたが、周圍の靜寂さに夜もかなり更けた事に氣がつくと、彼は、床板に軋む鋲靴の音を氣兼し乍ら、小さな聲で「グッドナイト」と挨拶をして出て行つた。

電燈を消して、ベッドに潛り込むと、糊の好く效いたシーツと枕覆(ピロウケース)ひの冷い感觸が餘計眼を冴えさせて了ふ。車の中での槇氏の言葉が氣にかゝつてならない。そんな事を氣にかけるなど自分自身を笑つて了はふと、努力をすればする程頭の蕊が澄んでくる。夢幻の裡に未だ見ぬ山の氷河を彷徨ひ始めたのは既に曉方近くになつて居た様に思ふ。

ヂャスパー第一日の朝は稍ゝ陰鬱な曇天に明けた。樹間を縫ひ、忙がしげに木片を運ぶ海狸(ビーバー)を湖畔に訪れて靜かな半日を過した。然し乍ら、母屋(メインロッヂ)から屆けられたエドモントン・ヂャーナルの特報は、私達をしてじつとし

て落付いた氣分のまゝに置く譯にゆかなかつた。

七月七日、有名なる日本の登山家槇氏とその一行六名はヂャスパー・パーク・ロッヂに到着した。一行は同地國立公園に滯在中、ロッヂ附近の未踏のピークに登攀を試みる筈である。槇氏及びその一行の人々は、世界の各地に於いて慓悍なる登山家として既に相當の名ある連中であるから、その結果は目下ロッキーにあつて各ピークに登攀中のアルピニスト達の間には非常な興味を以て見られて居る。

昨年、キャルガリーのエム・シー・ゲッズとエドモントンのシー・ヂー・ウェーツを伴つて、ゲイキー峯（一〇、八五四呎）を征服して大いに名を擧げた費府のヴァル・フィン氏はヂャスパー・パーク・ロッヂを出發した。同氏は、國立公園中に於ける、最も難物として、曾て登攀の成功せられた事のないアルバータ峯をやらうと試みて居る。同氏とその一行がロッヂに歸着するのは、凡そ十日程も後の豫定である。」

氷河も未だ知らなかつた吾々は、此の記事を見て、頗る擽つたい感に打たれざるを得なかつたが、槇氏の前夜の言葉が、かう明瞭に活字に依つて裏書されて見ると、愈ゝスタートラインに立たされたスプリンターの樣な異常な快い緊張感に充たされざるを得ない。それにしても、遙々とめざして來た同じアルバータに向つて、然も僅か數日前に此處を發つたと云ふ登山家とは一體何者であらうか？　吾々の計畫を知つての行動なのであらうか？

然し、此の日、吾々は、母屋（メインロッヂ）の物置小舍（バッゲージルーム）で、偶然なる、忘れ得ぬ場面にぶつかつたのである。

私達は、埃にまみれた澤山の荷物を解いて克明な點檢を始めた。愈ゝ最後の愼重な準備を開始せねばならぬ。最も大切な、繩、靴、氷斧、天幕、等々、ノートと一つ一つ對照（チェック）された。その忙がしい最中、私達は其處に豫期せぬ訪問者を迎へたのである。六尺豐かの、肩幅の廣い、年の頃は四十前後か、赭顏の偉丈夫がフーラーに依つ

て吾々に紹介された。最初に槇氏と挨拶を交はした。アルバータに向つたヴァル・フィン其の人であつた。

フーラーがニコニコし乍ら言ふ。

「こちらがヘル・マキ、あのアイガーのオストグラートの」

フィン氏は、姿勢を正して、

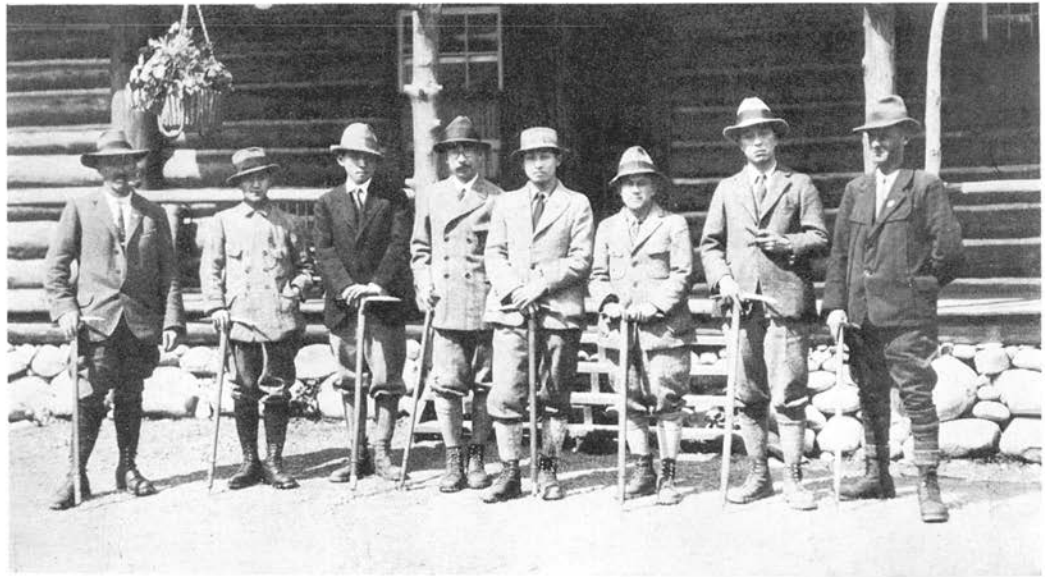
「あゝ、あなたがマキさんですか。あのオストグラートの。改めて、御成功を御祝ひ申上げます。」

兩人は、手を握り合ひ、槇氏も例の丁寧な調子でフィン氏のロッキーでの、色々の記錄の程を讃えて居た樣だつたが、私は明瞭に覺えて居ない。その後で、吾々も一人一人紹介されて握手を交はした。握られた時は痛い樣な大きな掌だつた。

フィン氏のアルバータに對する知識は實に豐富なものであつた。遺憾ない程度に研究されて居た。そして、その研究の結果を、親切に、少しも隱す事なく敎示して呉れた。彼が試み樣として居た登路は、吾々が日本で地圖や寫眞の上から考へて豫想して居たものと偶然一致して居た。吾々は、彼の不運な敗退に心から同情する氣になつた。そして、槇氏は、構はなければ吾々と行を共にして再擧を計らないかと奬めたが、彼はどうしても時間の都合がつかぬと心から殘念相に辭退した。彼は吾々の登山具を見て、非常に感心して居た樣だつた。そして言つた。

「あなた方なら、きつと、成功するでせう。又、そうあるべき事を祈つて止みません」と。

その翌日、朝食の後、私は母屋(メインロッヂ)のベランダで獨り空を眺めて居る彼に會つた。私達は今日出發の筈だつたが、活動のフィルムが未だ着かないので明日に延ばしたと言つた。彼は、今日愈々費府へ歸る事にした。又、來年や



ヂヤスパーパークロッヂ前に於ける一行　　C.N.R.寫眞技師Davis氏

下降中休息をなし得たる唯一の個所

つて來やうと言つて居た。そして私の手を固く握り乍ら言つた。

「では御大事(グッドラック)に、心から成功を祈ります。」フィン氏のこの溫い言葉と、その寂し氣な言葉は、到頭之が最後のものとなつて了つた。其の後私は、印度に行つて居る時同氏の訃を聞いたのである。

費府へ歸つたフィン氏が、後日英國山岳會のキャプテン・ファーラー氏へ寄せた私達への印象を記述した手紙の一部を此處に紹介して見るのも面白いと思ふ。

「私がアラスカから歸ると、ヂャスパーには六人の日本の登山家が居た。彼等は、コロンビヤ方面（アサバスカの水源コロンビア氷原地方の意）の登山をやる爲めに態々日本からやつて來たのだ。一行のリーダーはミッテルリギで有名な槇有恒氏であつた。私は紹介された時は、彼の名を聞き洩らした。そして、ヂャスパーに於ける最後の日迄彼があの登攀のヒーローであつたと云ふ事に氣がつかなかつた。（フィン氏は吾々がロッヂの倉庫で紹介された日をとり違へて居るらしかつた。）私は此の日本人達が態々カナディアンロッキー登攀の爲めやつて來た事は實際えらいものだと思つた。そして、總てを出來る丈愉快に氣輕に取り計つた。彼等はフィンスタールホーンで知られたウルリッヒの兄弟なるハインリッヒ・フーラー及び、有名なマイリンゲンのニクラウス・コーラーの息子のハンス・コーラーを契約した。彼等は私にも同行を求めたが時間が許さなかつた。

私は、極力彼等にアルバータを試みん事を奬めた。そして、萬一、アサバスカ河の西側の支流が今年の馬秣を駄目にしてる程荒れてるか、又、火事が未だおさまらぬ場合には、ウイルコックス峠の北面の傾斜にある小さな支谷から多分到達出來るであらうと注意して置いた。」 Alpine Journal — Nov. 1925.

× × ×

フィン氏（Valère Alfred Fynn）は、一九二九年三月二〇日、北米セントルイ市に於いて五十八才を以て永眠された。從つて、吾々が邂逅した時は、五十四才であつた譯だが、とてもそんな年に見えぬ程の元氣さであつた。その年齢を以てアラスカの獵に出かけ、猶ほ、カナダの峻峯に、立派な初登攀の記錄を盛んに作りつゝあつたのだ。氏はロシア生れの電氣技師。アルプスには幾多の不朽の記錄を殘して居る。私は、カナディアンロッキーに忘れ得ぬパィオニアーの一人を失つた事を深く惜しんで止まぬ。

ブルウスター君

ロッキーの旅には馬が是非共必要である。殊に相當なものをやる以上、從つて大勢の隊員が可なりの日數をかける樣なエクスペディションと云つた形式をとるからには、荷物の運搬並びに、隊員自身の爲に、荷馬（パックホース）と乘馬（ライディングホース）は絶對必要のものとなつて來る。

ヂャスパーには、此の馬や、食糧品等を一手に引受ける馬方の親分と云つた格のブルウスター君が居た。同君は、歐洲大戰にも出征した事のある豫備少佐とかで、大分幅を利かして居た。同君の惡親切過ぎる程の世話で、十四頭の乘馬と、廿四頭の荷馬が用意され、荷物も適當に配分された。が、山中一ケ月間の食糧、荷物はこの廿四頭の馬を以てしても運び切れないので一部分は後便に託する事にした。

ブルウスター君は、馬の外に、料理人二名、馬方四名を世話して呉れた。料理人は板前格のキャンプ、洗ひ方のレイ、馬方は案内頭（ヘッドガイド）のロランス、その手下のドナルドとアングーソン、それに名前は忘れたが瑞典人の美少年

が一人。

馬小舎の前の廣場には荷物をすつかり擴げ、ブルウスターの指圖に從つて、馬方連は荷物の大きさと目方を計つて適當に分類する。吾々は、之を一々ノートし乍ら番號をつけ、何の馬に何がつけてあるか直ぐ解る樣に手配する。此の日は、好く晴れて、秋の陽さしの樣。エディスキャベルや、コーリンレンヂも直ぐ手の屆く樣に近く見える。メイン・ロッヂのお茶の舞踊會騷ぎを外に、吾々は夕暮迄この忙がしい、然し朗らかな出發の準備に沒頭した。

アサバスカ溯江、馬の旅

七月十一日、ヂャスパーを發つてから七日間、私達のキャラバンは、徹頭徹尾アサバスカ河に沿つて南進した。其の間露營する事六度。一回も雨に會はなかつた事は幸運であつたが、その代り、乾燥の程度は極端で、キャラバンの過ぐる處、埃は白煙の樣に濛々と立ち籠めて壯觀の極であつた。

山火事の跡は到る處に見受けられた。方、數哩から十數哩に亘るものは珍らしくない。フィン氏が追ひ返された山火事も可なり大きなもので、吾々が通過する頃は、未だ方々煙が燻つて居た。馬が蹴散らす灰が眼鼻に這入り込むのには頗る惱まされた。黑焦の倒木を跳び越える度にヒヤヒヤさせられる。何しろ、岡部、波多野以外には乘馬は餘り得意でなかつたのだから。

枯葉の堆積は數尺の厚みに達し、之がすつかり乾燥して居るから、これに火がついたらば一大事である。丁度懷爐灰に火がついた樣な具合になつて、劇い時は、雪が降り積る迄消えない事があるとの事である。從つて、火

の仕末に對しては、皆極端な神經過敏振りで、吾々は煙草の吹殼は勿論、燐寸の軸木も馬上から捨てる譯にはゆかなかつた。皆鞍の一部に、紐で空鑵をぶら下げ、これを馬上煙草盆の代用として行進を續けた。

先頭は毎時も大きな斧を携えたドナルド爺さんが承はつた。河に沿つた路が失くなると、河岸迄迫つて居る唐檜(ルース)の立木を倒して進んだ。横着な荷馬は、毎時も列から離れて脱走を企てる。それを兩側からロランスや、スウェーディー(皆はスウェーデンの美少年を名前を呼ぶ事なくかく呼んで居た)が巧みに馬を乘り廻し、後になり先になつて此等の奔馬を列に追込む。然し此の手に負えぬ馬達は、今度は荷物を立木にぶつけて吾々に仕返しを續けた。その爲めに、可なり散逸した荷物もあつた。露營地へ着いてから、大切な寫眞道具が紛失して居るのに氣付いて數哩も探しに引き返した事もあつた。

それでも、樂な河岸を、濕つた砂地をゆつくり行進する氣持はとても長閑なものだ。さう云ふゆつたりした行軍の時を見計らつてよく晝食にした。と云つても、呑氣に馬から降りて腰を落ちつける事は割に稀であつた。馬上で鞍の上に締りつけた紙袋から、ヂャムとバターをふんだんに塗りつけた部厚なサンドウィッチを頬張るだけ。菜はソーセーヂと豆を程好く煮たものがうまくとり合はせてあつた。そして食後は蜜柑。馬達は鞍上の主人の晝食も無關心で靜かに行軍を續ける。晝間の太陽の直射は仲々熱い。うつらうつら、西岸の奥に立ち並んだ氷河の山々を夢の樣に眺め乍らアサバスカを上へ上へ溯つた。

一行は毎時も、馬の糧食を充たし得る草地を標準として露營地を定めなければならなかつた。從つて、或る時は十哩足らずで一日の行程を終る事もあつたし、又、或る時は廿哩の餘も踏張らねばならぬ事もあつた。

露營地に着くと、流石に馬達は一番嬉し相だつた。鞍を外し、轡をとつてやると彼等は思ふまゝの處へ走り去

る。然し、彼等も、毎時も決つた仲間で群をなして勝手に森の奥深く遊びに行つて了ふ。馬の去つた後の露營地は、天幕を張り、臺所を造るのに忙がしい。尤も、大概の場合は、料理人のキャンプやレイ達が一走り先廻はりして、吾々が到着する頃は、熱い珈琲を沸かして待つて居て呉れた。

露營地の食卓は、毎時も賑やかだつた。きまつて出された乾隱元の甘煮がとても美味かつた。加奈陀山地の旅行者にとつて一番の御馳走の樣だ。時には食後の御菓子迄作られた。それから寢る迄の數刻。山の話、都會の話。故國の想出、合唱。

然し、流石に寢袋に這入り込む時には、未だ見ぬアルバータの姿が腦裡にこびりついて離れない。それでも、一行は實によく熟睡した。從つて、朝は、毎時も、料理人(コック)が洗面器の底をたゝき乍ら、「朝飯(ブレックファスト)ですよ(レディー)!」と天幕の口で怒鳴る迄は眼が覺めなかつた。

朝飯が又、實に美味かつた。トースト、オートミール、ハム、ベーコン、豆、珈琲、紅茶。少く共、日本の山では、味噌汁が精々と云ふ旅行をしつけた私にとつては、之は大變な御馳走だつた。從つて、毎朝の食慾は頗る旺盛極まるものであつた。

私達は、朝も、晝も、又、一時間の餘裕ある夕食にも、遂にお米の袋を解く事をしなかつた。勿論、料理人が居て充分飽きない營養食を料理して呉れるし、多少、自分達でやらねばならぬ日本食の面倒臭さもあつたには違ひないが、此の事は今後も相當考ふべき重要なる食糧の問題と思つた。

四十頭近くの馬を擁する一行の出發は仲々大變だ。天幕を疊み、諸道具を片付けるのにも一時間は充分かゝる。それに問題は毎時も放した馬を集める事だつた。馬方(ホースガイド)のロランス達は、手近の裸馬を摑まへると、無雜作に鬣を

手綱に、馬の首に吊した鈴の音を便りに森深く這入つて行く。そして識らぬ間に、方々から散逸した馬を追ひ集めて來る。然し、時に依つては、數時間、永い時には過半數を失つて丸一日かゝつて露營地に停滯して了つた事もあつた。それだのに、長い旅を續ける爲めには、毎日、馬は野放しにさせて充分な休養を與へられねばならなかつた。又同時に、横着な馬は、露營地に着くと、よく皆の眼前で仕置きを受けて居た。外の馬が放されて居るのに、罪馬は大きな立木に繫がれて尻の邊りに丸太の鞭を打たれて居た。ふてくされて暴れる馬を眺め乍ら、ドナルド爺さんが「勝手にしろ」と笑つて居るのは決して憎んでの仕置きより、可愛い子供への折檻の樣に見えた。

キャラバンは、上流に進むに連れて渡渉を頻繁に繰返へさせられた。然し、先頭は常に、巧みに淺瀨を發見した。それでも危く泳がせられ相な個處にも幾度か遭遇した。山の勇者フーラーも、此の時許りは、墨其西哥鞍に結びつけた登山繩を便りなさ相に握り締めて居た。

七月十五日の夕方、吾々は始めてアルバータの頭部を間近に見るアサバスカの左岸露營地に到達した。緊張味は、一日一日と加はつては居たが、愈々アルバータの峯頭を眼の當り見せつけられては呑氣な馬の旅も漸く終局に迫つた事を感じた。

私達は、此の夜から、翌日一杯かゝつて、一組は、露營地の裏山を千呎程登り、問題のアルバータ西側の岩壁を觀察した。望遠レンズを通して察知した結果は先づ到底難かしいと看做せざるを得なかつた。

槇、橋本、ロランス、ドナルドの四人は、アルバータの南部に喰ひ込む支流ハーベル・クリークの畔に根據地を發見すべく出かけた。

アサバスカ河右岸山火事の跡

途中の露營地にて

アサバスカ河上流地方を訪れたものは、私達以前には一九〇七年にシャッファー夫人(Mrs. M. Shaffer)一九一六年、ミッチェルとブライアン (B. Mitchell and H. Bryant)、一九一九年、加奈陀測量部員、一九二〇年、カープとパーマー (A. Carpe and H. Palmer)、一九二四年には、ヒクソンとパーマー (J. W. A. Hickson and H. Palmer) 及びハーモンとフリーマン (B. Harmon and L. Freeman) の諸隊があるが、眞劍に登山の目的を以て這入つて居るのは一九二〇年のパーマーの一行かも知れない。尤も一九〇一年に伯林のハーベル (J. Habel) は、大きな登頂の記錄は持たぬがキングエドワード峯の西に續く無名の山を六、七〇〇呎登り、其の附近一體にパイオニーアとしての氣を吐いて居る。

ベースキャンプ

七月十七日、夕方の六時頃、吾々は漸く豫定の地點に露營地を選定した。アサバスカの本流から約五時間這入つたハーベル河の左岸。高距約五千五百呎。

吾々六人の大形圓錐型の天幕の周圍に、瑞西人、加奈陀人達、料理場、食堂等の天幕が張られた。暗室も樹間に作られた。ハーベルの對岸へ渡る爲めに簡單な獨木橋も完成し、裏の小川には、粗末乍ら、具合の好い腰掛便所迄こしらへた。急場の傳令の爲めに數頭の馬は對岸の急な草地に殘し、他の三十頭餘はロランスをしてヂャスパーへ歸さしめた。ノース、ツウインの氷河から流れ出るハーベルの流れは、アサバスカ同樣白濁して居るが冷い事氷の樣で手を入れて居られない。炊事には、裏の小川の澄んだ水が役立つた。焚木は裏に續く森林に幾らで

もあつた。此の邊一體晝間は太陽の直射が劇しく、眞夏の樣に暑いが、太陽が沒すると急に寒くなる。天幕内の溫度は、毎朝攝氏七度近所であつた。

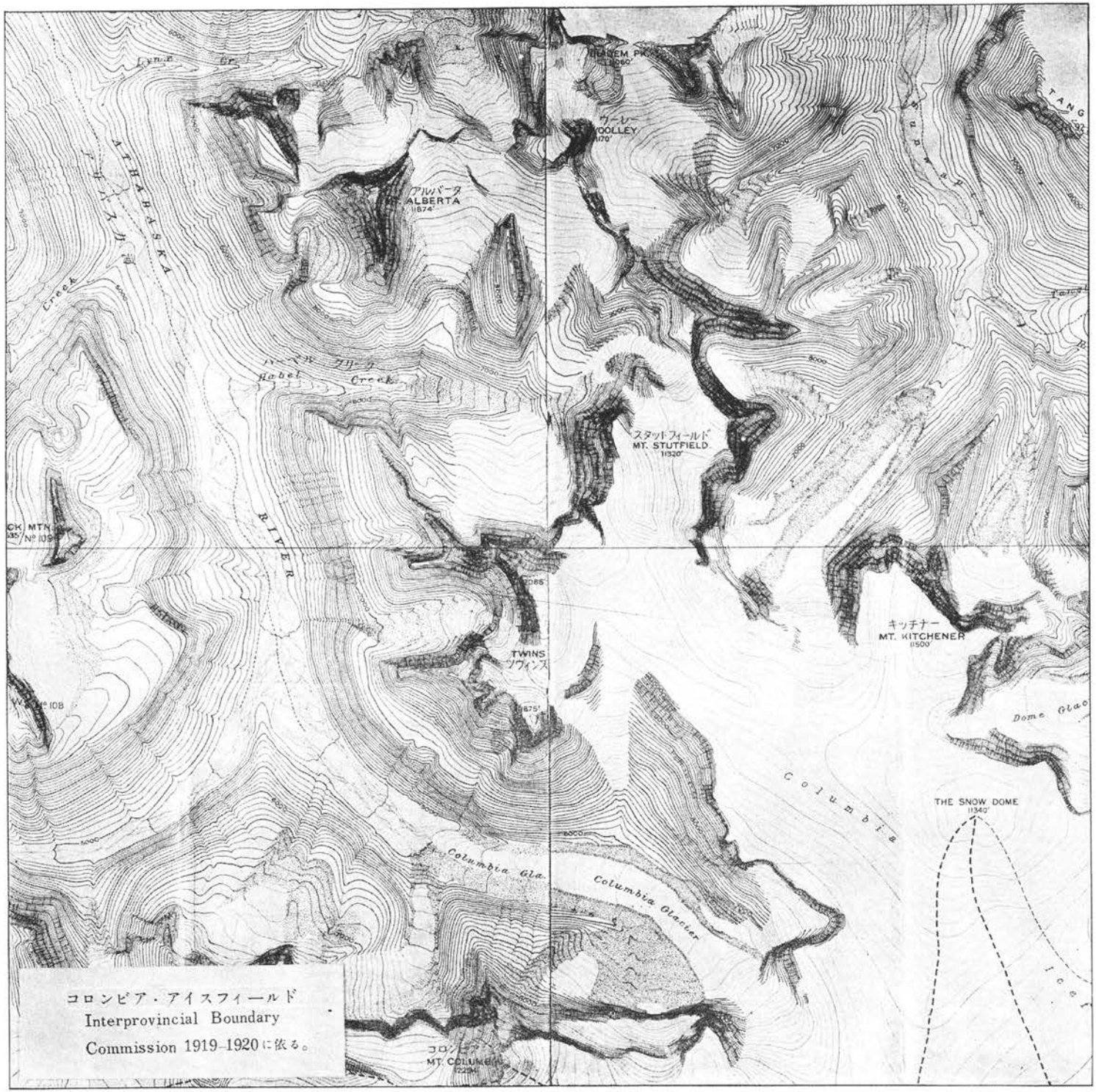
吾々は、此の根據地に於いて、充分な休養と、アルバータの東南側の岩壁に就いて精細な登路の研究をした。各方面からの望遠寫眞は直ちに現像燒付されて登路決定にも可なり役立つた。そして吾々の登路は東、南面以外に先づないだらうと云ふ事に決定したが、これは、日本で色々研究して來た第一豫定登路と略ゞ一致して居たのは偶然であつた。そして此の豫定路は、バル・フィン氏の計畫した東南面であつたのみならず、※當時、山岳會の副會長ホワード・パーマー氏及び加奈陀山岳會長のドクター・ヒクソン氏も共に此の東南面を狙つて居た事を後で知つた。

※一九二四年の夏パーマー及びカープの一行に依つてなされたアサバスカ河源頭のキングエドワード峯(Mt. King Edward — 11,400 ft.)及びアルバータへの遠征記錄の中から、パーマーのアルバータに對する印象其の他を部分的に拔萃し、以て私の記述への補足とし度い。

× × ×

キングエドワードと、アルバータは、總ての事を考慮に入れて、恐らく此の山脈中での最高登攀に規格せらるべきものであらう。北望すれば、形貌も凄まじく「恐ろしき山」アルバータは直立して明らかに何者も近付け難い樣子を示して居る。古人なりせば、此の薄くして直立一、八〇〇呎に及ぶ鷄冠を戴せた如き段階狀のピラミッドをして、バベル塔への絕好のモデルとしたであらう。　(キングエドワード峯よりの眺望)

× × ×



コロンビア・アイスフィールド
Interprovincial Boundary
Commission 1919-1920に依る。

吾々の此のアサバスカ河水源に這入り込んだ主なる目的は、登攀の難題として何等知られなかつた處のアルバータを探索し、且試みんとする事であつた。私の、此處への前の訪問が、最善の登路はアサバスカの支流たるハーベルの谷の上部からであらうと云ふ事を表示して呉れた、卽ちこれは、必ずやアルバータ東面への進路を與へ、同時に、適當なる高位置の露營地を提供した。で、これなくしては勿論何等なす事も出來ぬであらう。アサバスカ河から見える西側は登攀の可能性を全然與へて居らぬ。

キャンプ・アルバータ

ベースキャンプから暫くハーベルクリークを溯るとスタットフィールドからの大きなモーレーンにぶつかる。その取付きの北側から白糸の瀧と云つた樣な瀧がかゝつて居る。その瀧の上に一寸した草地がある。アルバータの南、南東の直下。此處以外に私達は適當の露營地を求める事は出來なかつた。從つて、私達は此處にアルバータへ挑戰の最後の陣を敷いた。

私達は此處をキャンプ・アルバータと呼ぶ事にした。高距約六千八百呎。焚木はなかつたが、綺麗な水が傍を流れて居た。私達は、最初に二張の天幕と、數日間の食糧を運び上げた。私達は勞力を可及的に消耗せぬ爲め瀧を搦む最短路を除けて、大迂回し乍ら樂な路を執つた。そして各自焚木を少しでも餘計に運び上げた。

此處の眺望の素晴らしさ、豪壯な事は今に忘れ兼ねるものだ。幸運な事に、天候は依然として快晴を續けて居て呉れた。餘りの好天氣續きに突然破れはせぬかと云ふ取越苦勞を大分させられた。然し私達は、愼重な、合理的な準備が充分に終了する迄は飽く迄隱忍自重すべきである事を自覺はして居た。

アルバータは既に眼の前に、寧ろ鼻がつかえると云つた様な近くに迫つて居る。近付くに從つてその威嚇の度を加へて行く様に見える。登路探索の日、最初に此の東南面の岩壁を見せられた時、私自身は、之が登れるものだらうかと思はれた。恥しい事だが、私の少ない經驗から云へばそれが當然な印象だつたに違ひない。

然し乍ら、私達を取り圍む山々は、アルバータを除いては、どれもが長閑な美しい眺めであつた。赤褐色の荒い膚をすつかり表はしたノースツウインやスタットフィールドの懸崖と、處々青く光つた懸氷河(ハンギングレーシヤー)。鰐がうねつて、背中の鱗が逆立つた様なスタットフィールド氷河のセラックス。スタットフィールドの肩からはのべつに氷崩(アイスアバランシエ)を落して居た。瀧の様に、落ちて碎けて濛々たる白煙となる。すると巨砲の様な音響が谷から岩崖へ、ぶつかり合つて暫くの間こだまを繰返へす。

私達は、忙がしい準備の幾刻かを割いては天幕の横に寢轉んで、この美しく且つ男性的な環境の中に山男の幸福を泌々と味はつた。

登　頂

七月の二十一日、私達は遂に頂に立つ事が出來た。運が好かつた。一行に間違ひもなかつた。

二十二日の夜、依然、沈默を續けて居る頂を見上げ乍ら、私は天に感謝する事を忘れなかつた。私の小さな經驗からも、自然の力の如何なるものであるかを心に徹して知らされた事があるから。然し乍ら、その時、私は曾つて持つた事のない胸の中に藏ひ込んで置き切れぬ様な大きな悦びを感じた事を白狀する。私は、ベースキャンプへ歸ると、第一番にこの悦びを解つて呉れる筈の仲間への便りをせねばならなかつた。又、これが私達の當然

の義務でもあつた。

今此處に、O君への便りをそのまゝ載せて登頂印象記の代りとし度い。但し餘りに私的に亘る部分は削除した事は御斷はりして置く。

O兄　　一九二五、七、二五　　ベースキャンプにて

喜んで呉れ給へ。到々、アルバータの頂に立つた。

出發の前夜は、どうしても眠れなかつた。隣に槇君も時々動いて居る樣だつた。背中に當る岩が氣になるので之を引張り出し、漸く天幕をまくつて外へ出す。隣の天幕からフーラー達の嗚聲が聞える樣な氣もする。皆も本當にぐつすり寢込んで居たのかしら？

兎に角、どんな處へ行つても平氣で寢られる奴は本當に羨ましい限りだ。十二時頃一寸ウト〳〵としたと思ふともう二時近くになつて居た。呑氣な冗談を言ひ交はし乍ら、天幕の中では賑やかに仕度が始まつた。僕も一緒になつて冗談を言つては居たが、その冗談はどうもピッタリとはして居なかつた樣だ、正直の處。

外では、もうフーラー達の焚火が威勢好く燃えて居た。一寸溫度が高い樣な氣もしたが空具合は大丈夫だ。

アルバータの眞黑な頑丈な體軀。何だか僕達の上へのしかゝつて來る樣な氣がした。三田平で、夜中天幕から出て劔を見た時、何となく劔が恐ろしい樣な氣がして天幕へ逃げ込んだと誰だつたかゞ言つたが、まんざら大げさ過ぎる話でもないと思つた。その時のその人の氣分で感じ方の程度は色々變化するものなのだらう。

ウーレイに續く氷河が低く、鞍部の樣になつて、丁度一の越冬の曉を想ひ出させる。その右上にカシオペアが輝いて居た。

平な岩の卓上(テーブル)の上に、フーラーの切つたパンが無雜作に並べられて居る。皆は立つたり、近くの岩に腰かけたり、皆アルバータを見上げ乍ら、バターと、ヂャムと、ソーセーヂを御菜(サイ)にパンを頰張つた。熱い紅茶は毎時でも美味い。餘つた奴をテルモスへ詰め込む。

リュックサックの中をもう一度一通り調べて見て、繩を外(ソト)へつける。

三時四十分、愈ゝ出發。最後のものが焚火を消す。直ぐガラ〳〵登りだ。涸澤の岩小舍からのあのガラ〳〵登りの氣持だ。フーラーの先頭。ゆつくり登る。好い工合の速さだ。

四時五十三分、高度二、四七〇米突、氣溫攝氏八度。小憩して始めて繩を結んだ。吾々九人は左の通り三つのパーティーに分かれた。

先　頭　フーラー、コーラー、早川

中　　槇、橋本、三田

殿　り　ウェーバー、岡部、波多野

先頭は、登路の發見。フーラーの老練、コーラーの果敢な活躍に配するに早川の强力を以てした。此は確かに好い組合(コンビネーション)せだつた。早川の語學が心配だつたが眞劍な場合には、自ら意志は疎通して了ふものだ。

中(ナカ)は、槇君の獨逸語の通ずる處から前後の連絡、指揮の役目。殿りは後の抑(ヨク)へをすると共に多少共時間に餘裕がある處から、要所々々には歸路の目標を誤まらぬ爲め積石(ケルン)を積んだ。吾々は全部トリコニー鋲の靴を穿き、瑞

西人はクリンカー鋲の靴を使用した。

五時五十五分小憩の後、雪の急斜面にトラヴースが開始される。雪はザラメで岩片と一緒に直ぐずり落ちる。相當惡い。愼重な一歩々々が始まる。

七時、豫定の二段目の、前以て觀察して置いた三段目の黑い岩層への稜線の直下へ出た。前々から、東南面の登路としては、此處を除いては一寸何處も取付き難いと思つて居たのだ。僕達は最初の豫定地點に無事到達してほつとした。

一同乾杏を喰べ乍ら一休みした。フーラーは上を見上げ、笑ひ乍ら言つた。

「相當なものですよ」と。

彼は大きな岩の蔭に水筒を隱して、その岩の上に積石を作つた。

「水筒はもう餘り必要もなさ相ですよ」

彼は言ひ乍らゲートルを締め直して居た。

稜線の角度は可なり急だ。それに赤い石盤の樣な薄い岩が重なり合つて自分達の方へ屋根瓦の樣な感じで傾斜して居る。それが一寸手をかけると幾らでもずり落ちて來る。

逆層の極度に性質(タチ)の惡い奴だ。ずり落ちたその石盤は、或る時は、三尺四方もある樣な大きな奴が、落ちるに從つて、縱に廻轉を始め、風を切つて飛んで行く。こんなのにぶつかつたひには、身體が一度に切斷されて了ひ相に思はれた。

この惡場に手こずつて、狹いクロアールの氷にステップを切つて登つた。第一のパーティーが登つて居る間、

第二、第三のパーティーは毎時も、何處か大きな岩の蔭に隱れて居なければならなかつた。鐵の樣な岩盤の落下には何ともやり切れなかつた。然し動いて居る連中は、之を落さずには登高は出來なかつた。

九時卅分、黑い岩層の直下に出た。僕達は、既に、勝敗の決するのは此の岩層にある事を充分承知して居た。

幸ひな事に、空は、澄み切つては居なかつたが好く晴れて居た。

見下すと、ウーレーからの氷河が切れて、小さな草地の端に、僕達の天幕が白く光つて居る。なつかしい吾家の感である。

見上げると、黑い堅さうな岩が、上へ、上へ重り合ひ、百米突の上は見えない。豫定の地點ではあるが、之から上は、只、登れる處を見出しては攀ぢる外ない。僕達が登らうとした處は、支稜と云ふより、岩壁に、幾條も垂れ下つた襞の一條に近かつただらう。然も、此奴が後から調べて見ると、一番傾斜の緩い個處だつた。それでも五十度近くはあると思はれた。君は、憶えて居るかい？　穗高の何處かの平な岩で、五十度程もあつたらうか。摩擦の抵抗で、どの程度迄滑落を防げるか試した事を。その時、腹這ひに岩にペッタリくつゝいたがずるずるとずり落ちた事を。

然し、知つての通り、どんな岩場だつて、手懸り、足懸りのない處は先づないだらう。此處だつてそうだつた。適當な階段は、神樣がこしらへては居て呉れたが、例の岩の逆層は此處でも同じ事だつた。堅相に見えた此處の岩も案外に脆かつた。それに惡い事には、此の時分には、太陽の直射が、脆弱な岩の間隙をぎつちりと詰めた氷を、雪を、溶かし始めた事に依つて自然と墜石が頻繁になり始めた。

小さな岩が、絕えず金屬的な音を立てゝバウンドして落ち行く。一、二度バウンドすると後は直下の氷河へ消

えて行く様に見えなくなる。岩に兩手をかけたまゝ首を縮めて小石が雪崩れ落ちて了ふのを待つて居る氣持は、戰場で頭の上を彈丸がかすめて通つて行くのに近いものぢあないかと思はれた。

運惡く、そう云つた兩手へ時々小さな石ころがぶつかる。槇君を始め、此處では一つ位づゝは皆頭に命中した。幸ひな事には大事に至る事はなかつた。

此處を登り始めると、直ぐオーバーハングの岩にぶつかつて了つた。兩側とも切り立つて居て搦む術はない。吾々は此の三米突近くの岩の下に一塊りになつて止まつて了つた。フーラーが片方の靴を脱いでカンバスのクレッテルシューに穿き代へた。片方はクリンケール鋲の靴。もう一方のクレッテルシューは上着のポケットにねぢ込んで居た。もつと惡くなつたら兩方穿く積りだつたのだらうか？

先頭のフーラー、コーラー、早川の三人は、まだるつこく感ずる程な緩漫な手と足の動作を繰返して居るが、仲々はかどらない。時々上から振り返つて見下すフーラーの顏が眞赤になつて居る。吾々は、只、ジッヘルングに之努める許り。下の波多野、岡部、ウェーバーの連中も大分惡い所にしがみついて居るので時々焦れつた相に「未だかい？」と聞く。

やつとフーラーの姿が岩の上に隱れると繩が手繰り上げられ一人々々が半分引吊られる樣に登る。仲々豫め決めて置いた岩角に手や足がかゝらない。その度毎に上、下から聲をかけて貰ふ。

自分が登つて居る時は緊張して居るから好いが、狹い岩の上に立つて、ジッヘルングをし乍ら自分の番迄待つて居る間は厭なものだ。殊に、岩が風を切つて落ちて行く音が何時迄も陰鬱に頭に殘る。

吾々は、フーラー、ウェーバー、細川侯のピッケルを除いて全部、此の岩の下に殘して行く事にした。その先

は、先づ、手と足をのみ要する登攀が續くだらうと云ふ事が充分豫想せられたからだ。

此の岩を登り切つてほつとすると、直ぐ又同じ様なオーバーハングした奴に遭遇した。矢張り横は搦めない。前と同じ動作が繰返された。早川の肩の上にフーラーが乘つた。早川の足を槇君が、槇君の身體を橋本君が支へて居る。

コーラーは伸び上つてフーラーの足場、手掛りを指示して居る。

此の時、可なり大きな、フットボール大の岩が吾々の頭を越えて落ちて行つた。フーラーの片手が岩に掴まつたまゝ、上半身が反つて吾々の頭の上に落ちかゝつて來る様に感じられた。

之は後で聞いた事だが、フーラーの話に依ると、自分が手をかけた岩が不意にぐらつと來たので、靜かに之を抱いて横へ轉落させ様と思ひ、早川に、その重さに耐えられないだらうかと聞いた。その時早川が、(之は英語の會話で好く間違えるイエスと、ノーの使ひ方で)「いゝや、耐えられる」と云ふ所を日本流に「ノー」と云つて了つたのだ。で、フーラーが此奴はいけないと思つて、一か八か、自分の身體を反らして、捨身で落した岩がうまく成功した譯なのだ。

一同は默々として登つた。一時卅分、岩壁に長さ約三間、幅四尺程の棚狀の場所を發見して始めて皆揃つて腰を下した。その棚の末端の切れた處に細い瀧狀の水が山稜の方から一直線に流れ落ちて居る。コーラーが手を延ばしてその水を水筒に汲んで皆廻し飲みをした。

僕は、今にこの時の水の味を忘れられない。時に、高度三、一九二米突、溫度攝氏十七度。少憩の後、吾々は又繩を引き締めて登攀を開始した。

吾々は只ひた登りに攀じた。そして前述の瀧の上部を横切ると、前から觀察して置いた、山稜へ續く雪の斜面の間にある細い岩稜の下に出た。細い岩片が手に觸れ、足を動かす毎に崩れ落ちた。然し、此の急な雪面を登る事は到底不可能だつた。皆、只靜かに、愼重に動いた。僕には周圍の景色を眺める餘裕は先づなかつた。前の橋本君の足許と、岩が落ちる前に聞く「氣をつけろ！」と云ふ聲に、眼と耳の神經を集中して居る丈だつたが、その中にも、時間と云ふ觀念に對する不安が絶えず附き纏つて居た。

先頭の大きな歡聲に、始めて吾々が山稜の一端に到達した事を知つた。天幕を出てから十三時間半、殆ど無休の登攀が連續した。皆は殆ど手袋を脱いで了つて居た。指先は痛むが、手袋を通しての岩への感觸は、或る場合には到底不安だつたのだ。

皆が漸く揃つて山稜に立つた。始めてアサバスカ河を下瞰した。河面迄視野を遮る何者もない。正に直下七千呎。

頂上は山稜を遙か北に傳ふ事一哩に近いだらうか？　然し吾々には登攀の最も困難な部分を克服した。皆一塊りになつて登攀續行の可否に就いて暫く論じた。若し、僕がリーダーであつたなら必ず退却を主張したに違ひなかつた。僕以外の皆は、登攀續行の贊成者であつたと思はれる。

時間は四時三十分であつた。

槇君が「やらう」と言つた。フーラーが凄い顏に微笑を含んで「もう大丈夫だ」と云つた。九人は、もう可なり前から、黑い岩層にかゝる前から、一本の繩に依つて結ばれて居た。殆ど全部の繩が使はれて、全體の長さは約八百呎に及んで居た。周圍から觀察されたこの山稜は、豫想した通りに大體に於いて、幅は狹いが平坦であつ

た。或る處は身體を谷側にはみ出させて岩を搦んだ。然し前後からのジッヘルングに依つて少しも不安はなかつた。二呎や三呎の岩の間隙は跳び越える餘裕も出來て來た。只頂上に大分近くなつてから約七十米突程のいギ深ャップにぶつかつた。然しフーラーの巧みなステップカッティングで氷の斜面を捲いて安全にその底部に到着した。此處での、岡部、波多野の下降は實に鮮やかに大膽であつた。

七月廿一日、午後七時三十五分、吾々は到々アルバータの頂に立つた。皆は、默つたまゝ一人々々手を握り合つた。槇君の眼は濕つて居た。僕にはその氣持が好く解る樣な氣がした。僕は、この時の氣持を東京に居る君に、そして君を通して仲間達に少しでも早く知らせ度いと筆を執つて居るのだ。詳しくは歸つてから話すが、この通信に依つて、君の想像力は吾々の歡びを充分解つて呉れる事と思ふ。

頂上の北端は直ぐ切れて居た。そして附近一體に氷と雪に蔽はれて居た。眼下のアサバスカが、所々、黄金色に光つて居た。空は、所謂ミスティー (misty)、然し、恐らく山火事の煙の故だらうとの事だつた。周圍の山々は模糊としてすつかり靜まりかへつて居た。殆ど音も聞えない。今迄の登攀が夢の樣な氣もする。

岡部と波多野が苦心して擔ぎ上げた細川侯のピッケルを建て、飛ばぬ樣に岩を集めて周圍に積み上げた。吾々一行の氏名、日時、天候等を記した紙片を空罐に入れケルンの底部に殘した。

吾々は此處に記念撮影をして出發した。時に八時、氣溫攝氏十度、高度三、五四四米突、氣壓四八八粍。

八時と云つても、緯度が大分北（約五十二度十五分）なので日は暮れない。尤も、此の事は目算に入れてはあつたのだが、日が永い事は大分助かる。元の山稜を南下する事約一時間、方二間程の平坦な岩の上に出た。周圍は眞直ぐに切り立つて居るが此處以外に身を休める場所は發見出來相もなかつたので此處を露營の場所と決め

る。

流石に九時を過ぎ、十時近くなると段々と薄暗くなる。寒氣も身に泌みて來る。靴が濡れたので足が一番冷い皆乾いた靴下と穿き代えて足をリュックの中へ入れた。

微風ではあるが、馬鹿に寒く感ずる。で、時々起き上つては岩を積み上げて、風除けを作つて見たが無駄な努力であつた。コーラーは立つて體操を續けて居た。吾々は蹲まつて膝の上に頰杖をつき色々な話に耽つた。フーラーは、空罐へ雪をつめて、それを蠟燭の灯に溶かしては水を作つて居た。

星が輝き始めた。寒い裡にも時々うと〳〵とした。コーラーが歌ふヨードラーのうら聲が靜かに寂しい。その歌聲の中に夜は明けた。先づ誰もが一睡もしなかつたらう。

汚い話だが、こんな時でも、朝になれば用を足す必要も生じる。再び繩を締めて岩の突端に下りると氷河から吹き上げる風に身を縮める思ひをさせられる。

チョコレートを嚙り乍ら仕度が出來上る。溫度攝氏二度。寒い程の溫度ではないのに馬鹿に徹(コタ)える。

此の記念すべき露營地の高度三、一四〇米突。冷え切つた靴を穿いて愈〻出發。時に六時十五分。

色々の意味から下降の順序が變更された。先登ウェーバー、波多野、岡部、早川、槇、三田の順で、六人が一本の繩に結ばれた。次が、橋本、コーラー、フーラーの順。

六時五十五分、前日最初に到達した山稜の一點に出た。極度の緊張の裡に下降が開始された。墜石は昨日に劣らず激しい。

雪面の岩稜下降の途中、槇君が初めて頭に墜石を受けた。暫く頭を抱へて蹲まつたのではつとしたが直ぐ下降

を續けた。細い瀧の處を横切る邊で橋本君が比較的大きい岩に頭部を見舞はれた。繩を腕へ巻きつけ乍ら一寸よろめいて岩壁に倚り掛つて了つたが暫くして「平氣々々」と起き上つた。大分出血が激しかつたが充分手當をして居る暇がなかつた。

往路の棚の個處で水が得られたので始めてパンを攝る事が出來た。前日から、皆少量のチョコレートを喰べた丈であつたが餘り空腹を感じなかつた。

降りは、大體に於いて、登りに劣らぬ困難さを感じた。ハーケンも十本程使用した。

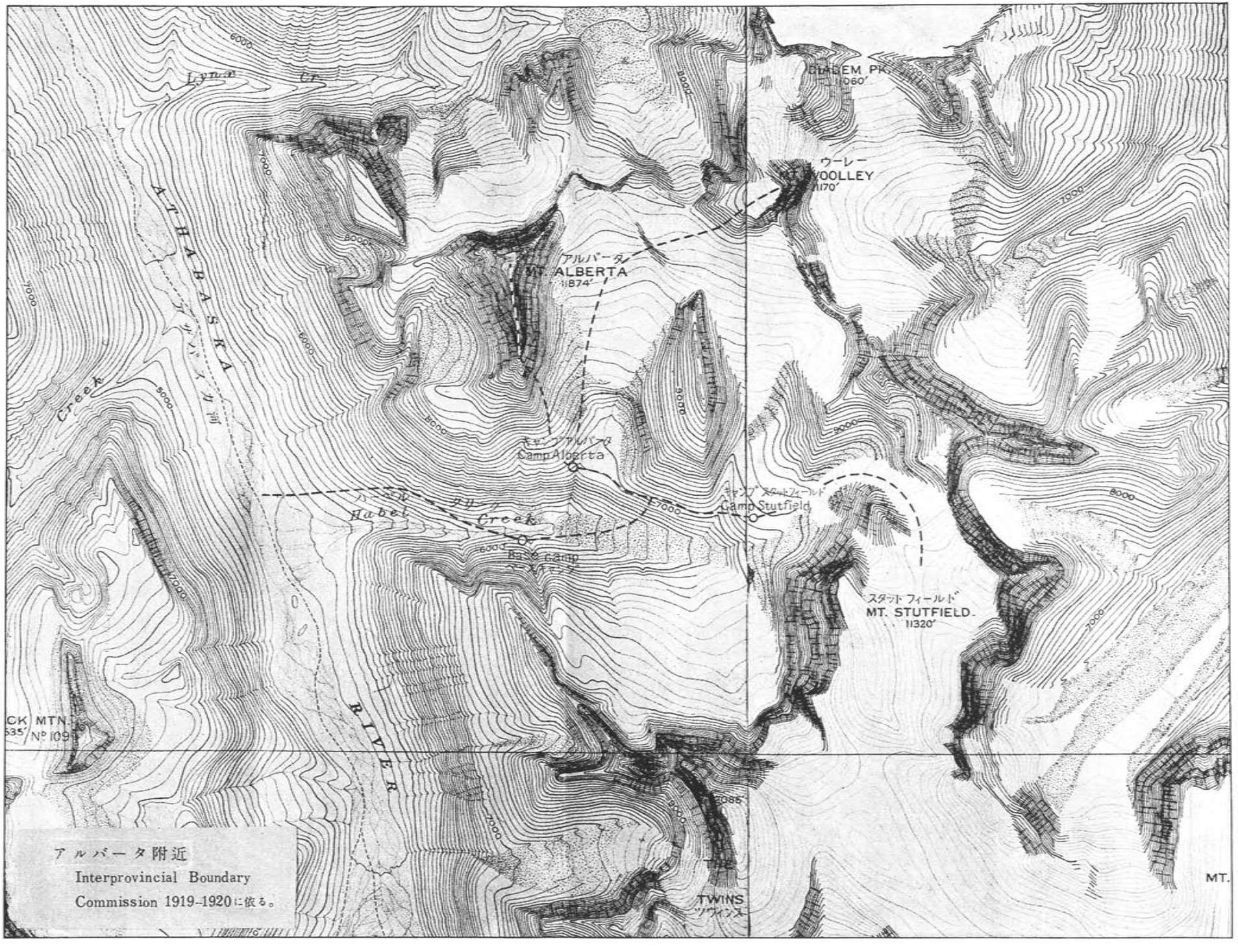
登路の難關、オーバーハングの岩の邊りから僕と、コーラー、フーラーが最後のパーティーとなつてアンザイレンした。從つてフーラーの活躍を眼のあたり見る事が出來た。

難しい處にかゝると、僕、コーラーの順で、フーラーが最後に降りた。オーバーハングの降りは流石に骨が折れた。フーラーはコーラーのジッヘルングに信頼し切つて、下も覗けない樣な岩頭に、身體を前にのめらせる樣にして足場を探す。見極めがつくと、僕から先に下りて行く。最後のフーラーがハーケンを利(キカ)して下りて來る。フーラーのポケットからはハムマーと、ハーケンの數本が首を出して居る。

惡場を過ぎる度にほつとする。そしてハーケンが減つてくる。フーラーの口から冗談も時々出る樣になつて來る。繩に縋つて下りてくる自分に、上からフーラーが怒鳴る。

「リライオン　マイ　ロープ！　ライク　モンキー」と。然し仲々こんな處で猿の樣な譯にはゆかない。

往路、フーラーが水筒を殘した地點に到着して始めてもう大丈夫と云ふ氣がした。冷い紅茶を九人で一杯宛飲んだ。



アルバータ附近
Interprovincial Boundary
Commission 1919-1920に依る。

始めて疲勞を感じ出した。然し極度の緊張から開放された安易な氣持で下降を續けた。

八時卅分、僕達は約四十一時間の長闘の後再び昨日の儘のキャンプ・アルバータに迎へられた。大きな焚火が氣前好く燃やされた。アルバータは相變らずの姿で吾々を見守つて居る。然し、今は、もう少しも恐ろしい姿ではなかつた。親しい、去り難い樣な愛着を持つた山の姿であつた。

その夜の天幕内は、九人共、皆熟睡そのものであつた。

翌朝、再び快晴に惠まれた吾々は、天幕をそのまゝ、ベースキャンプへ引上げた。下のモレーンの邊で、心配の餘りサンドウィッチをふんだんに用意して迎えに來たドナルド爺さん、レイモンドの一行に遭つた。

此の夜の大饗宴は想像に任せよう。とつて置きのラムネや葡萄酒も口を開けて大變な騒ぎだつた。

× × ×

今日はフーラー、橋本、波多野、早川と僕の五人で、スタットフィールドとトウィンの間から落ちて居る氷河へアイステクニックの練習に行つた。

セラックスや、クレバスの横斷、登降は仲々爲になつた。然しステップカッティングは御互に未だ〳〵と思ふ。今の處、明後日からウーレー、スタットフィールドをやりに出かける豫定で居る。ウーレーは大した事もなさ相に思ふが、スタットフィールドは案外大物かも知れない。愉快な事に、兩方とも未登攀だ。

× × ×

ベースキャンプへ歸つて最初の日本への便りが之だ。未だ氣持も本當には落着いては居ない樣だ。然し、一日も早く、君や、皆に此の悅びを報らせ度いのだ。僕も僕の思つたまゝを卒直に書いた。順序を追つて、平靜な立

場から色々なもつと突込んだ細い點に就いても、聞いて貰ひ度い事は澤山あるが、到底、こんな處で充分書けるものではない。歸つてから、ゆつくり膝を交へて、あの早川の大森御殿で語り明かす事にしよう。

只僕は、かう云ふ事を最後に附け加へ度い。途中は兎も角として、少く共、アルバータ登攀中は、皆の心持は全く一つになつた樣に思ふ。槇君の愼重さ、橋本君の涙ぐましい努力、早川の豪勇、岡部、波多野の確かりした技術、それにフーラーの大きな功績は見逃せぬし、コーラーは默つて終始立派な働きをした。半素人のウェーバーも彼としては、精一杯の處をやつたに違ひなかつた。

兎に角、其處には國境もなく、御互の心は實にうまく通じ合つた。

僕自身は、實の處、前述の報告が示す樣に、緊張そのもので、恥しい次第だが、君なんか讀んだら大分誇張してる樣に思はれるかも知れないし、又、他の連中に云はせれば、案外簡單に「こんな程度さ」とやられるかも知れない。然し、僕は、僕自身の感じた通りをそのまゝ御傳へするのだと云ふ事を繰返し斷はつて置く。

では、僕達の歸へる日には、是非外出の出來る樣にして居て呉れ給へ。志願兵なら、少しは融通もつく樣になつたらう。

皆には君から呉々も宜敷く傳へて呉れ給へ　草々

手紙中にあるアルバータ各處の標高は、私が携行せるアネロイドに依り、バビネイのフォーミュラに從つて整正せるものだが、加奈陀測量部のものとは大分違ふ。然し、之は、完全な測量隊に依つてなされた後者をとるのが當然である。

×　×　×

Formidable unclimbed peak アルバータは遂に私達にとつて、親しい追懐の山となつた。

ベースキャンプには、依然申分ない好晴の日が毎日訪れて呉れた。そしてその數日間は本當に平和な日の連續であつた。私達の手の指先は皆一様に皮が固くなつて痛んだがそれも間もなく恢復した。身體の疲勞は、登攀直後のキャンプ・アルバータに於ける一夜の熟睡に依つて飛んで消える様になつて了つた。一行は休養の數日間に、髪を刈り、鬚を剃り、洗濯した。

じつとして居られぬ者は、氷河を溯り氷技術(アイステクニック)の練習をした。又、更にクライネ・アルバータ（アルバータの東に對する形狀の酷似せる小峯を私達はかく稱した）の中腹に登つて過ぎし日の登路を望遠鏡で仔細に調べた。

×　×　×

三日間の完全な休養の後に、私達は再びキャンプ・アルバータの人となつた。

ウーレー（一一、一七〇呎）は、アルバータの後の私達にとつては至極簡單な登攀であつた。頂上近くの氷河で暫くの間のステップカッテング、それからクレバスの縁(エッヂ)の氷が虧けて私が落ち込みかゝつた事があつた位。然し乍らウーレーの頂上は私達遠來の珍客を遇するにカナディアンロッキーの、凡そ眼の屆く限り、大海の波頭に似た峯々をして、四方八方から私達に朗らかな歡迎の挨拶を送らしめた。

初登頂の快味をこんなゆつたりした氣分で味はふ事は先づ滅多にない事であらう。

×　×　×

その後、私達は、天幕をキャンプ・アルバータから、クライネ・アルバータの東側に遷して、スタットフィールド（一一、三二〇呎）を覗つた。が、この頃から流石の天氣續きも崩れかゝつて來た。

私達は遂に敗退を餘儀なくされて此の山行を終つた。

× × ×

此の最後の二峯、ベースキャンプの事、アルバータ登攀に就いての嚴正なる批判等、未だ記述すべき幾多の事が殘されて居るのに拘らず、此處に詳述する暇のない事を最も遺憾に思ふが、次の機會に讓る事にする。

一九三四、一一、一九

第二圖　　田中　薫

雜　錄

スノウドンの思出

田中　薫

一、はしがき

一九二八年七月、英國ケンブリッヂで開かれた國際地理學會が七月二十五日に終ると、翌二十六日から一週間に亘つてウェールスを一巡するエックスカーションが行はれた。

此の旅行は當時ウェールス大學の地理主任だつたフルユア教授がリーダーとなり、佛國のド・マルトンヌ米國のアットウッド・ジョンソン、瑞典のアールマン、ポーランドのローマー等斯界の權威を網羅し、日本からは、故山崎直方博士、陸地測量部長石井英橘中將、内田寛一、西田與四郎、鈴木醇・田中秀作、小牧實繁、今村學郎、中村良之助の諸氏に私、それに山崎博士、内田氏、今村氏、私の四人は夫婦連れで參加したと云ふ譯で、地理關係で斯んな賑かな事は先づ無い事であつた。

從つて今となつて思出も多い事であり、その時我々の總帥と仰いだ山崎博士は間もなく他界せられて、私の眼に殘る先生の英姿は此の行に於けるものが最後となつた樣な譯で、今此の筆を執りつゝ慥に今昔の感に堪へぬ次第である。

私が「山岳」を選んで此の一文を草する所以は、此の行のクライマックスがウェールスの名山スノウドン

であつたと云ふ事の他に、日本山岳會創立當時からの會員として、登山家間に科學知識を普及させる事を常に心掛けて居られた山崎先生の追憶に於いて、筆を執らうと思立つたからである。又、日本氷蝕論の再燃しつゝある今日、その當時、世界の碩學達に依つて論議されてゐたスノウドンの氷蝕の姿を、机上に思ひ浮べ、何かなしそれを記述する事は無意味でもあるまいと思ふ。

二、スノウドン山彙

北ウェールスと云へばロンドンから西北へ、直線距離にして僅かに二百哩を隔てるに過ぎないが、まるで國が違ふ樣な感がある。イングリッシュとはまるで異つたウェーリッシュが話され、小學校の教科書がウェーリッシュで書かれてゐる。少し田舍に入ると宿にはランプがついてゐる。二階の寢室に寢に行く時は「おやすみ」と云つておかみさんから手燭を渡されると云ふ土地柄である。先づ我々には地名が珍らしい。初めは讀めないので少からずまごついたが一度旅行して見ると其の讀方が懷しい。土地の若い女が話す處など聞いてゐるとさわやかで益々良い。

グルン glyn（溪谷）、アフォン afon（溪流）、ナント nant（小川）、ルン llyn（湖）、グースフア gwy-ddfa（荒寥たる地）などと云ふ地形を表はす地名を聞くと、あの陰鬱なスコットランドとは又異つた、荒寥たるウェールスの自然の姿が自ら眼界に展開して來る樣な氣がする。

スノウドンの山彙は三千呎以上の峯を凡そ十座ほど集めて、カルナボン州の中部を大きく占めてゐる。そして北西から南東に走る三條の谷に依つて三つの山塊に分たれ、イングランドとウェールスを通じての最高峯たるスノウドンはその最も南に分たれた一塊の中心にあつて海拔三、五六〇呎に達してゐる。

此の邊は一帶に大きな氷河が何回もなめ廻つた地形で、山と云はず、谷と云はず、重いローラーをかけた樣に滑らかに取りひしがれてゐる。谷に立つて行手を

眺めると、大盃を二つに割つた切り口の様な緩いU字型が大空を受けて涯しなく續いてゐる。晩夏の候、山肌を紫に染めるヘザーの他には此と云ふ灌木もない荒れ果てた山肌が大海のうねりの様に擴つてゐる。此の間を一條の白い道が通じて時々キャンプの道具等積んだオープンの自動車が音を立てゝ通るかと思ふと、又村人らしい自轉車姿が音もなく動いて行く。

一九二九年の冬は恐しく寒く雪の多い冬であつて、積雪の爲め此の谷の交通が杜絶したりして、雪に埋れた此の邊の山の寫眞が新聞に出てゐたが、U字谷の上の屏風の様な岩壁に粉雪がベットリと附き、その上は雪空に深くとざされてゐる冷めたい景色が想像された。

谷の中には必ず鏡の様な湖がある。氷河堆石に堰かれて出來た湖で、落々たる岩石の間に淺く湛へてゐる。スコットランドの構造線に深く湛へた暗綠色の水とは異ふ。レイクディストリクトのヨットでも浮ばうと云ふ優雅な湖とも又全く異ふ。小さなそして割に明い山湖らしい清楚な水の姿である。

谷の中にあるものは谷なりの形をして細長く、圈谷の底にあるものは圈谷の形をとつて丸い。一吋一哩の地形圖（追記參照）を見るとまことに面白い。此がカールで、此がカール湖、此が氷河谷で、此處で堆石が流水を堰き止めてゐると云ふ様な事がすぐ眼に映じ、どんな風に永河が流れてゐたかと云ふ大體の有様が想像される。又此の邊の川は何の川も川口に來ると川筋が西に曲る。此はスノウドン山彙にかぶさつてゐた内陸氷と、極北から一續きに海を蔽つてゐた大氷盤との間に挾まれた結果であらうといふ様な説、そんな事がいろ〳〵と眼に映じて興味の盡くる處を知らない。

地質圖を開けば、此の山地の基盤は褶曲を受けたカンブリアンの粘板岩で、その上にオルドヴィシアン、その上にシルリアンと順次新しい岩層が重り、その又上に石英斑岩、玄武岩等の噴出岩が載つてゐて激しい風化を受けつゝ秀峯を形作つてゐる。かういふ岩層の重なりや褶曲層が、圈谷の壁によく現れてゐるのが此

の邊の山の一つの特色であらう。

三、バチュース・ア・コーエ

ケンブリッヂを特別仕立のバスで出發した一行は、シェクスピアのストラットフォード・オン・アヴォンを過ぎ、キダーミンスター、ブリッヂノース、ヴェンロック、それからダーウインの生地として往來に大きな銅像の立つてゐるシュルースベエリーを經て、ランゴレン Llangollen からウェールスの山地に入る。ディ川の谷を溯つてコルウエン Corwen の小さな分水界を一つ越すと北に流れるコンウエイ川の平野が展け、そこへ西から直角に注ぐアフォン・ルグイ Afon Llugwy の落口にさゝやかな綠樹の村、バチュース・ア・コーエ Bettyws-y-coea がある。

我々は午後早くそこへ着いた。七月二十八日でカラリと晴れた暑い日であつた。ホテルはロイヤル・オークと云つたと思ふ。道を隔てゝ廣場があつて、私達は早速綠蔭に坐して汗をぬぐつた。見ればルグイの清流は音を立てゝ流れてゐる。イングランドの平地から來ると此の溪流と云ふものが實に珍らしい。私達はそれからそれへと此の清流を溯つて歩いた。森林の豐な潤つたあたりの風景であつた。スウォロースといふ瀧もあつた樣だ。併しそんな名所は大したものではない。唯此れからスノウドン山塊に入ると云ふ如何にも山の入口らしい希望に滿ちた空氣が嬉しかつた。フルユーア教授のウェールス語分布圖に依ると、此の邊を中心としてコンウエイ川の流域はウェールス語の話される中心地なのだ。卽ち人口の五〇パーセント乃至八〇パーセントがウェールス語を話す土地柄なのだ。英人はウェールス人の居を定めた處へ後から侵入して來たのだから、良い土地は得られず高原の荒地に居住するを餘儀なくされたから、英語は高地によく分布し、谷や海岸平野は未だにウェーリッシュに埋つてゐる譯だと云ふ。そう思つて見ると、スノウドンの山塊を挾んで、東のコンウェー谷と西のカルナヴォン平野に五〇—八〇パーセントの地域が擴り、その中間の山地一帶は三〇—五

第三圖　　田中　薫

○パーセントになつてゐると云ふ面白い現象がある。

その夜は洗濯のきいたリネンの上に肌寒い程の瑞氣を味ひ、翌朝はルグイの流に沿つて登り、ポント・クーフィング Pont Cyfing の邊りに綠草を食む牧羊の群を眺め、峠を越えると小湖があり、その上に橋の樣な虹がかゝつてゐた。

四、アフォン・ルグイの圈谷群

降るとカペル・クリーグ Capel-Cruig の村で、西にはナント・ア・グーリー Nant-y-Gwrlyd の氷河谷が開けてルン・ムンビル Llyn Mymbyr の美湖があり、之を溯ればスノウドンの北部に出るが、我々は北に進んでアフォン・ルグイの谷に入る。素晴しく伸び伸びした廣い谷で見上げると、北は火山の裾の樣な緩い斜面となり、上に行つて急に屏風の樣な岩壁に突き當る。

南の壁の上には北に面して幾つも〳〵空を限つて圈谷の連續だ。下の壁が高く、U字型にえぐつてゐるから、谷の道からはすつかりは見えず、時々圈谷の特徴のある頂線が斷續して窺はれる。軈てルン・オグウェン Llyn Ogwen の明鏡の樣な湖に出る。

一行は此處に車を止めて氷河谷の南側の斜面を登る。少し登ると平になつてやがて其の奥にカールの屏風が立てめぐらされてゐるのが見える。一番大きな圈谷はツュール・デゥウ Twll Du（惡魔の臺所の意）と名付けるもので、其の中にルン・イデゥウアル Llyn Idwal の圈谷湖がある。石ころの間をひろひ歩く中に、いきなり此の水面が眼の高さに現れる。湖面の高さ一、一二三呎、その上にグルーダー Glyder（三、二七九呎）が聳えてゐる。一本の木もない。水中には草もない。唯氷を融いた樣な冷たい水がジツトよどんで、深みへ深みへと重り合つて沈んで行く轉石を青黑く見せてゐる。カールの壁は岩の地肌になつて氷雪、雨水に浸蝕された跡が縮緬じわになつて一面に刻まれてゐる。そして全體は黑々と白い空の下に沈默を守りつゞけてゐるのである。此を背景として、白い婦人の夏服

のあちこちと動くのが山の中で鶺鴒にでも會つた樣に清々しく見えた。

カールの下から西方を望むと此のカール續きのア・ガルン y Garn（三、一〇四呎）が圓い頭を擡げ、その頭の樣な位置にお椀の樣な形のカールが見える。そしてその中にはルン・クルード Llyn Clyd が湛へられてゐる筈。此は我々の見たツゥール、デゥウの圈谷よりずつと高い處に圈谷底を持つ型の異つた圈谷で、形成の時代も違ふと思はれる。見たところは如何にも日本アルプス連峯の頂上近くに並んでゐる所謂「日本カール」に酷似してゐる。

何故此處のカールは北にばかり向いてゐるのか、今見る此の地形は大體最後のプライストシーンの氷河の遺物であらうが、それ以前の氷期の作用は如何なる形で殘されてゐるのであらうか。此の邊を埋めてゐる漂礫土（ボルダークレー）の新舊はどうして見分ける事が出來るのであらうか。地形學の大家、ド・マルトンヌ博士とか、日本の氷河を最初に取りあげた山崎博士とか、氷河をふんだんに持つた北部から來たスウェーデンのネルソン博士などが礫をつまんで頻りに語り合つてゐるのを眺めながら、私は部分的材料を判別する眼のないのをかこつばかりであつた。

地に敷く岩面は氷の琢磨によつて滑らかに埋り、丈の低い草が芝の樣に緻密に此の間を綴つてゐる。草は綠でも美しい花はなかつた。唯、人間の齡を以つて數え得ない昔の氷の香だけが微かにあたりをこめてゐる樣であつた。

五、カルナヴォンへ

ルン・オグウェンはナント・フラネオン Nant Ffraneon の流域に屬する。スレートの石切場の大規模なのを見つゝ、何時しか谷を降り山を離れて、バンゴール Bangor の港に出で、カルナヴォン Carnavon の宿に入る。ブラック・ライオン・ホテルと云ふ宿の玄關にはこんなに大勢の日本人が泊るのは餘程珍らしいと見え、町の人達が集つて動かない。何か挨拶をして

スノウドン山彙概念圖

圓谷地形の分布を示す　標高は呎

貰ひたいらしいので、皆で君が代を歌ふと、その老若男女の一群は里謡を合唱して漸く引き取つて行つた。斯んな處があの小さなイギリスの島の中にはまだ殘つてゐる事は想像の外だ。

六、スノウドンに登る

カルナヴォンから汽車でランベリス Llanberis へ。晴れた爽かな夏の日であつた。此から登山鐵道に乘換へる。赤い着物に黑の道化の樣な帽子を冠つたウェールスのナショナル・コスチュームを着た女が歩いてゐる。登り出すと眼の下にルン・パダルン Llyn Padarn とルン・ペリス Llyn Peris の水面が長々と展開する。一寸スイスの樣な景色だ。やがて山の脊に出て右手に低く一つのカールが開いて、其の中に、ルン・デゥーラス Llyn Durarddu が圓く、その下に二段の棚狀地をなして小湖が二ツ三ツ光つてゐる。そして其の末は開けぴろげの大きな谷になつてカルナヴォンの平野へと續いて行く。大きな眺めである。スノウドンの峯は八方からカールが切り込んで、三方に鋭いアレートが切り立つてゐる。だから岩場として登山家を惹きつけるのであるが、鐵道は北から最も廣い山稜を登つて樂々と頂上に達する。ホテルがある。ア・ウースフア y-Wyddfa（荒寥たる地）と呼ばれ三、五六〇呎を拔く。そして之を中心として、北にグリブ・ア・スグル Grib-y-Ddisgl（三、四九三呎）から東に伸びたアレート、又南にはア・リウェス y-Lliwedd（二、九四七呎）へかけたアレートが巨大な黑鷲の樣に翼を展げて、東方に向つて一大カールを抱いてゐる。その中に圓いグラスルン Glaslyn その又下段にルン・ルダウー Llyn Llydaw の圈谷湖がある。見ると切り落ちた岩壁がアレーナの樣に此の圈谷湖を取り圍んでゐるのは壯觀だ。空は薄曇り、水面は銀色に光つてゐた。一寸降りられさうもない此の崖の中に登路があつて、我々は下の湖目指して其處を降りた。中々急で登山の經驗の無い婦人達は相當に苦しんだ。此の頃から雷雨になつて、湖畔に出た時はもう煙霧に包まれたスノウドンの頂上を

ゆつくり見返す餘裕もなかつた。ヅブ濡れになつてペン・ア・パス Pen-y-Pass の峠へ、そしてそこからバスに乘つた。車はナント・グウーイナント Nant Gwynant の谷をスノードン山塊を斜に東北から西南に切る樣に雨後の夕暮を南ウェールスに向つて山を離れて行くのであつた。

追記　此の旅につゝて手に入れた二三の文獻を擧げて置く。

(一) Ordnance Survey Tourist Map of Snowdon and District. Scale 1 inch to 1 mile.

(二) Ordnance Survey maps. Scale 6 insh to 1 mile.

(三) Geological Survey of England and Wales. Sheet 9 and 10. Scale 4 miles to 1 inch.

(四) The Blue guides, Muirhead's Wales.

(五) L. J. Wills: The physiographical evolution of Britain. 1929.

(六) A. C. Ramsay: Physical geology and geography of Great Britain. 1894.

(七) Horace B. Woodward: Geological Atlas of Great Britain and Ireland. 1907.

(八) Lord Avebury: The Scenery of England and the Causes to which it is due. 1902.

(九) A. S. D. Smith: Welsh made Easy. 1928.

（昭和九年七月稿）

挿圖說明

第一圖――ルン・クルードを抱く日本アルプス型の圖谷、前景はよく氷蝕を受けた羊背岩。

條二圖――ルン・イヅァアルよりルン・オグウェンとアフォン・ルグウイの谷を望む。

第三圖――スノウドンの東面の大圈谷を瞰瞰す。湖はグラス・ルン（手前）とルン・ルグウー（遠方）。

一月の日高山脈

札内川上流のスキー登山

相川　修

まへがき

北海道に於ける冬季登山の歴史は比較的新しい。殊に日高山脈の如きは、冬季登山が試みられる様になつたのは、極めて最近のことに過ぎない。即ち昭和三年三月に初めて美生川（ビベイロ）より美生岳（ビベイロ）が登頂されたのである。けれども急速な冬季登山技術の發達、用具の完備と輕便化、共れに加へて幾多の雪中野營の經驗とは、先づ北海道中央高地諸山岳の冬季登山を完うし、現在に至つては此の日高山脈も其の主なる峯々は略ゝ極められたかの感がある。とは云へ尚吾々に殘された範圍も決して尠くはないのである。中央高地その他の山岳に較べれば、冬季に於ける登山者の足跡は未だに寂だ寥々たるものがある。

今、晩秋の札幌附近の丘陵（をか）に立つと、遠く東の彼方に、新雪を冠つた芦別岳（アシベツ）、夕張岳（ユウバリ）に連つて遙か南方へと長く延びた日高山群が遠望される。冬ならば皚々白雪の姿を、眞夏にも尚豐富の殘雪を見せて蜿々南北に屹立する、十勝平原を縱貫する鐵路から眺める日高山脈も印象深い。それは天鹽山脈、大雪山彙、十勝連峯などの所謂中央高地と共に北海道の脊稜を形成して其の南半を占め、北は狩勝峠を起點として、南端は遠く襟裳（エリモ）岬に北太平洋の怒濤と接して居る。

そして此の札内川は中央高地に次ぐ高度を有する日高山脈の北部に、一、九〇〇米を前後して聳えるエサオマントツタベツ岳、札内嶽、カムイエクウチカウシ山、コイボクサツナイ岳等の峯々に其の源を發して、アイヌ語の「サツナイ」が「乾きたる河」を意味する如く、浩くゆるやかな水流と豐かな河原に惠まれた美しい河である。そしてその源流を圍繞して屹立する山々は、多くの北海道の山々と異り鋭い山襞と美しい圈谷（カール）に圍まれてゐる。

此等の山懷に抱かれた嚴冬の月の半に餘る生活は、夏冬幾度もの日高山行の中でも最も感銘深く又樂しき經驗を齎したものであつた。又、比較的長い期間の雪中露營と食糧の關係、冬季の日高山脈に對する概念並びに登路の選定、輪樏の使用法と練習の必要、ピッケルの使用域に對する訂正等、幾多の新知識を得られた點に於いても此の山旅程優れたものは無かつたと思はれる。この山行は昭和八年十二月二十九日より、翌年一月十四日にかけて行はれたもので、一行は、坂本直行、照井孝太郎、相川修の三名であつた。

一、最初のベース・キャンプ迄

一週間に亘る規則正しい合宿生活に身體の調子を取り戻して二人は帶廣(オビヒロ)へと向つた。其處には豐似(トヨニ)の牧場の友が待ち受けて居た。

其の翌日殆んど雪の無い凍てついた坦々たる道路を廣尾(ヒロウ)行のバスが馳つて行く。素晴らしい好天氣である。皚々たる日高連山は紫に紅に朝日を受けて、飽かぬ眺めを示して呉れる。

上札内(カミサツナイ)に降りた三人はトラックに依頼したルックサックの來る迄の二三時間を唯山に見入つて過した。夏に、春に、冬に幾度も眺める景色ではあるが、見る度に趣を變へ感興をそゝる。軈て日も暮れ果てゝ月の出る頃、皎々の光を踏んで最後の人家からは一里半餘あるトムラウシ澤合流點に建てられた堀田組の造材、伐採のための飯場へと馬橇道を急いだ。札内川の岸にある柾葺の掘立小屋であるが、私達は其處に一夜の宿を借り樣として訪れた。丁度正月を前に控へて其の日は仕事も早仕舞ひらしく、又里に降つて行つた者もあるとか、常ならば一杯の小屋も人氣少く靜かであつた。

山小屋の設備の無い此の地方の唯一の根據地とも云ふべきものはかうした造材小屋であつて、此れが爲めに私達は往々非常に助かることがある。それは唯に一夜の安眠ばかりでなく、其れより奥へ半里程は踏分道が作られ、又『やまご』達から其の年の天氣工合等を色々と知ることが出來るからである。造材小屋の利用

は、殆んど北海道に於ける冬季登山の一つの面白味であり樂しさであると思はれる。

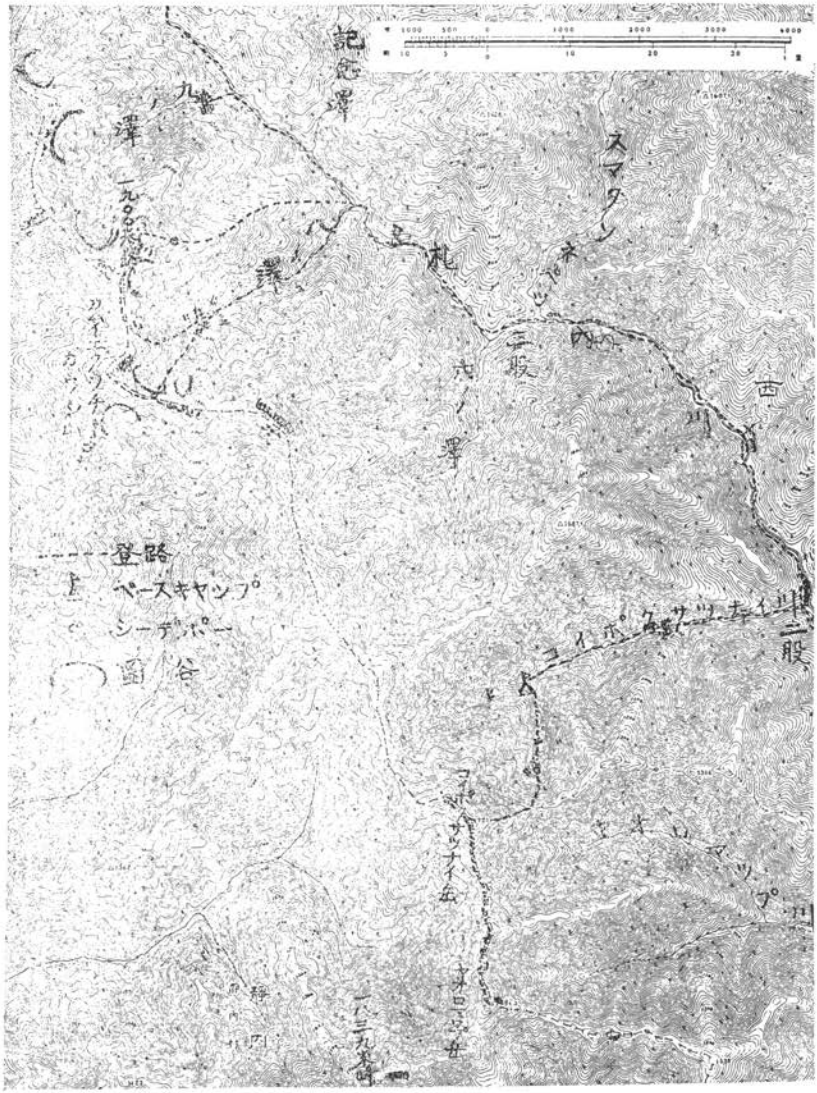
次の日朝まだき『やまご』達と共に立飯臺で御飯をかき込んで、五日分の食糧を用意して第一の計畫のコイボクサツナイ川上流に向つた。

コイボクサツナイ川合流點――俗に二股と稱せらる――迄右岸を林内歩道が拓かれてある。積雪量の比較的少ない日高の山の而も十二月の末では此の邊りで一尺にも充たない位であつて、此の林内歩道は非常に時間及び勞力の經濟を齎らして呉れる。山も次第に年を追うて入り易くなつたことが痛感される。二股の附近では有繋に積雪量が多くなつて來た。野兎の跡、狐、黄鼬の足跡が點々として其處此處に見られる。其の跡を踏み或は雪橋を渡り又は「函」を右に左にと搦み等して、四時間餘の後、六六〇米の上二股に達した。此の日も良く晴れて此處よりコイボクサツナイ岳の頂が眞白に高く仰がれる。

雪が踏み固められ、掘下げられ、針葉樹の枝が集められ、枯木は切り倒されて快適のキャンプが設けられた。此處がコイボクサツナイ岳、ヤオロマップ岳、一、八三九米峯への根據地とされる。

二、停　滯

後二日許りの天氣を期待し、元旦には山頂をと望んで居たけれども、既に三日間も好晴が續いた揚句では其れは畢竟無理な註文であつた。三十日夜半から滂々と降り續く雪は夜明頃には既に天幕を半ば埋め去り、今にも壓潰れ樣として居た。何となく狹苦しさに眼を覺した私達は、早速大雪の中に飛び出して除雪に勉めなくてはならなかつた。一夜にして積雪量は前日の二倍を示して尙止む氣配も見られない。寢袋の中にもぐり込んだ儘天幕の屋根を見詰めて居るとサラ〳〵と微かの音を立てゝ積る粉雪は、次第に天幕の中を暗くする。天幕は次第に垂れ下つて來る。バタ〳〵と振り掃へば一時は眞白に明るくなるが、又直ぐに灰色を增して來る。こんな單調さに既に一日が暮れ果てゝ仕舞つ



日高山脈札内川上流

た。雪は稍ゝ小降りになつて來たが風が加つて來た。轟々と國境に風が逆卷くと見る間に谿々の木々が颯と吹き掃はれて騷然と吹雪き立つ。凄じい山鳴りに身も縮まる憶ひ。

明くれば昭和九年一月一日、晴模様ではあるけれども依然風は強く山鳴は轟々と聞える。誰やら寢袋の中で『年の始めの』を唱つて居る。少し晴間を見せると共に氣溫が著しく降つて來たことが感ぜられ、深々と底冷えがして天幕の內側は呼氣、コッヘルの湯氣等でバリ〳〵に凍つて仕舞ふ。山は深く雪の中に隱れて居る。ラッセルを附け傍々上の樣子を見に出掛けることにして左澤を溯つて行く。澤は前日の降雪の爲めに大略埋まつて居て比較的樂に溯行出來た。

九〇〇米附近で澤は西折して小澤が正面から入り込んで居て、此の西折する少し前に瀧があるらしく急傾斜をなして居る。最初は其の正面の小澤を溯る豫定で暫くジックザックを切つたけれども取り付が惡い爲め引返して再び本澤を西に溯り出した。此の澤の西折する邊から瀧の連續らしく勾配が著しく增加し、澤は電光形に狹り、兩岸は露岩となつて來る。此れを二町も上つた頃瀧壺が開いて居て其れ以上に溯行出來ない。そこで澤の中でスキーを脫いで右岸の急傾斜を登り出す。輪樏を穿いて行くのだが仲々に勞働を强ひられる。敷雪の急斜面の爲めに足が擧らない。漸く小尾根に達すればひどいブッシュに突當つた。しかしどうやらコイボクサツナイ岳より北に派出する尾根——郡境界として示されて居る——への三分の二程迄登つた所で兎も角も此れより登頂が可能なことを確かめて歸途についた。

其の次の日も依然として風は止み相にも無い。國境附近は暗雲に閉ざされて遂に其の姿を現はさうとも見えない。唯徒に晴れを待つよりもと云ふので、造材小屋迄行つて殘餘の食糧其の他を二股迄運び、第二の計畫に役立て樣と相談をした。連日の停滯で鳥毛の寢袋は相當に濕り氣を帶びて來たので、之れを乾して來樣とルックに入れて出掛ける。

溯行に略一日を費したトムラウシ澤合流迄、空身では新雪を踏んでも四時間餘。丁度晝時餅を御馳走になり、濡物を乾して、殘して來た十日分の食糧を持つて再び戻つて行く。小屋に着くや一夜の顏馴染の連中が、「えらいこつちや、良くまあ凍れねえで歸つたなあ」と歡迎して呉れたが、又再び出懸けると聞いて呆れ返つて言葉も出ない樣子であつた。

日脚の速い冬の日も西に傾く黃昏時、二股の岩の凹みに食糧を殘して折柄の月明りに道を急ぐ。微白い光の中を三つの影法師が靜かに動いて行く。上二股の上に青白く國境尾根が輝いて居る。宛も明日の好天氣を豫約する樣に——。

三、コイボクサツナイ岳、ヤオロマップ岳

朝の薄暗がりに星がチカ〳〵と輝き國境は夢の樣に淡れて居る。谿は未だ深い眠りに落ちて居るが其れを眼覺めさせ樣とでもするのか微かに山鳴が響いて來る。風は相當にある樣子。ラテルネの明りに三人は今日の期待に胸を躍らせ乍ら默々として歩み續ける。

先日の澤の中にスキーを脱ぎすてゝ前のラッセルに從つて登り出したが、前にビートの樣にさら〳〵して居た雪は再結晶して固い足場を提供して呉れる。其の爲めに非常に輕々と足並みは捗つて行く。けれども一度新雪に足を踏み入れると膝迄埋まり急斜面に脚が擧げられず膝で雪を壓し分け掻き分け、枝にぶら下るなど惡戰苦闘する。一條のスプールが徐々に延ばされて行く。四時間餘りの後郡境尾根に出て一息つく。空は名殘り無く晴れ渡つて遠く北の彼方には札内嶽、エサオマントツタペツ岳、續いて西に寄つてカムイエクウチカウシ山への國境が、其の鋭角を、眞紅に燃え立つ如く空に屹立して居る。

眼の前には雪煙をなびかせたコイボクサツナイ岳。其れ迄一頑張りと思はれたが案に相違して前日の新雪は意地惡であつた。宛も風から防がれて居る此の尾根は輪樏だけでは斜面が急過ぎる。アイゼンを併用すれば引掛りが惡い。兩方脱げば腰まで埋る。四〇〇米程

の登りに二時間以上も費して仕舞ふ。

未だ人の侵入を許さないと云はれ、入るや直ちに雨を降らせ、增水を起すと傳へられるヤオロマップ川の源流には、大きな蒼氷の瀧が懸つて居た。そして尙も瀧の連續の急傾斜が落ち込んで居る。雪庇を越えてコイボクサツナイ岳の頂上に躍り上ると西から吹き上げる烈風に危く吹き飛ばされる程であつた。身體からはどん〳〵と熱が失はれ手足は强ばつて來る。顏は感覺が無くなつて來るし、猛烈な寒氣に靴は固く凍つて踝の自由が利かなくなつて仕舞ふ。

僅かに休む暇も無く更に國境を飛ばされる樣にヤオロマップ岳へと急ぐ。風に吹き晒された國境は氷の樣に固い斜面を現はし、アイゼンの齒は跡が附くか附かずか。不圖見ると坂本君の片方の踵からアイゼンの齒が飛び出して居る。餘りの寒氣に踵裏の曲りの所から折れて仕舞つたのだ。しかしどうやら前の四本の齒は無事なのでヤオロマップ岳迄頑張ることにする。

國境は想像よりも瘠せて居た。所によると足幅に足りない位、ヤオロマップ側は垂直に近く削り立つて居る。シビチャリ側も相當の傾斜が五、六百米の高距でついて居る。ヤオロマップ岳の巓——其處からは殆んど全ての日高山脈が見渡される。特に中部日高山脈とも稱すべきルベツネ岳が、ペテガリ岳が、そして神威嶽（カムイ）の一部が、ソエマツ岳が。直ぐ西方には一、八三九米峯——此の行の目的の一つである鋭い頂が聳えて居る。

しかし今は之れを斷念しなければならなかつた。既に、其れに立ち向ふには時間が遲過ぎた。初めて日高に入つた七年以前から何時かの日にと望んで居た一、八三九米峯であつたけれど。再びコイボクサツナイ岳へと戻る中に風は次第に收つて來た。身體の動きにも餘裕が生じて來た。友の一人が去年の夏此の國境を步かうとして一週間も雨に降り籠められたと話す其の頂に、四圍の山々を眺め過した三十分餘、軈て西空から茜色に染る頃、全山は再び紅に彩られた。私達は嶮嵓の降りに一途に歸途を急いで居た。

四、第二のベース・キャンプ迄

次の日も又其の翌日も好晴に惠まれたが、それは次の企ての準備に用ゐられた。夜中の寒氣に轉々と過した疲れの醫し切れない身體に天幕を纏めて出懸けたが、二股に待つものは十貫餘の重荷であつた。本流を溯行するには深いラッセル――それは脛を越える程であつたし、又笹の急斜面の邊摺りが二度もあつて此の上ない辛苦が課せられた。降雪の未だ少ない一月とて雪橋も思ふ樣に見出せない。辛うじて四度程越える中に遂に如何しても澤の中を渡渉しなくてはならなくなつた。五二〇米附近、流れは激して雪橋を造る餘地を與へて居ないのだ。早速ルックは肩から降されて股迄とゞくゴム長靴が取り出される、かねてから此の樣なこともあらうと用意して來たのであつた。辛うじて對岸に渡渉が出來たが遂に其處に假の宿りが求められねばならなかつた。

折柄の晴天に三股附近からは一、八二三米附近の國境尾根が、又遠く本流の水源には滑若岳（ナムワッカ）へと續く邊りの國境が眞白く青空に微笑んで居る。ベース・キャンプを設け樣とする七五〇米小澤合流點からは物凄いばかりの斷崖が吾々を威嚇して居る。

五、一、九〇〇米峯、カムイエクウチカウシ山

六日、眼覺めれば星空に今日の快晴を豫想させる。何時崩れるとも知れない冬季の天候を思へば、僅か一日の休養も惜しまれて、今日もまたラテルネの灯を先に出發する。この邊からは澤は半ば埋れて自由に渡ることが出來る、八ノ澤合流に着いた頃、朝日に照り映えたカムイエクウチカウシの頂は美しい黃金綠に色彩られ、クリーム色の空に氷の如き靜けさと莊嚴さを示して居る。見る中に頂の光の冠は紅に燃え立ち、頂から腹へと次第に薔薇色に變つて行つた。私達は自然の美しい藝術に魅せられて、暫しは無言のまゝ立ち盡した。

此の合流から直ちにカムイエクウチカウシ山北方の

一、九〇〇米峯へ續く尾根に取付いた。下から見ると二〇〇米程も登攀すれば緩かな尾根に續いて居る樣に見られたので、スキーを擔つて攀ぢ登り初めたのだが、事實は案に相違して行けども登れども密生したブッシュの急な尾根は盡きない。少し緩く廣くなつたと思つてスキーを履くと再びキックターンも容易でない急斜面とブッシュに出會ふ。そんな苦鬪の五時間餘り、漸く身は岳樺の美しい斜面に解放された。そこは雄大なゲレンデであつた。遠くエサオマンが眺められる。此處を大きく電光形を畫いて登つて行く中に尾根は次第に細くなる。頭の上に岩の露出した一、九〇〇米峯が屹(そ)り立つて居る。其の嶺から時々思ひ出しでもした樣に雪煙が高く舞ひ上つて居る。スキーの角(エッヂ)が利かなくなつた一、七〇〇米頃からアイゼンに穿き代へてスキーは擔つて登り出した。その時は既に三時であつた。恐らく未だ曾つて人間の足跡の印せられたことが無かつたであらうと思はれる一、九〇〇米峯は、圈谷壁に狹められた鋸齒狀の瘠尾根にへばりつかれて居る。

其の嶺に立つ頃から天氣は次第に崩れ氣味になつて來た。西の方から暗雲が來ると見る間にカムイエクウチカウシの頂は隱れて仕舞つた。陽は既に西の方遙か、淡いクリーム色に光つた北太平洋の彼方に沈まうとして居る。國境への鋭い尾根に時々吹く突風に煽られて緊張した時を過した三人は、稍ゝ廣々とした國境尾根を黃昏時の靜寂さの中を歩んで居た。既に薄闇は四圍に迫つて居た。そして今となつては、此の行最大の目的であるカムイエクウチカウシ山は、再度の試登を誓ひ乍ら、斷念しなければならなかつた。

鞍部から北斜面の長いトラバースに、速かではあるが而もあせることの無い下降が續けられて行つた。三股からスキーを着けて微かなラテルネを賴りに雪道を辿り、キャンプに着いた時は既に九時過ぎて居た。

翌日、空は再び晴れ渡つたけれども、其の日は休養を兼ねてベース・キャンプの完備に費された。厚い針葉樹の葉のクッションに、豐富の枯木に今後數日の充分な憩ひが設へられた。其の翌晩からの吹雪にも充分

平和らかな憩ひを攝ることが出來た。

既に山に入つてから十日を過したが、第二の目的のカムイエクウチカウシ山は未だ殘されて居る。今日こそはと、山も谿も覺めやらぬ五時と云ふのに、ラテルネの明りがゆら〳〵と木立を縫つて進む。八ノ澤の溯行に前日の苦心の下降がまざ〳〵と偲ばれる。其の日は國境は姿を現はして居ない。一、二〇〇米の三股から——夏には殆んど三本の瀧となつて合つて居る——勾配は急激に增加して來た。狹い瀧の連續を埋め盡した急斜面に幾度ものキックターンが繰返へされる。

やがて幾分傾斜も緩くなり廣々として來る。森林帶外れ、——其處は圈谷底の始りで、夏ならば緩かな御花畠の勾配と共の間を流れる清澄の流れ——それは絕好のスキーゲレンデであつた。未だ此んな大きなゲレンデは見たことがない。而も前日の降雪に三寸位の新雪を見せて居る。歸途の壯快さを樂しみに二三丁宛ものキックターンを二三度行ふ中に三百米程の高距を國境迄到達して仕舞ふ。三股からは二時間半餘である。

國境には細い粉雪が逆卷いて居て頂上は深く濃霧に閉されて居た。茫とした薄明りの夢の中の樣な頂上に、兎に角目的を達した喜びを三人は固い握手をかはして頒ち合つた。唯何處からとも無く骨身にまで透み徹る冷氣が、現實の世界であることを知らせて呉れる。

圈谷壁の眞白の斜面の降りは此の上無く素晴しかつた。忽ちに圈谷底へ澤頭へとシュテムクリスチャニアのスラロームが粉雪を蹴り立てゝ描かれて行く。急峻な瀧の上の斜面を一ターン毎に輕い表層雪崩を起し乍ら其れを乘り越え乘り越え降つて行く。そして一、二〇〇米の三股からは一直線に澤の中の滑降が續けられた。四時間もの登行を僅か三四十分にして終る樣な此の快適の滑降は、日高山脈では殆んど期待されないものであつただけに、愉快な印象が殘されて居る。

叢生（やぶ）と急峻と密林に抱かれた日高山脈にもかうした滑降の快適さの餘地が殘されてある。さうして其の多くは圈谷と共れに續く森林帶外れの斜面に見出される。曾て過ぐる一年前の正月にも數人の友と戸蔦別川

の上流に入つたとき殆んど空身すら通過する際も無い程の錯雜したブッシュを通り抜けた森林帶外れに素晴らしいゲレンデを見出して驚きの聲を擧げたこともあつた。

六、本流上流への試みと歸途

更に四日間程ベース・キャンプに滯在して居た。それは主としてエサオマントッタペツ岳及び國境上の一八五二米峯、一、九〇〇米峯、又出來れば札内嶽もと、それらの登頂を目指してゐたのである。之れには二日間の天氣が必要であつた。併し其の後は次第に天候が崩れて行つた。そして唯十一日だけが晴れたのであつたが、此れも朝の中は小雪が降つて居た。其の日エサオマンへのラッセルをつけに出掛けたが、次第に青空が見えて來たので、一、八五二米を試みることに豫定を變更して九ノ澤に入る。豫てから之れには大きな瀧があると聞いて居た。そして其れは到底溯行は不可能と言はれて居る。成程合流點から四五町の上に兩岸に高い絶壁に圍まれ、瀧壺を不氣味に開いた瀧があつた。

二時間餘り、或は蒼氷に足場を刻み、或は高く絶壁を搦まうと試みたが何れも最後の一歩と云ふ所で岩壁に阻まれた。その日ザイルを持參しなかつたことが如何にも口惜しく思はれた。源に聳える一、九〇〇米峯の美しい圈谷の眞黑な岩壁が、徒に吾々を招いて居た。

止むなく、再び最初の豫定通りに本流を溯行した。澤の中の轉石は次第に大きくなつて雪橋が次第に少なくなつて來る。けれども主として右岸を樂に進むことが出來る。最後の二股迄行つて引返して來た。此の邊からは札内嶽からエサオマン、そして一、八五二米と國境の尾根が間近に仰がれる。其の晩、空は一面無數の星に輝いて居た。翌くる朝今日こそ最後の目標をと、朝の四時から出掛けたが、夜明の空は次第に不安氣な暗雲に占められて來た。次第に風が強く終には雪が降つて來た。そして一日中猛烈な吹雪が國境を襲ひ谿々を吹き捲くつた。

既に食糧は盡きて來た。最早是以上の停滯は望めな

い。最後の望みは遂に達せられなかつた。又何時の日にかと振返へれば、尙も山々は深く雲に閉されて居た。

愈ゝ歸途に就く日も、前日の暴風雪の名殘を見せて强い風が澤に沿うて下流へと嵐して行く。河原の石は露はれ、澤の水は蒼氷に代へられてゐる。溯行に一日半を費した二股迄、輕くなつた身は僅か半日で着いて仕舞つた。其の晩は又堀田組の飯場に厄介になつた。暖い煙にむせることの無いストーヴの前に三人の雪燒した黑い顏が山の生活を憶ひ出して居る。

翌日南札内に出て、漸くこの二週日に亘る山旅を終つた。

附　記

一、札内川上流冬季登山記錄には本山行以外に、昭和六年三月の「カムイエクウチカウシ山及び其の附近」、昭和八年三月の「ヤオロマップ岳」及び昭和九年三月の「一、八三九米峯及びカムイエクウチカウシ山」等あり、總て北大山岳部員により行はれしもの。登路其の他の詳細は同部々報第三號以下を參照されたし。

二、此の行に於いては全然人夫を使用しなかつた。北海道に於いてスキーを使用し得る人夫の居ないことゝ、輪樏では遲くて足手纏ひになることを第一の理由としたのであるが、一般には矢張り人夫は必要と思はれる、少くもペース・キャンプに於ける雜用が省かれ其の勞力が全然登山に用ひられる。又我々がスキーを穿いてスピードがあると言つても拾二貫近くの重荷では結局輪樏のスピードと大して變りは無い。けれども一月に於ける雪橋は重荷の輪樏では少々耐へられない場合が生ずる惧れがある。

三、此の山行に携帶した食糧品は次の如きものであつた。白米六升、乾飯四升、餅三升五合、フランスパン三十斤、ミルクパン七十個（札幌製）バター一斤、砂糖四瓩、ジャム九封度、蜂蜜三封度、チーズ一斤、ソーセージ大三本小十本、油鮟燻製十本、ハム三百匁、ミルク三封度、オートミル二箱、食鹽小一瓶、葱一束、芋がら二百匁、味噌一貫目、醬油二合、味ノ素小一ケ、とろゝ昆布一箱、片栗粉一本、紅茶半封度、キャラメル、チョコレート、氷砂糖若干、羊羹三本、以上

上信境御飯岳四阿山縱走

角田吉夫

地圖　五萬分一　須坂、中野

一行　會員　岡本勝二、水野啓治郎　角田吉夫

案内　山田溫泉スキークラブ　宮川臣男

時間記錄

昭和九年三月十八日　快晴　長野—須坂—山田溫泉（八・二〇—九・三〇）—御飯岳北西の尾根を登る—天池（一〇・五五—一一・四〇）—△一七九四m（一・一五）—オユノクラ二二〇〇mのピーク（一一・三〇）—御飯岳（三・四五—四・〇〇）—毛無峠—小串鑛山（五・五〇）泊

三月十九日　朝風雪　後快晴　終日風強し　小串鑛山（P・M二・四五）—土鍋山（四・〇〇—四・二〇）—鑛山（四・五〇）泊

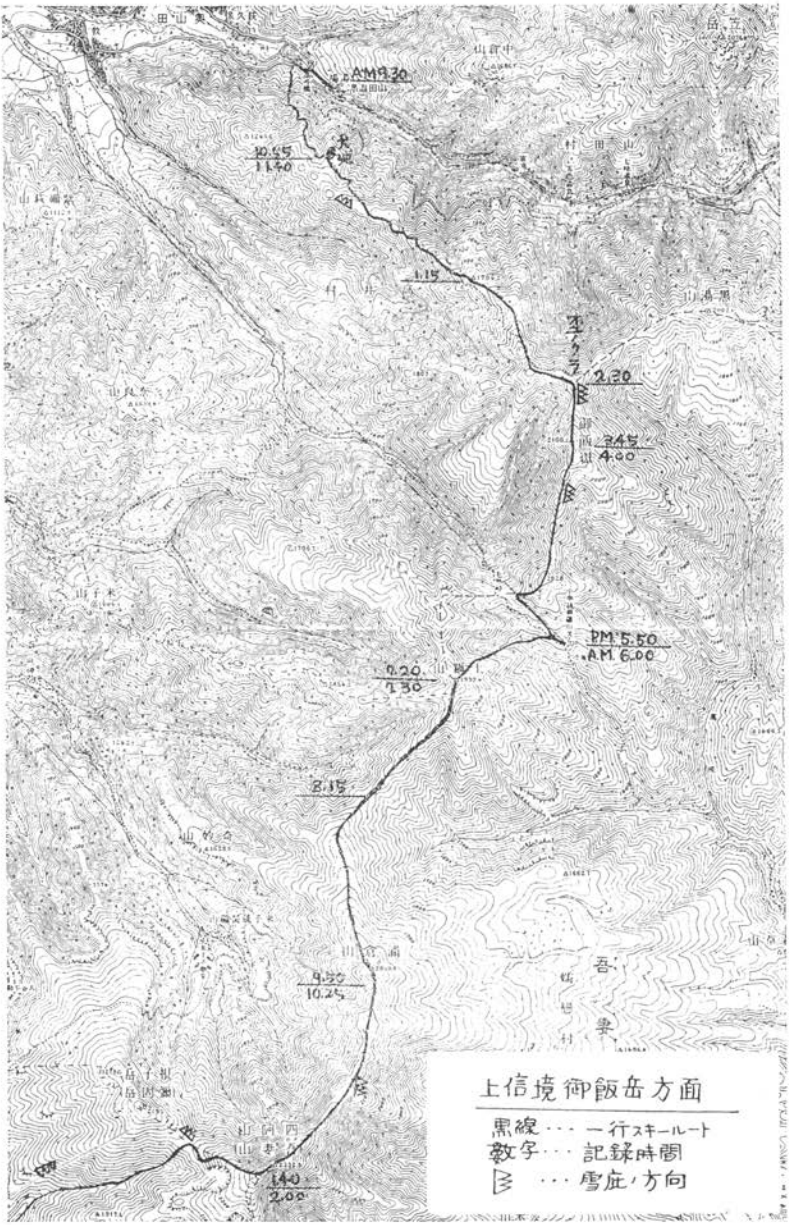
三月二十日　快晴

鑛山（六・〇〇）—土鍋山（七・二〇—七・三〇）—浦倉山（九・四五）—四阿山肩（一・〇〇）—四阿山頂上（一・四〇—二・〇〇）—根子岳鞍部（二・三〇）—大明神澤を下る—菅平ホテル（五・一〇）泊

三月二十一日　曇小雨烈風　菅平—大笹街道—仙仁—須坂驛—歸京

まへがき

上信國境の山々の持つ魅力に二つある。それは美しい針葉樹林と粉雪であると思ふ。私は今日まで丁度八年間に亙つて、尠くとも年に一度は熊の湯詣りを續けて來た。それは決してその浴槽が好い譯ではない。暗いランプの灯、部屋中に立籠める焚火の煙に眼を痛め、寒い炬燵に震えながらも、明日の蒼空と粉雪を期待してゐたのに外ならない。或年は發哺溫泉から岩菅へ、又野反池から白砂山など根據地を移した時にさへ、この上信境の山々はスキーの山として私の期待を裏切るものではなかつた。それにしても長い間心殘りであつたのは、熊の湯の南方に連なる山、御飯岳（オメシガケ）から四阿山（アツマヤサン）の山波である。蒼蒼たる針葉樹に包まれた御飯岳は巨


AM9.30
10.45
11.40
1.15
2.20
3.45
4.00
PM5.50
AM6.00
7.20
7.30
8.15
9.20
10.25
11.40
2.00
上信境御飯岳方面
黒線・・・一行スキールート
數字・・・記録時間
・・・雪庇ノ方向

土鍋山より四阿山（左）根子岳（右）　　水野啓治郎

四阿山・東北方肩 2200m附近より望む　　水野啓治郎

鯨の如く横はり、白い雪の山膚は一點だに見る可くもなく、その平坦なる山頂は越後の苗場山を想はせ、そして遙かに續く、四阿、根子の二座は、模糊として近寄り難き風貌であつた。

美しき樹氷と粉雪の大斜面の滑走を夢見ながらも私が今日まで近寄らなかつた理由はこの縱走路に於ける露營地に對して全く知識を缺いてゐた爲めである。それが計らずも昭和九年の一月、熊の湯からの歸途笠ヶ岳から尾根傳ひに山田溫泉に降る折幸ひにも山田溫泉の人々から御飯岳の登路とその南方に營まれる小串鑛(オクシ)山の存在を知るに及んで、私の計畫も具體化した譯である。それにしても私が小串鑛山の存在を今日まで知らなかつたとは、何たる不覺であつたらう。新刊地圖、卽ち昭和八年四月發行の「須坂」には明記されてゐるにもかゝわらず、色褪せた皺だらけの古い地圖に愛着を覺え、手離さなかつたのが大きな失敗であつたと思つてゐる。

而してこの行に對する準備としては一泊の露營を豫定して、絹テント一張、防寒具、食料及びピッケル、シュタイクアイゼンの携行、それに全員が時間短縮の目的でゾームシールを用ひた事である。

御飯岳へ

三月十八日、御飯岳登高の第一日は幸運なる快晴に惠まれた。妙高から戸隱連山が白い城壁の如く輝く朝、須坂驛に下車。牧まで自動車に、それより山田まで小一里、雪道を行く。山田溫泉——大きな共同浴槽を中央に、四方に、整然と湯の宿が軒を列べてゐる姿には、何處となく信州の湯の町らしい親しみを覺える。藤井旅館に入ると、既に打合せてあつた山田スキークラブの宮川氏が待つてゐた。

第一日の計畫では松川に沿うて萬座に入る考へであつたが、數日來の降雪による雪崩の危險を慮り、止むなく山田溫泉の南に當り、御飯岳から走る北西の太い尾根を登り、小串鑛山へ入る事に豫定を變更する。宿から仰ぐこの尾根は餘りにも高く、蒼空に屆くばかり。

湯の街の入口に架る橋まで戻り、南へ廣い雪に埋れた澤へ、そして雪橇道を辿る。底雪崩に黑い地膚の露れた個所も二、三。約一時間、急斜面に汗を絞ると、明るい臺地へ出る。天池（アマイケ）といふ小池があり、春はゼンマイ採りの名所だといふ。スキーに好適な廣さとスロープが待つ。晝食後更に一登り、やうやくに、小さな雪庇を切つて本尾根に出る。眼前には洵にスキー滑走によささうな尾根が、白く輝き、我々の立つ尾根と同じ方向に、御飯岳へ走つてゐる。根子、四阿の一角がその上に仰がれる。尾根のラッセルは一尺位、大した苦痛もない。二ケ所程ブッシュの密生した所がある。雪の尠い時には弱る事であらう。一、七九四米のピークを越える頃より、針葉樹林と變り、型とりどりの美しい雪のモンスターが現れる。この附近より國境線に至る間の地形は地圖以上に複雜してゐた。廣い尾根に雪をかぶる森林は繁く、枝尾根の分岐も多い。吹雪の日は注意すべき地點と思はれる。國境の一角二、二〇〇米の峯に着いたのが二時半。御飯岳と喜び勇んで登り切れば、更に南方に、大きなギャップを隔てゝ、本當の御飯岳が聳えてゐた。この峯をオユノクラと呼んでゐる。やうやくに午後四時近く久戀の頂に立つを得た。山田溫泉より六時間餘を要してゐる。南北に長く尾根は走り、美事な樹氷をつけた針葉樹が點々と立つてゐる。そして絶望と考へられてゐた頂の眺望は意外にもすばらしいものであつた。白根より横手、岩菅の山波が大きく東より北へ、南には遙か遠く淺間山の押出しが輝き、氷河を想はせる。

御飯岳の西南側一帶は黑い樹林も消え、枯木の點在する荒凉たる姿に急變する。嘗つて小串鑛山は西側の谷間に營まれてゐたとの事である。少憩の後、頂を辭し南へ數段に分れた臺地狀の尾根を下る。

東側の雪庇を警戒し、或時は波狀雪に撥られ、又サンクラストに流されつゝも、今宵の宿、小串鑛山を求めながら、スキーを飛ばして行く。毛無峠附近は風が強いらしい。雪も尠く、地膚が露れその側には鐵柵の櫓が一つポツンと立ち如何にも寂寥を覺える。鑛山は

この峠の東方の谷間に當つてゐる。

寒さうな雪の原に、モク〳〵と立上る煤煙、雪に半ば埋れた十數棟の工事場、吐き出された鑛山の滯泄物は小山をなす。此處にも亦雪と戯れる元氣な人の子がゐる。

小串硫黄鑛山

鑛山の事務所を訪れたのは、午後六時近くであつた。硫黄の臭氣が強く鼻をつく。突然の訪問にもかゝわらず我々を心よく迎へて下さつた事は洵に感謝の言葉もない。雪の上に一夜を送る身が、立派な御座敷に通され、宿屋にも優る待遇を受けようとは全く思ひもかけなかつた。そして又その設備の充實さと豫想外の都會との接近には一驚の外はない。ラヂオ、電話を始め、須坂とを通ずるケーブルはあらゆる物資を運び、新版のレコードもその日の新聞も見られ、時には人間さへも運ぶと言ふ。若し我々にこのケーブルの利用が許されるならば、種々のコースも取れる事であらう。御飯岳の登山も日歸りは容易とならうし、御飯を越え、萬座から白根を馳け、又浦倉岳(ウラクラダケ)、四阿山を縱走して菅平へ等々、コースは自由なものとなる。

鑛山は硫黄の採掘に、三百人からの人が働いてゐるといふ。活氣ある鑛山の生活、耳新らしい色々な物語に、小串鑛山の第一夜は興味深いものがあつた。

第二日目

昨夜のラヂオによる天氣豫報は見事に裏切られて、朝から空も暗く、西北風の強い吹雪には出發もならず、滯在と決める。然るに天候は十時頃より回復して午後は一點の雲もない快晴となつた。餘儀なく輕裝して土鍋(ドナベヤマ)山方面へ、明日のコースの偵察に出掛ける。鑛山より西へ一度小さな澤に下り、土鍋東側の針葉樹林の尾根を縫ふ。雪は申分のない粉雪。頂上近くは傾斜も急に樹林は密生し、恰も横手山の西側の如く登高には相當に苦しむ。約一時間十五分にして一九九九・四米の頂に着く。夕陽を浴びて樹影の長くのびる靜かな頂であつた。

毛無峠より東へ國境線に沿ふ尾根はナイフリッヂ狀の雪稜がつゞき、その上部は巨岩が張出してゐて、一見したところでは通過困難と思はれた。土鍋より南方浦倉より四阿につゞく尾根は巾も廣く、むしろ雪原といふべきであらう。針葉樹の散在する高原の尾根は彌陀ケ原や苗場山頂を想はせるに充分な景觀である。意外なる雪原の出現に驚き、それにつゞく浦倉の密林、遙かなる四阿山の頂を望んでは氣も遠くなるばかり。吹雪の日の尾根縱走の困難は思うても餘りある。

夜の鑛山事務所は浪花節の夕べとて、時ならぬ活氣を呈してゐた。この雪深い山奥の鑛山まではるばる登つて來る浪曲師の勞も思ひやられる。何よりも我々の氣にかゝるものはラヂオの氣象通報であつた。かゝる場所で長い尾根縱走の前夜に聞くラヂオこそ心强いものである。

浦倉、四阿山縱走

第三日目、三月廿日は滿天に星の降るやうな、靜かな曉であつた。二日間の心からなる歡待を厚く謝し、六時鑛山を發つ。昨日のシュプールに從ひ、土鍋山に進む。東斜面の粉雪は、あまりに輕く、ゾームシールも幾度か後滑りをする。それにルックは昨日と異り、相當に汗をしぼらせる。一時間二十分を要して、國境線へ出る。頂を右へ見て、廣い高原狀の尾根を南西に下る。土鍋の頂から浦倉山の鞍部一帶は針葉樹も疎に緩かな斜面がつゞいてゐる。斯かるすばらしい高原が秘められてゐやうとは地圖上では思ひもかけぬ事である。一行の一名がシールの張替えに手間取つた時間を除けば、この歡喜に滿ち滿ちた直滑降の一本のシュプールは僅かに十分。早くも浦倉との鞍部へ着く。霧の日、この斜面を南に寄り過ぎると知らず識らず萬座川の谷へ滑り込む恐れがあらう。浦倉への登りも依然として巾廣の尾根、そして針葉樹の海の中には入江のやうに廣い一木もない雪原が二、三ある。此處を結びつけるやうにして、森を縫ひ、雪原に出ては又森を進む。風もなく一點の雲もない蒼空の下に、又樹枝の間をも

れる陽光を浴びては一行の心も輕くなる。一度先頭に立つたガイドの宮川氏は林を縫ふ中に方向を間違へて、雪原に出た時は土鍋山に向つて進んでゐた。笑止と云へばこの蒼空の雪原に、それ程の尾根も廣く、斜面も緩い。地圖に示された隆起も餘り明瞭ではない。この失敗の後は尾根を西寄りに進み、常に米子鑛山側の廣い谷を見ながら行く。

浦倉の頂は林に包まれた特徴のない小突起に過ぎない。更に幾つかのそれよりも高い隆起が四阿へ續いてゐる。浦倉を越えた窪地、雪と林に圍まれた山懷に暖かい日射しの下に、晝飯をとる。その後は幾度か、數へきれない隆起を、登り、そして下つた。四阿山に近く、高度が增すにつれ、左側・卽ち上州側に雪庇の張出を見る。この頃より、我々のスピードを弱める伏兵が現れた。それは、日射に因つて、粉雪の表面のみが溶解した、ベタ雪がシールを濡らし、踏み込む雪の下からは粉雪が現れて、シールに厚く附着するのであつた。あたかも粉雪の中でワックに失敗をした如く、スキーの裏には五寸から一尺の雪が粘着して、一歩一歩の重い事、一同汗を流して苦闘する。十一時二十分萬策盡きて遂にシールとスキーを乾すことゝする。長い間上信の尾根を歩いて來たが今日のやうな經驗も珍しい。地點は四阿に近く二、二〇〇米の尾根の一角、地圖の上州側に標高數字の示された尾根の頭である。此處は鑛山で聞いた米子鑛山へのスキールートの一つとして、四阿山の七合目位から右へ谷を下るといふ個所ではなからうかと思はれる。密林もなく傾斜も急峻ならず、何處でも自由に降り得る地形であるやうに見受けられた。風もなく陽も暖い惠まれた二十分の休息にシールの張り替えも終つて出掛けたが、折角の苦心も大した効力はあらはれなかつた。相も變らず粉雪が濡れたシールに厚く粘着してしまふ。

四阿の鋭い頂上も近づくに從ひ、美しい樹氷も次第に多く、藏王山のモンスターを想はせる。この樹氷の間を通して四阿の尖頂は光り輝き、支那風の屋根型に似て、頂は二つに分れ、兩端は尖り、雪稜はひどく痩

せてゐる。十二時三十五分、この屋根の根元に着く。北側は喬木密生して踏込みも困難らしく、又南斜面は一木も見えず六十度程の雪の急傾斜をなし、スリップと雪崩の危險を覺える。そしてこの雪稜には不思議にも雪庇を見ない、恐らく强く當る風の影響であらう。一行は餘儀なく尾根沿ひに進むことゝする。スキー使用不可能となりピッケルを取出して歩めば、粉雪の爲めにその効もなく腰を沒し、時には胸までも落込む穴もある。僅かな距離に一時間以上を要して頂の一角に立つ。一米もない狹い雪稜が走つてゐる。風の强い日は到底通過不能の地點であらう、退却か北側の腰を廻るより外はなからう。頂上には十數間の間隔を置いて二つのお宮がある。東方に祠るものを信州向社（信州宮）西のものを上州向社（上州宮）といふ。お宮とそれを圍む石垣が僅かに雪の上に露れる以外、總ては雪に覆はれ、雪稜もお宮の巾を殘すのみ。

頂から御飯岳を顧る。夢のやうに遠く遙かに霞んでゐる。小串鑛山より四阿山の絶巓まで七時間四十分を要してゐる。一行は吹雪にも遭はずテントの御用もなく、恙くこの頂に立つた喜びを心から分け合つた。時に午後二時、南風が不氣味に强くなり、明日の天氣は崩れるらしい雲行であつた。少憩の後、强風に追はれるやうにして頂を辭し根子岳の鞍部へ下り、それより大明神澤に沿うて、ザラメ雪上の痛快な滑走を滿喫しつゝ、菅平に向つた。

後　記

御飯岳、四阿山共に私にとつては夏の經驗もなく今回のスキー縱走も初めての經驗に過ぎず、觀察も不充分のものと思ふ。四阿山に就いては山岳第六年第二號「四阿山に踏る記」鵜殿正雄、山邊好一氏、及び第十四年第一號「四阿山上州方面の登路」武田久吉氏の稿を參照され度い。夏期の登路や、四阿山頂の神社の事等に關し詳しく述べられてゐる。

冬のスキー縱走に際しては私達一行が御飯岳より始めて四阿山に至つたのは、四阿山より菅平までの地形

が明瞭であり且つ萬一夕闇に迫られてもスキーによれば短時間にて菅平まで飛ばし得る事から、このコースを選んだ次第である。然しこの縱走を菅平より始めるとしても早朝に出發し、遲くとも正午までに四阿山に立てば、その日の内には充分に小串鑛山に到着し得ると考へられる。

四阿山の東麓孀戀村上ノ貝より標高數字の入る尾根に沿うて四阿山に達するスキールートは興味あるものと思はれた。傾斜も手頃のものであり、尾根は樹木も尠い。唯國境線に接する地點で雪庇を切らなければならないであらう。仁田澤から浦倉山に到る斜面に洵に雄大極りなく、北海道の無意根尻山を想はせるに充分なものがあるが、餘りにも廣く踏み迷ふ事を恐れる。

小串鑛山にて宿泊する場合は須坂町同鑛山宛に豫め手紙にて交渉されてから出掛けた方がよい。同鑛山より採掘する硫黄は軍需品の關係にて、鑛山來訪者の調査は豫想外に嚴重のやうであつた。私達は出發に當つて山田溫泉から電話で御願ひしておいた。

米子鑛山へ降るルートは四阿山の七合目よりといふ事のみで詳細は不明であるが、四阿山頂北方肩より北へ走る尾根は地圖に示されたやうな明瞭なものは見當らなかつた。この點地圖に誤謬があるやうに思はれる。米子川の上部はスキーで降るとしても問題はないと思ふが、鑛山の近くに於ける地圖に現れた岩壁を如何に降るかに就いては聞き漏してしまつた。

大平晟氏の壽像建設計畫

高頭仁兵衛

本會名譽會員、大平晟氏は、去る昭和七年十月斯文會より、銀盃と表彰狀を下附されたるが、本年、氏は古稀七十に達せられたるを以て、六月十五日、長岡市の北越新報社の樓上にて、山岳の座談會を開催されたる時、會員の長岡市の松木喜之七氏、新潟市の藤島源太郎氏及び來會者一同、發起人となり、氏の青銅浮彫の壽像を、氏の最も愛好せらるゝ信・越・國境の苗場山上に、建設する事に決議し、明夏八月を以て除幕式を擧げんとて、目下其の計畫の進行中なり、後に不肖も發起人に推選せられたり。猶ほ、氏は七月二十七日の誕生日に、富士山に登山され、歸途に修善寺溫泉の達磨山、熱海溫泉の十國峠及び淺間山に遊ばれたり。

表彰狀

大平晟殿

慶應元年七月生

貴下ハ新潟師範學校ノ出身ニシテ資性篤實郡鄕ノ小學敎育ニ從事シテ四十年移ラズ鄕人ヲ心服セシムルノ深キニ非ズンバ安ゾ能ク長キヲ致スコト此ノ如キニ至ランヤ宜ナリ文部大臣縣知事ノ皆其ノ功績ヲ表彰シ賞勳局ノ勳八等ニ叙セラレタルコトヤ然レドモ此レ既ニ世ノ周知スル所ニシテ復タ讃辭ヲ呈スルヲ要セズ但貴下ガ大正八年日本山岳會ヨリ名譽會員ニ推薦セラレテ力ヲ盡サルルノ事ニ至リテハ人ノ知ル者未ダ多カラザルガ如シ聞ク貴下十四歲ナル時米山ニ登リテ山岳ガ人ノ精神ヲ壯大ニスルヲ感得シ爾來五十餘年暇ヲ得レバ必ズ之ヲ山岳ノ探檢ニ利用シ終ニ北海道樺太ヲ極メ朝鮮臺灣ニ及ビ高岳靈山大抵足跡ヲ印セザル無キニ至ル得ル所ノ紀行文ハ山岳誌新聞紙ニ投載シテ登山者ノ栞トナシ又ハ各所ニ講演シテ山岳ノ趣味ヲ鼓吹ス年已ニ

六十八ナルニ安逸ヲ求メズ名利ヲ營マズ足ノ踏ム所手ノ記スル所口ノ說ク所唯グ山岳ニシテ人ヲシテ心胸ヲ廓大シ精神ヲ抖擻シ以テ日本道德ヲ向上セシムルノ事ニ非ザル無シ往時ノ學校敎師今ハ則チ進ミテ社會指導者トナレリ其思想惡化ヲ匡救スルニ於テ別ニ一良法ヲ案出セリト謂フベシ其世ニ資益スル將ニ心ズ大ナル者アラントス本會之ヲ偉トシ不朕ノ物ヲ贈リテ以テ表彰ス

昭和七年十月二十九日

財團法人斯文會長岡支部長　木村清三郎

遭難顚末概報

鹿島槍ヶ岳に於ける國澤武氏の遭難報告

(一) 一　行

國澤　武（城南山岳スキー會　關東山岳會）、

岡田美雄（城南山岳スキー會）、　人夫　松澤淳二

(二) 日時及び場所

昭和八年十月十七日、鹿島槍ヶ岳南山稜に於いて國澤武死去す。この死去の地は、鹿島槍三角點より、南に國境尾根上の縱走路を下り、鎌尾根（信州側に派出する尾根）分點を過ぎて、更に下りきつた、一隆起（一名、乘鞍槍とも云ふ）との最底鞍部より黑部側へ約二十米それたる地點、卽ち棒小屋澤の支流、コヤウラ澤上の斜面に當る。附近は風を妨ぐ何等の樹林を見ず、信州側の斷崖に比し、岩石荒寥たる緩斜面にして、毛勝、猫又、劔、立山、藥師等一望に收まる。

(三) 登山計畫と目的

十月十五日藥場—冷澤—二俣—北俣を詰め—冷小屋泊、十六日冷小屋—鹿島槍—キレット小屋—泊、午後はカクネ里觀察、十七日北カクネ里觀察、キレット小屋再泊、十八日キレット小屋—五龍—唐松小屋、十九日八方尾根を經て細野、歸京。

此の行の目的は、一に積雪季の後立連峯縱走の豫備行動であり、二には北槍カクネ里の觀察にあつた。尙、天候次第に依つては二日間の餘裕を見た。

(四) 服　裝

國澤、下着に於いて充分とは云へざりしも、毛付チョッキ、スキー服、スキー帽、更に羽根入りシュラーフザック等用意したればプラン通りの小屋泊りとしては申分無し。

岡田、服裝は嚴冬季着用の第一公式、尙故國澤氏と同樣羽根入り、シュラーフザックも用意す。

(五) 食料品

米、人夫松澤をして豫定宿泊小屋の米味噌の貯藏に

つき調査させたるところ、第一日泊の冷小屋のみ、ストック無きを知り、一升五合用意す。(第一日の朝晝の二食は携行の握飯にて濟ます。)

パン、レイズンパン六斤持參したるも、中四斤(ルック以外の風呂敷包)は、車中に置き忘れたといふ大失態を入山後發見したるも、遭難には關係なし。

副食物、コンビーフ、白菜、菜葉、バター、ジャム、サージン、さつまあげ、干物類、鰯、ソーセージ、福神漬、パイ罐、羊羹、ミルク、レモン、林檎、梨、昆布、珈琲、紅茶、カレー粉、其の他嗜好品等充分に持參す。

(六) 人　夫(同行者、松澤淳二)

人夫として連れた北城村蕨平の松澤君は未だ年若く、案内人には屬し居らず。夏季、白馬或は唐松の小屋番人として今日に至り、鹿島槍へは今回初めて同行した。然らば何故鹿島槍に不案内の彼を同行したか。積雪季の鹿島槍を既に經驗せる國澤としてガイドの必要を認めず、只昭和七年十一月國澤が吹雪の白馬へ登りし時、猿倉の小屋番であつた松澤の勤勉振りに深く感ずるところがあつたやうで、(私に、よく松澤の純情な働き振りを話して呉れた)又の山行を約し、別れて以來、文通により親密の度を增し、(松澤を東京へ呼び寄せようとした位)今回の後立行きには荷持友達として同行せるに過ぎない。而るに今回の重大なる任務を、遂行したる其の涙ぐましき心情に對し、深謝すると共に、所謂ガイドとしての責任を彼に求むるの非なる事を改めて此處に公けにする。

(七) 登山經過報告

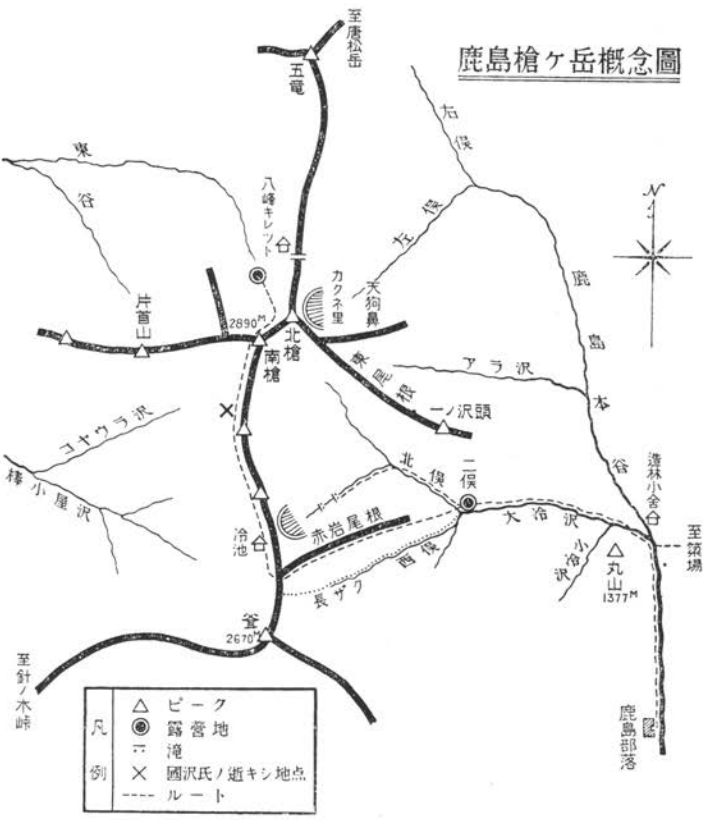
十月十五日、曇夕刻より雨となる。

大糸南線築場驛(九・三五)—黑澤峠(一〇・三〇)—鹿島本流渡渉(一一・四五—〇・一五)—二俣(一・二〇)北の俣を詰め笹喰より左俣に入つたが兩岸迫り三段よりなる瀧に逢着した爲め引返す(三・四五)—二俣キャムプ(四・五〇)

黑澤峠より仰ぐ鹿島槍の全貌を期待してゐたが、小冷澤の源頭から一ノ澤の頭へかけてから、上部は密雲

に深く閉ざされ、其の面影すら認め得ず、鹿島大川の路を辿る。二俣（北俣、西俣の出合）より長ザクのルートをとらず北俣に入り、釣尾根より來る澤の出合（笹喰）を經て左俣を溯り詰めたが、雪渓は消え兩岸愈〻高く削立して迫り、雨雲次第に低く遂に三段からなる長さ約三十米の大瀧に逢着す。時に、午後三時四十分、遂に雨となる。一行は自重して二俣へ引返へし、幸、同所に張られし農大生の天幕に泊る。

十月十六日雨（午前十時迄）晴（一時迄）後吹雪。二俣（八・二〇）—國境尾根（一一・四五）—冷小屋（正午—一・〇〇）—鹿島南槍（三・〇〇—三・一五）—釣尾根より東谷へ出る一岩稜上に露營渡渉に約三十分を要し、紅葉正に酣なる大冷澤左岸の



（五・〇〇）

前夜から降り出した豪雨は明けても止まず午前十時頃迄降り續けた。雨の中を一行は、止むなく好ましくない長ザクのルートを取る事に一決したが、長ザクへ入ると思つた登山道は、西俣と北俣を振り分ける赤岩尾根に最近出來た新道である事を、はじめて發見したのであつた。午前十時半、偃松を見る。雨やめども濃霧深く、眺望全然なし、十一時、パンで食事をする。此の頃より天候次第に回復に向ふ。間もなく國境線へ出る。脚下、棒小屋澤から黒部渓谷を距てゝ立山、劔岳方面は晴天、信州側は曇又は雨で、風は黒部側から吹き上ぐ。冷小屋へ入る頃やうやく、太陽を仰ぐ事が出來た。氣溫、左程寒からず、夏山のやうな、長閑な氣分でヨーデルを口ずさみながらコーヒーを沸かし、羊羹を食ふ。小屋には二俣の天幕の主、農大生が滯在してゐた。思出なつかしき劔の三窓、小窓、大窓等が明瞭に觀察し得た。今日は、此の小屋泊りにプランしてゐたが、天候回復に元氣づいて國澤は、キレット小屋行きを強く主張し、人夫松澤も亦これに從つたので餘儀なく自分も折れた。冷小屋發午後一時、附近新雪、約十糎にて、足跡に土が見える程度であつた。此の頃より天候は、見る〳〵崩れ、氣溫は降下し信州側より濃霧盛んに襲來し、視界を完全に閉ざす。二時半頃より濃霧に雪さへ交へ寒さを覺えて來たのでウインドジャケットをかぶる。鹿島槍頂上にいたりし頃には、雪は完全に吹雪となつて、釣尾根への見透しに苦しむ。約十分間、見つめてゐた吹雪の中に、瞬間に北槍のドームを見出したので直ちに其の方向に下る。新雪約二十糎、降路判然せず、足場不安定にして吹きつける風雪に全然見透しきかず、惡場に不馴れな人夫松澤を考慮してアンザイレンする。吹雪は益ゝ烈しく一行の息は止らんばかりに吹きつけて來る。姿こそ見えないが、第六感を以て此の槍の左肩と思しきところより尾根に沿うて下る。新雪の中の偃松を手懸りに、下降又下降を續ける。餘りの惡場に尾根の誤れるを、再三、國澤に質せしも、効なく、苦闘は更に續けられた。風雪は日沒と共に愈ゝ烈しく、或時は氷結して竿

の如くなつた三十米のザイルを悉く用ひて下降し、ミドル松澤の足場を求めたりした。此處に至つて私は、はじめてキレットへ行く尾根にあらざる事を知り、松澤、國澤を待つた。松澤の顏色は蒼白となり唇は紫色に變じてゐる。國澤の狼狽の色が吹雪の中にうかゞはれる。午後五時、時は既に遲い。早や足許さへ暗い。黑部側、信州側、キレット側の三方から吹き上げる風雪は、うなりを立てゝ、愈ゝ物凄く、三人は完全に死刑の判決を受けたやうな氣持になつてしまつた。風蔭を求めようにも、上下左右絕壁にして二歩と自由になるところではない。兎に角、夜の明ける迄此の地點を動かざる事に決め、直ちに火氣を作るべく偃松を搔き集めた。持參せる一升ばかりのアルコールを殆んど使用して幾回となく努力したるも吹きつける風雪には何の力とならう。火をあきらめた我々は急に、死といふ觀念の入つた、生れてはじめて味はふ淋しさに襲はれた。國澤、松澤の舌はまはり兼ねてゐる。私は急に空腹を覺えて來たので、コッフェルを出し、コンビーフ一罐と白菜一株を混ぜて煮詰め腹をつくつた。其の時國澤は三口程しか食べず、數時間前の氣力をすつかり失つてゐた。辛うじて珈琲を三杯程飲み乾した。掘る程の雪はなく、馬の背のやうな絕壁に三人は互ひに背中を合はせた。シュラーフザックを持ち合せない人夫松澤を比較的風の來ないキレットの方向に、國澤を信州側に向け、自分は黑部側に向いた。「慄へ」が間斷なく我我を襲ふた。二、三分置きに吹きつける風雪は、呼吸を困難にさせる程我々をなやました。三人はとにかく夜の明ける迄如何なる手段を講じても絕對に眠らざる事を堅く誓ひ合つた。此の一夜こそ三人にとつて如何に長く感ぜられた事であらう。午前二時、三時頃は、さすがに烈しく、眠氣を催すのでナシ・ナルをつけ、引き攣られ行く意識を再び取り戻すと互ひに番號をかけたりした。

斯くして、睡魔と戰ひ、風雪に抗し續けた恐ろしき一夜も、間もなく明けんとする。自分は氣にかゝる松澤を呼んで見た。意外にも松澤は、うなだれて、將に

甘き眠りへ入らんとしてゐるではないか。驚いた私は背中を二、三回たゝくと、眠さうな濁聲で「リュックの中に入れた足が感じない」といふ。「しまつた」、「凍傷」、シュラーフザックの中からガバとはね起きると國澤と二人で彼の兩足を摩擦した。酷寒の中に必死の努力を續けたが空しく、再び、登降し得る足とはならなかつた。夜はほの〴〵と明け初めて寒氣一段と嚴しく感ぜられた。刻一刻、衰弱し行く吾々の身體を以て此の氷雪の懸崖に横はる松澤を何とする事も不可能と認めた二人は、一刻も早く冷小屋にゐる農大生に救援を求める爲めに出發する事に話を決めた。林檎、梨等をかじると、パイ罐をハマーで叩き割つた。(此の時、果物以外の食料品に對する食慾が全然なかつた事を記憶してゐる。)一夜中吹き通した雪も何うやら止んだ樣であるが、黑部側から吹き上げる强風が新雪を舞ひ上げて來た。比較的ぬれてない國澤のシュラーフザックに松澤を入れると、絶對に此の地點を動かざる樣注告し、二人はルックを置いた儘、再び南槍へと苦しき登攀をはじめた。ところが意外にも約四十糎の水つぽい新雪が明け方の寒氣の爲め完全に氷結し、登高をより一層困難ならしめたのである。雪面に露出した偃松の樹氷を手懸りにピッケルの亂打が續く。「後から直ぐ援けに行くから動くな。」大聲で呼んだ自分の双眼はいつしかぬれてゐた。早や、雪煙の中に松澤の姿は消えた。時々吹き上げて來る風雪は、ピッケル諸共キレットの方へ、吹き飛ばされるのではないかと思はれた。何時も元氣な國澤、――昨年三月劔の早月尾根へ行つた時に終始笑をたゝへつゝ、一行のヘッドに立つてゐた――あの元氣な國澤も、さすがに今日ばかりは狼狽と疲勞の色をあらはしてゐた。幾度か、ステップを切つては休む、そして風雪と戰ふ。松澤の事が氣になつて心ばかり焦せる。幸にも天候は何うやら快方に向つて來た。風は西、黑部側から吹いてゐる。昨日の午後に比して遙かに明るく、南槍が純白な姿で屹立してゐる樣は威嚴其のものだ。そこにはじめて發見した吾々の尾根と云ふのはキレットの主稜から黑部側に二本誤つてゐるので

あつた。自分は雪烟の中に、尙も確實なステップを切りつゝも後から登る國澤を庇ふ樣にして蹈ました。辛うじて釣尾根へ出る。一しきり烈しく吹かれたが尙も頑張り續けて遂に再び南槍頂上に立つ。「もう後は我々のものだ」と思ふと自ら湧き上る歡喜の涙に二人は期せずして堅い握手を交はしてゐた。只松澤が來てゐないといふ事が何よりも二人の氣持を暗くした。雪烟は容赦なく其處から二人を追ひ立てた。南槍から冷小屋へは、夏季ならば婦人でも一時間足らずで行ける樂な下り尾根だ、吾々が何んなに弱つてゐたとしても二時間もかゝれば行けるだらう。さう語り合ひながらふらふら下りかけたが、何となく尾根の樣子が違ふ。國澤は「斯んな尾根でない、彼方だ」と云つて雪烟の中に姿を消した。後を追つて行くと、「此方だ此方だ」と云つて呼んでゐた。國澤は安心した爲めか急に疲勞を覺えて來たらしく足が遲い。私は寒いので馳ける樣にして四十米行き、五十米行つては國澤の來るのを待つた。最早何と云つても此の一本尾根さへ誤らない樣にして行けば厭でも冷小屋へ入るにきまつてゐる。此の邊の積雪は約三十糎で偃松の中へ入らうものなら股迄沒し、動きが取れなくなる。國澤は後から風雪に、惱まされつゝやつて來る。「大丈夫か」、「大丈夫だ」、此んな會話をしてゐる自分も大分弱つて來てゐた。黑部側から吹き上げる風雪は、衰弱して行く二人の身體にとつて苦痛の極みであつた。殊に國澤を待つてゐる間、寒さの餘り、此の儘倒れてしまふかとさへ思はれた。其の瞬間私の頭に浮んだ、松澤の姿は刻一刻死に近づいて行くやうに思はれた。又一方、冷小屋の學生は今日あたり下山する豫定となつてゐる。（其れは二俣のキャムプの中にあつた紙片に、後から來る友人に宛て「二、三日國境線に遊ぶ」と記してあつた。）若し下山した後に小屋に着いたとしたならば松澤は先づ絕望と見なければならないと思ふと、後から來る國澤に云つた。「一刻も早く冷小屋へ行つて農大生に、松澤の方へ行つて貰ふ事を賴むから一足先きに行つてもよいか。」之に對して國澤は「早く小屋へ行つて呉れ給へ、僕は後か

らゆつくり行くから」といふ返事であつたが、これが此の世の最後の別れの言葉であつたとは誰ぞ知り得よう。自分は重大な責務を感ずると馳ける樣にして、尺餘も積つた雪の中を、一に松澤を氣遣ひつゝ冷小屋へ飛んだ。何れが布引のピークであるか考へる餘裕も、早や失くなつてゐた。只一本の尾根を夢中で馬車馬の如く下つてゐる樣な氣持で、其の實、餘り捗取つてゐなかつた。或時は雪に覆はれた偃松の中に入つて進退谷まつたり、或時は雪で隱されたつまらない岩石につまづいて倒れたりした。尾根の信州側を行く樣になつて、やつと風雪から逃れると、全身俄かに疲勞を覺えて、兩眼は次第に朦朧となつて來た。もう小屋も見えてもよさそうなものだと意識した瞬間、行手にはつきりと小屋があらはれた。私は思はず歡聲を上げて其の方向に走つた。ところが意外にも其れは小屋にあらずして岩から出た偃松に過ぎなかつたのである。私は失望の餘り其處に腰を下ろしてしまつた。南槍頂上を發つて恐らく三時間以上も急足で下つて來てゐるのに、

（事實は、倒れたりして四十分位の行程しか來てゐない）冷小屋に近くなるやうな樣子が見えない（昨日に比し新雪三十糎もあつて樣子が變つて見える。）ところから見ると、尾根を誤つてゐるといふ錯覺を起してしまひ、はじめて自分の手からピッケルをはなし、登る勇氣を失ひ横になつてしまつた。國澤は今頃小屋へ入つてゐるだらう。さうすれば天氣も回復して來たし、松澤もやがて救はれるだらう、等と考へながら何時しか自分は恐ろしくも積雪上に眠つてしまつた。（冷小屋へ後、二十分位の地點である）

× × ×

國澤の呼ぶ聲に眼を覺ますと雪の間から薄陽が洩れてゐる。幸に雪は止んだが風は未だ相當强い。勇氣を出して國澤の呼んだ方向に向つて再びピッケルを衝くと登りはじめた。そして幾度か聲を絞つて國澤を呼んで見たが何の返事もなかつた。唯、偃松と雪の上を吹いて來る風の音、單なる錯覺にすぎなかつたかと思ふと、烈しい寂寥を感じた。が同時に私は此の時堅く決

意するところがあつた。此の尾根は或は牛首の尾根かも知れない。天候が回復して來た以上、今一度南槍の頂上へ登り、冷小屋へのリッヂを確めよう。倒れる迄戰つて見よう。其れでも右に左に小屋を求めながら……又幾つかの小屋を發見する度毎に錯覺に依る失望を感じながら谷へ下りたり尾根へ出たりして、南槍の方向へ夢遊病者の如く登つてゐた。(大體、黑部側の斜面を尾根に平行して登つてゐた。) 雪をかぶつた石に氣をつけながら、何氣なく足許を見ると人間が仰向けになつて横たはつてゐる。はつと思つてよく見ると、其れは國澤ではないか。驚きの餘り倒れんとするのを押へて、幾度か聲をかけながら抱き起して見たが早や、息は絶え、石の如く冷く硬直してゐた。恰度、尾根に平行して鹿島槍の方を頭にして倒れてゐた。完全に死んでゐるといふ事を確めると、自分は未だ生きてゐるといふ事を意識した。折柄風は收まり、天候はすつかり晴れ亘つて、今は亡き國澤の入山以來待望してゐた「青天上」となつた。鹿島槍の頂から牛首への尾根、雲海の上に出た劔、立山の連峯、何れも新雪に輝いてゐる。此の莊嚴な美しい景色の中にあつて、彼、國澤は永遠の眠りについたのであつた。好きな山でしかも最も愛してゐた鹿島槍で彼は逝いた。南槍も北槍もあの好きな東尾根も、今や新雪に裝を凝らして彼を見送つてゐる。私はしばし何もかも打忘れ呆然として遺骸を見守つてゐた。やがて南槍の方から人の聲がするので顏を上げると人夫松澤が私を呼んでゐる。(松澤は我々が發つてから自分で足を摩擦し天候回復と共に何うにか歩ける樣になつて來たといふ) 松澤も錯覺を起したらしく、「今南槍を登る途中國澤さんの後姿を見たから此の附近 (南槍頂上) にゐるだらう」等と云つて私の方へ一向に下りて來ようとしない。私は默々として松澤を遺骸のところへ案内した。忽ち彼は狂人の如く泣き伏してしまつたが、偶然とは云へ結局遺骸のところへ私と松澤は一しよになつたのだ。未だ、生存してゐる二人、刻一刻衰弱して行く事を考へると私は、徐ろに松澤を呼んだ。はじめて我にかへつた彼は、小屋

に滯在してゐる學生が歸つてしまふ事を恐れて、凍傷の片足を引摺りながら先に立つて行つた。私は遺骸の場所を充分に確めると、松澤の足跡を辿つて後から引張られる樣な重い足を運んだ。幸に、風は全く無くなり、太陽は嚇々と輝き、汗さへ流れて來た。小屋近くなつて、先についた松澤が報告したらしく農業大學生飯田氏が態々迎へに來て下さつた。太陽が立山連峯の蔭に入る頃、辛うじて小屋の人となつた。案外、元氣な松澤は兎も角として、衰弱しきつた私は、農業大學山岳部員飯田、田中の兩氏より、手厚い看護を受けたのである。重湯を二三杯平げると、幾分蘇生の感をもたらした。日が暮れると、はじめて友を失つた悲しみが限りなく涙となつて流れた。十時頃から熱が出て、神經高ぶり遂に一夜中眠られず苦悶の中に夜が明けて行つた。

十月十八日快晴、寒氣凜烈にして、一點の雲もなく窓越に見える劔、立山連峯が新雪に美しく輝いてゐる。昨夜來の發熱は依然として引かない。案外元氣な人夫松澤を枕元へ呼び寄せ、大町警察署並に東京へ急報する樣直ちに準備をさせた。重湯二三杯で朝食を濟ますと、小屋の上へ出て、凍傷の爲め跛を引きながら出て行く松澤の後姿を見送ると、はじめて深い眠りに落ちて行つた。此の日、布引迄登つたといふ前記田中氏の話に依ると、私の足跡らしいものが到る所に散在してゐたといふ事である。午後になつて風が出たが終日、晴天であつた事は、松澤の下山にとつて、何よりも幸であつた。最早東京へ電報が着いてゐるだらうと思ふと、次から次へと聯想は深く大きくなつて行く。

十月十九日雨、早朝から烈しい雨風で小屋の戸をガタ〳〵はたいてゐる。昨日より幾分熱は下つたらしく、氣分がかなり良好なので粥にして貰ふ。飯田、田中の兩氏に對し、何と御禮申上げてよいかわからない。全く兩氏の御蔭で私は此の世に再生したのだ。昨日、松澤に賴んで置いた鹿島の人夫二名、雨を衝いて午前十時頃登つて來た。雨風に曝されてゐる遺骸が、どうも氣に懸るので早速二人をやつて蓆をかぶせて來て貰

ふ。粥の一日は私を更に元氣づけた。夜に入つて雨風が益ゝ烈しい。

十月二十日、雨後曇、熱がすつかり引いたらしく頗る氣分が良いので床をはなれる。今日こそは露營地へ置いて來たルックを取りに行かなければならないので、はじめて味噌汁に飯を美味しく食べる。雨の中を飯田氏と共に人夫二人を連れ再び鹿島槍へ向ふ。一昨日の晴天と、昨日來の雨風で雪は、完全に消えてゐる。やがて南槍と布引の鞍部に達し、黒部側へ二十米下ると、蓆をかぶつた遺骸に、しばし涙の默禱を捧げた。南槍の頂上から、雨の中を釣尾根へ下り、見るも傷ましき露營せる尾根を求めた。未だ完全に回復してゐない私は、自重して一名の人夫と共に尾根上に止まり飯田氏と人夫一名が露營地に向つて下つて行つた。幸に雨は上るらしく明るくなつて來た。やがて登つて來た飯田氏の話に依れば、ルックの中のものが、かなり散亂してゐたと云ふ。信州側が晴れてゐるので冷澤の紅葉が手に取る樣に美しく見える。午後一時半頃小屋へ正に入らんとして、國澤家の方、松澤兄弟、大町の櫻井順一をリーダーとする人夫十三名、國澤氏の親友小川良爾氏（關東山岳會）、其れに大町警察署巡査部長小野氏等に遭ふ。恰度遭難の翌日、下山の豫定をしてゐたと云ふ東京農業大會山岳部飯田、田中兩氏は、小屋滯在を延ばし、專心私の看護に當つて下さつたが、一行の到着と共に直ちに「東京で會ひませう」と云つた下つてゆかれた。私は此の兩氏を送り出す時、曾つて覺えた事のない感謝の念で胸はふさがつてしまつた。薄暮、遺骸は小屋附近に運ばれ線香があげられた。夜に入りて再び風雨烈しく、小屋の戸をはたいた。

十月二十一日岳は雪、里は曇、愈ゝ下山の日が來た。夜來の雨に雪さへ交へた中を、遺骸は丸太橇にのせられ、長ザクのコースをとつて引き下されて行く。登りに比して何と慘しい下山であらう。而も自分は病後間もなくふらつくので、遺骸に附き添ふを得ず、國澤家の方と共に赤岩尾根を下り二時頃鹿島につく。やがて遺骸は、松澤兄弟、大町、鹿島の人夫等の必死の努力

に依つて、無事運ばれて來た。六時頃大町對山館へ入る。夜更けて遺骸の安置された天正院へ燒香に赴く。アルプス颪の風が身を切る樣に寒い。

十月二十二日快晴、昨日下山後、岳は再び大吹雪となつたらしく、對山館の物干臺から仰ぐ後立連峯は早や嚴冬の姿と化してゐる。其の中でも特に鹿島槍の双峯は純白にそして水晶の如く四海に君臨してゐる。私は松本の市營火葬場へ皆より先に行つて靈柩車の到着を待つた。美しく晴れた秋の安曇野を見渡せる丘陵に咲き亂れたコスモスの花がそよ吹く風に戯れるところ、今は亡き岳友と共に死を以て風雪と闘ひし事も、一つの悲しき思出となつてしまつた。

以上で大體の記錄を終るが最後に私は、終始看護に當つて下さつた東京農業大學山岳部、飯田、田中兩氏並びに、遺骸を松本へ運ぶ迄、何かと御盡力下さつた關東山岳會小川良爾氏に對し、玆に厚く謝意を表すると共に、私の至らざりし爲めに斯かる事態を惹起したる事に對して、衷心より遺憾に思ふ次第である。

(八) 國澤氏の遭難原因について

私は遺憾ながら前述の如く遭難當時、國澤より一歩、先に冷小屋へ向はざるを得ざる狀態にあつた爲め、死に到る經過を詳細に語り得ないが、當時の前後に於ける狀況として、(1)私と別れた時、所持してゐた筈のピッケルが南槍頂上の雪面に突き指してあつた事、(2)私と別れた當時、國澤は冷小屋に辿り着く迄の體力を有せしものと認められた事、(3)而るに、私が國澤と別れた地點と、國澤の倒れた地點との距離が、おぼろげながら約三百米位と思はれる事、(4)國澤は責任觀念の厚い人格の所有者であつた事（引返へす途中に於いて松澤を頻りに氣遣つてゐた事等）、の四點より遭難直接的の原因を、私は大體左の如く推定してゐる。卽ち國澤は私と別れると間もなく松澤に對する責任を突如思出せしものゝ如く（冷小屋への求援は私に任せたから）一旦、南槍へ引返へし、松澤のゐる方向へ下らんとしたが、當時黑部側（東谷）より吹き上げる風雪、最も激烈を極めた爲め、止むなく思ひ止めて、再び、冷小屋

へ向はんとしては、松澤を諦めてしまふ事が出來ず、南槍頂上のピッケルも其の際、手放したものと推定されるのである。とにかく風雪最も烈しき時に、而も風蔭一つない南槍頂上附近を、別れてから相當の時間、さまよひ歩く中に死期を早めしものゝ如く見られるのである。

（岡田美雄記）

穂高屏風岩に於ける黒田勝喜氏の遭難報告

出發より遭難迄

一行　黒田勝喜（二十三歳　土陽商會勤務、神戸アイスアックスクラブ員）、谷口元治（二十三歳　神戸三菱造船所電氣課勤務、同部員）

昭和九年九月二十二日夕、穂高屏風岩登攀を目的として神戸港發。（以下谷口をT、黒田をKとす。）

翌九月二十三日―晴―午後上高地着直ちに横尾岩小屋に至り、屏風岩末端の偵察をなす。

九月二十四日―晴―午前六・三〇岩小屋發

一行の持つ携行品（兩人にて均等に分擔）

ザイル（二〇米）一、ハーケン四、カラビナー二、ピッケル一、小型カメラ、ラムプ。

尙各自の所持品を記せば、

Kの携行品、小型ルックザック一、ウインドヂャッケット一、毛皮付スキー帽子一、スキー用毛糸手袋一、薄毛靴下（細糸）一、テルモス一、アイゼン一、堅パン一〇、梨一。

Tの携行品、小型ルックザック一、スキーコート一、毛アウティングシャツ一、アイゼン一、水筒一、堅パン一〇、味付パン四。

午前七・二〇岩壁瀧下草付――午後四・三〇第二ルンゼ登路を經て第一峯に到達。（此の邊より兩人のコンディション惡く、Kは特に疲勞甚だしく偃松のラッセル寸進尺退、時休分進の裡に、屏風頭手前迄辿りつき）徹夜す。

九月二十五日―曇

午前二・三〇？迫り來る寒氣にたへ兼ね偃松を切つて焚火をなす、K頻りに嘔吐を催す。同三・三〇？下降せんとせしも、甚だしき疲勞の爲め地圖上の降路を誤り遂に屏風頭—第一峯間のルンゼを下る。（此のルンゼは第二ルンゼ入口で一緒になり壁をなす）上部四段より成る小瀧（流れ尠き意）の尾根を下降す。

尾根の末端にて兩人はザイルで結び合ひ、Kを先頭T之に續き、第一—第二の瀧を無事通過、第三瀧（高さ一三米）の滑かな逆層を降る、Tハーケンを打ちて確保し、K徐々に下降するうち、過つて滑落し前額部を强打せしも、血の滲む程度の傷を負ふ。此の時Kを原の位置迄引揚げる力を持たぬ程疲勞せるTは、止むなくKを第三瀧テラース迄下し、所持のハーケン、カラビナー、ザイル等を投げ與へ、午前一〇・三〇？救援を求めるべくTは引返しブッシュをこいで屏風頭を左に捲き、前方に三角點の峯頭を見出し始めて目標定り安堵し、更に歩を進めて、三角點—屏風頭間南寄りの澤を下り、午後九・〇〇横尾岩小屋に辿り、力盡きて倒る。

九月二十六日—雨

夜明け頃自然に眼を覺し、稍ゝもすれば倒れんとする體に鞭つて午前一〇・〇〇德澤小屋に着。折柄居合せた殺生小屋主人中村氏の人夫及大工職人等Tの案内にて四名急行し、屏風岩末端迄辿りつきしも降雨激しく、且つ岩場の危險を察知した四名は遂に引き揚げる。

折よく上高地に滯在せる上條孫人君も、直ちに他の一名の人夫と共に急遽横尾岩小屋に向はんとせしも、登攀準備皆無の爲め、人夫の狩出し用具の準備をなす可く、直ちに島々に下山す。——以上同行のT君、案内組合長奥原英男氏より聽取す。

同捜索の概況

九月二十七日—晴

昨日の人手不足の爲め、增援の爲め上高地を發つた二名の人夫は、途中德澤小屋に更に二名の人夫を得て、島々より登る上條孫人一行の行動を助ける可く、横尾谷丸木橋岩小屋間の渡渉點に架橋し、序に屏風岩偵察

を兼ね、輕裝にて午前七・〇〇出發。架橋作業は案外早く捗り、前記四名は屏風岩第二ルンゼ附近の探査に出る。同一一・〇〇一行の一人上條辰美君は、前記ルンゼ入口の淺い瀧壺に計らずも北を枕に仰臥せるK君の無慙な死骸を發見、直ちに横尾林道より望遠鏡にて模樣を注視中の營林署巡視高橋氏に合圖し、(高橋氏は急ぎ引返す途中白澤附近で黑田君御親父一行と出逢ひ右の報告を受く)他の三名と協力して、自ら衣類を脫ぎて死體を包み、綱にて是を結へ、更に上下より綱を引きてルンゼ下方北寄りの草付を、ガレの上部に向つて靜かに引き降し、遺骸は草を被せて靜かに岩壁下に安置し、急ぎ一行は德澤小屋に引揚ぐ。

折柄急報により神戸より來れる黑田君御親父薫市氏を始め、アイスアックスクラブ員岩國義澄、友人島田竹之介の三名に右の趣きを傳へ、更に島々より捜索に要する一切の準備を調へ、德澤小屋に到着した上條孫人一行と、今後遺骸の搬出方法竝に處置に就き鳩首協議の末、上高地は風致上死體を茶毗に附すあたはず止むなく明二十八日遺骸を白澤營林署小屋附近に於いて檢死を乞ひ、直ちに人夫の手によりて德本峠を擔ひ上げ、島々に下つて茶毗に附す事に決す。

九月二十八日—晴

人夫一行十二名に黑田薫市氏を加へ午前七・〇〇德澤小屋出發、遺骸のある現場へ急行。島田は、黑田君の墜落現場の狀態、原因等調査の爲め出發。

横尾谷架橋點で晝食後、一行は直ちにガレを登り黑田君の遺骸に辿りつく。此の時黑田薫市氏は心から血をもつて山の淸淨を汚せし事を謝した後、自ら進んで今は殁き令息の側に悲しき對面を行はれた。遺骸は多數の手で昨日の方法により、靜かに架橋點に下し、消毒更衣をなす。

島田は人夫上條辰美君と共に、寫眞機、傾斜測定器、スケッチブック其の他簡單な登山用具を携へて、第二ルンゼ入口黑田君墜落現場に赴き、五峯—六峯間鞍部迄登り調査を終つて引返し、遺骸の輿より先に德澤小屋に着、出迎への岩國、谷口兩氏と會し、更に輿の到

着を待つて白澤に向ふ。

午後五・〇〇、白澤營林署小屋附近にて、巡査部長、巡査立合の下に稻核より來着の三澤醫師によつて檢死を終り、直ちに德本峠を越えて二十九日午前一・〇〇島々着、黑田薫市氏を初め友人人夫等多數に取り圍まれ、彼黑田勝喜君は靜かに旅立つ。

後記

以上の如き簡單な報告乍ら、遭難より搜索、死體搬出迄のあらましを記載出來た事と思はれる。

處で、右は會報二十九號に、瀨木氏が、遭難報告に就ての希望を發表せられたので、概報に同氏の御希望の幾何かを記載したと思ふ。猶遭難の性質上止むなく除外せしものゝ他、最も重要な遭難原因につき、詳述し得るとよいが、何分兩人が瀧の上部（圖中三段目の瀧）で下る事が出來ず、別れたのが二十五日午前一〇・三〇?であり、第二ルンゼ入口と合する小瀧下でK君を發見したのが二十七日午前一一・〇〇である。遭難は卽ち此の間に發生したので、實に四十八時間を經過してゐる。而も二十六日は夜明より雨も降り、殆んど適確な事情を知るを得ない。故に玆には死體發見當時の本人の服、所持品、死體を中心に散在する、靴、靴下、ハムマーの柄（谷口君と別れる時既に靴を脫ぎ素足であつた）、其の他四圍の情況等を略記し、諸賢の御批判を乞ふ事とする。

墜落した屍體は圖中三段目の瀧より凡そ五米下の滑かな急傾斜のテラスにバウンドし、更に速度を增して三十米の壁を滑落し、第二ルンゼ入口の出合の水溜りに叩きつけられたものと察する。

屍體は北方ルンゼ入口の方を枕に仰臥し、右手甲は恰度額の上にあり腰から下は水溜り（雨の時は瀧壺と變る）に浸つてゐた。ザイルは胴に堅く結へ他方はT君が解いたそのまゝ。小型ルックザック、ウインドヂャケットは二十五日の狀態と變りなく、屍體を中心にして鋲靴、靴下一足、ハムマーの柄の折損せるを發見した他何物も認めなかつた。

靴は一足を結へたらしく、結び目の傍より千切れて

ゐたが、損傷の跡はなく、靴下も水溜りの岩の出つ張りにくつゝいてゐた。

穂高屏風岩略圖

墜落セシ壁ト滝
死体發見現場
谷口降路
焚火ノ個所

2565.4
屏風岩ノ頭
岩小屋

右の情況は、當時屍體を發見した四人の人夫の言に誤りのない限りこれ以上の實證を摑む事が出來ない。

然らば黒田君は、何日何う云ふ原因の下に墜落したかと云ふ問題である。自ら行動せんとして落ちたか、或は二十六日早朝よりの降雨の爲め同君の止つてゐたテラスに増水し、激流となつて同君を押し流したか、恐らく後者は谷口君の言を聽取し現場より觀察した處では信ずる事が出來ない。只一つ考へられる事は、同君が自から行動したであらうと云ふ事である。

而も墜落は二十六日以後、即ち二十七日午前一一・〇〇發見される迄の間であらうと思はれる。何故ならば、現場は第二ルンゼと黒田君が墜落せし壁との出合であり、一度降雨ともならば忽ちにして水は激増し、（無數の瀧を作り）靴、靴下、ハムマーの柄はおろか、或は屍體迄も流れはせぬか、と思ふ位である。雨の日林道より望んだ人は御承知と思ふ。右の事情より私は二十六日以後の墜落と推定したい。

以上の如き雜然たる報告ながら、私の淺慮な觀察は終つたと思はれる。

最後に屍體檢案書を重要視される瀬木氏に申し譯がないが、種々の事情の爲め今其の檢案書が手元にない事を甚だ遺憾とするも、當時三澤醫師より聽取せし通りを記すならば次の通りである。

(1)頭蓋骨粉碎、腦漿露出（死命傷）(2)兩胛骨々折(3)右股關節脱臼のほか、數個所のみ打撲擦過傷あり、以上稻核三澤醫師檢屍。

終りに望んで今度の遭難で、特に種々と御便宜を計つて下さつた島々案內組合長奥原英男氏、屍體發見と同時にいち早く急を一行にもたらせて下さつた營林署の巡視高橋氏、豐科警察署との連絡、其の他の交渉に奔走下さつた奥原鉚式君、上條孫人の皆樣に、黒田家に代つて厚く御禮を申し上げます。

（昭和九年十一月島田眞之介記）

ひ出話や趣味談を聽くやうな愉しさと心安さとにひたらしめずにはおかない。

「山水帖」をひらいてみる。ウィムパー自刻の日本風景を挿繪とした本を取り上げて、マッターホルンの勇者の余技を語り、富士山に昔ながらの愛を寄せ、歌に緣のないと謙遜されながらも山岳人としては高山の和歌に限つて愛着を持つと言ひ切られたあたり、耳を傾くべきものがある。章末、日本山岳文献の小展望は稀覯本の紹介に止まつて、その内容に對する批判にまで及んでゐないのは、それはそれとして少からぬ面白さはあるとしても、一寸足物りないやうな氣がする。日本山岳文献の蒐集にも意を注がれてゐるときく小島さんに、それ等に關する大展望を期待したいと願ふのは、ひとり私ばかりではないと思ふ。

前著「氷河と萬年雪の山」でアメリカの山岳氷河に關する著者の研究や印象に接し、いま茲に短いながら巷にての亞米利加印象記を讀む。永い米國生活から歸朝後、〃奈良京都に、幾度となく遊んで、感覺の日直しを味はつた〃小島さんには、〃頭にこびりついて、一生離れさうもない、氷河の色〃の外は、〃得意になつてシガアを吹かすヤンキー〃の住む國はびつたり來なかつたに違ひない。胸に向日葵をかざして濶歩したと

圖書紹介

書齋の岳人

小島烏水氏著

昭和九年八月・東京・書物展望社刊・四六判・三四八頁・挿繪五葉・限定版九八〇部・價二、八〇圓・上製署名入版一〇〇部・價三、三〇圓

吾等の大先輩小島さんの最近世に送られた隨筆集である。收むるところ、明治四十四年頃のものから本年夏の執筆にかゝるものまで、約四半世紀に亘つて、著者のペンを執られるの久しきと、老來いよ〳〵健在なるとに、先づ敬意を表せざるを得ない。

藏本記、米國の巷にて、山水帖、畫人錄、浮世繪雜綴、泰西創作版畫、の六章に分けられたこの標題を見たゞけでも內容の多岐多樣なのが窺はれるが、頁を繰るに從つて、長短とりどりの隨筆は讀者をして、爐を圍みながら、この山の大先輩から想

傳へられる一世の伊達者〃オスカーワイルドの見たる米國の文明批評〃は人にも國にも時代の隔たりはあるにしても小島さんの印象記を併せ讀むとき、ひとしほ興味が深い。

藏本記は私の最も熱心に讀んだ部分である。購書日記抄を通じても窺はれるやうに、ビブリオフィルを通り越してビブリオマニアの域にまで達してゐられるらしい著者の、本に對する寧ろ異常ともいふべき愛情と、文學美術に關するひろい認識とが巧みに織り交じへられて書物の醸し出す奇しき誘惑の世界に讀者をして、悲きいれずにはおかないものがある。世紀末の英國にはかない花のやうにパッと咲いて散つた蒼白い病弱の畫家ビアズレイが挿繪を描いたサロメの初版本などは、たとへそれが著者の所謂名家手澤本でないにしても、ビブリオフィルの垂涎惜かぬもの、戰慄をさへ感ぜしめるあの妖艶な挿繪をひろげながら語られた一文を私は繰返し讀んだ。

本書の三分の一强を占める〃浮世繪雜綴、泰西創作版畫〃は蓋し著者得意の壇場、輕妙暢達の筆に綴られ語られる深い造詣と鑑識は、門外漢の讀者をして、廣重の〃女性的な甘美〃な藝術を想はしめたり、〃劫火に燃えた浮世繪を〃惜しましめたり、繪畫をさへも〃アヘンの隣りに位するが如くに、禁止的、抑壓的の十割稅を課する〃日本の惡法を呪はしめたりするであらう。

× × ×

讀み終へて、私はいまさらの如くに、山岳人として小島さんの持つてゐられる、深さ、大きさ、廣さをおもふ。

ひとたび山の懷に抱かれた者にとつて、山は生涯を通じて離れ難い存在であるに違ひはないが、明けても暮れても、山々で、それ以外に何物も身につかない、では余りに、趣きが、余裕がなさ過ぎるといふもの、馬鹿のひとつおぼえ、といふ言葉があるが、聊かその感がないでもない。況んや、山に生きるなどと見得を切つたところで一年中山登りばかりに暮らせる譯でもなし、また山登りそのものが善きことでこそあれ、人生の偉業でも何でもないのだから、あんまり逆上せたり、えらがつたりはしないがいい。日常の生活に於ては、山を想ふの傍ら、他の方面にも眼をひらいてこそ、山岳人―感心しない言葉だが―として奥床しいといふものであらう、とこんなことを、近頃簇出する所謂山岳專門雜誌を讀過の際に一再ならず感じてゐたが、本書に接して、さらに現代登山者のせまい小さい內容と、大先輩小島さんのひろい大きなそれとが余りにも隔りのあるのを深く感じた。

いつどの個處をひらいても氣樂に讀める好著を吾々の書架

に加へ得たことを喜びたい。

× × ×

本書の裝訂はその道の大家齋藤昌三氏の手に成るもの、全くの素人である私ごときの批評の限りではないが、下手物趣味ともいふべき簑蟲の簑、南洋産木材などは珍らしいといふ點はあるにしても、裝訂に適した材料とは思はれず、書齋に籠もる岳人を、簑にかくれる蟲に譬へての洒落とすれば、チト凝り過ぎてゐやう、これでもかといふやうな趣味は裝訂としては蓋し上乘とは言ひ難い。あまり突飛な材料によらずして效果を擧げる方が望ましい。尤も裝訂が材料の方面に於て行詰りに直面してゐるならば致し方もないが。

終りに著者並びに裝訂者に對して妄評の罪を謝して筆を擱く。

（藤島敏男）

邦譯『日本アルプス』

ウェストン氏著

四六判　三六一頁

昭和八年十二月梓書房刊

田部重治氏校閲、岡村精一氏譯になる『日本アルプス登山と探檢』は Weston の名著 Mountaineering and Exploration in the Japanese Alps 1896. London の飜譯本なることは、ここに改めて云ふまでもない。こゝに我々としてこの名著の完譯を得たことを、譯者並に校閲者の丹精と努力に對して深く感謝する。『日本アルプス』譯出の企ては、しかし、これが最初のものではなく、既に三十年もの昔小島烏水氏によつて部分的に行はれてゐる。當時ウェストンさんが岡野金次郎氏に原書を貸されたのを、それを轉借された小島氏は、早く返さればならないので、日本の風俗習慣の說明などは省略して了つて、『苟も山に關係したところだけは直譯といつてもいゝほど、忠實に譯した』『そして一卷の假綴本に拵へ上げた、表題に英字で The Japanese Alps. Weston と横書きにしてその下に「日本中央大山系横斷記」ウェストン氏著、小島生縮譯と禿筆でしたゝめ、卷末に「明治三十六年三月十五日譯了」と筆を措いてある。』（小島氏『萬年雪』二二五―六頁。）それには挿圖まで寫書されてゐるといふ事である。

尤もこの時の小島氏の譯出の目的は、本著の案内記的價値にあつたので、『素より私自身登山の參考用の種本であるから、當初より出版などの考へは更になかつた』といふことである。

要するに、原著は既に明治三十六年小島氏によつて抄譯され

たがその後三十年、昭和八年、こゝに本著の完譯が成つた譯なのである。しかし、この三十年間は、我國の登山界にとつては目覺しい發展であり、從つて原著に對する我々の價値は、前の案内書といふことを失つて、今日では古典として、先蹤者の輝しい登山記錄としても勿論のことであるが、『當時の山岳地方の風俗誌として』も一つの意義を有つことになつた。

先づ譯文全體に關してであるが、氣のついた所を二三、述べて見るならば、

一、ムラサキ村、ダシノサハ小屋、ヤノシリ峠などの地名から、トン屋、ミヨシヤ旅館の如き宿屋の名前、マサザオ・カクゼンなど人の名などまで、到る處に片假名で書かれてゐることは、少からず目ざはりである。その他地名には片假名で振がなされた所が隨所に發見される。旗鉾（ハタホコ）、白骨（シラホネ）、の如き。この後者の方は先づローマ字から假名に寫し、それから地圖などによつて漢字に移したのであらうと思ふが、前の片假名の書放しは、或は調査不能であつたため、そのまゝにして置かれたものと思ふ。が日本の山の中で西洋の名のやうな地名に出會はすのは誠に目ざはりの外はない。譯出に當つては陸測や、地質調査所（ウェストン氏の携帶された種類のもの）の地圖は勿論一々參照されたことと思ふが、その他何かの手段によつて調査されはしなかつたかと思ふ。

二、日本の地名などの說明は、原著にこそ必要だが、日本人に讀まれるものには全く不必要であり、省略した方がよかつた。例へば Nakasendo, the middle of the mountains road と、原文をそのまゝ「中仙道、『山々の中央の道』」と譯してあるのなど、「中仙道」だけで澤山ではなかつたか。「小淺間『小さい淺間』」、「駒ケ岳『駒の山』」の如き地名から「三味線（日本のバンジョー）」の如き普通名詞までに及んでゐる。「八町坂卽ち『半哩の丘』」、「富士、『比類なき英峯』」の如き、八丁坂、不二の山で充分に思はれる。原文に忠實と云ふならば鍋冠山の說明—the mountain of the cauldron upside down —などの省略されてゐるのはどう云ふ譯であるか。私はこんなものは全部省略されることを望んでゐる。

また「お休みなさい（オヤスミナサイ）」、「お花畑（オーハナバタケ）『圍爐裡屋（イロリヤ）』」などのルビも全く不必要であつて、「お花畑（オーハナバタケ）（大きな花畑）」などは御を大の意と感違ひした原著者の誤をその儘に忠實（?）に日本語に移されたことなど、原著に親切な仕方ではないと考へる。

三、二三の目立つた譯語について

「火口丘」、よく富士の火口丘として用ひられてゐるが、普通

に cone といふのは圓錐形のことであるが專門語では火口丘と譯すかも知れないが、富士の火口丘では富士が低い丘になり下つて了つてゐる。

「支嶺」も一つの主山脈から派出した支尾根の spur の譯なのだが嶺と譯したのでは嶺は一つの項を意味するのだからどうも意味が通じない。

「扶壁」など建築上の用語であるが、それをそのまゝ山へ持つて來たのではあるまいか。これなどバットレスそのまゝが既に山の用語となつてゐる今日「推石標」「靴金」「天然圓戯物」などと共にケーアン、クランボン、シルクとそのまゝの方が通じがよい。

四、第七章、針ノ木峠からの眺望を述べた處が次の如く譯されてゐる。『相變らず視野に映する富士の山姿が八ッ岳と信州駒ヶ岳との鋭峰の間に割り込んで聳えてゐる』

これなど原文には Komagatake of Shinshū とあるが、富士がそれと八ッ岳との間に『割り込んで』見えるからには、その二つの山の間隔はさう廣くはない。信州駒ヶ岳との間では余りに廣過ぎる。從つてこの駒は八ッ岳に近い甲斐駒のことを誤つて原著者が述べたに相違ない。こんな訂正はむしろ原著者に對しての親切とはなるが、不忠實とはなるまい。

また『日本では富士の夢を見てその夢に二羽の鶴と三つの茄子』とあるがこれなど前のと同じく鷹と親切に訂正すべきではなかつたか。

第十二章には常念からの眺望が敍してある所に『南西には美しい雲を戴いた富士』とある。これなど、地圖を見ないでも南東の誤りであることは明で、原文を開いて見ると明かに south-east となつて居り決して south-west とはなつてゐない。これは明かな誤譯である。

五、『人跡稀な山奥に澤山ゐる大きな獲物、（大熊や野猪や鹿や順鹿）』といふ文章（二四頁一〇三頁）がある。原文には明瞭に chamois となつてゐるから羚羊とすべきであらう。然し他の場所（一二五頁）ではちやんと羚羊と譯して『岩鹿（イハシカ）（山アンチローブのかもしか）卽ち日本の羚羊』といふ風にしてシャモアと振假名までしてある。

鱒などもよく方々の溪谷でとれたやうだ。例へば槍登山の際など、その途上鱒を釣つて夕食を賑はしたことがでてゐる。原文にも trout とあつて誤譯ではないが、釣れたのは、ウェストンさんには trout であつたが、それは鱒でなく、正しく鱚であつたのである。

また植物でも偃松と五葉松とが原著でも一所くたになつて

ゐるがこれらの區別は專門家に委せやう。『いわかゞみ（The Alpine bell, the Schizocoden soldanelloides 卽ち Soldavella alpina の日本產の類似種。』『黑松（Pinus Thinbergi）、杉（Cyptomeria Jopanica）』などの如き、專門家には必要かも知れないが譯出に當つて省略される方が目ざはりにならない。

六、『日本アルプスクラブ』『東洋のアルプスクラブ』のといふがあるが、それは夫々 Japanese Alpine clubs, Oriental Alpine clubs と複數になつてゐる、日本の山岳團體、東洋の山岳團體とでも譯して置くより外ないであらう。また『山岳・クラブ』などの場合、英國山岳會とするか、アルパインクラブとそのままにして置く方がよい。

譯文についてはこの位にして置かう。

卷末の「譯者の言葉」のうちウェストン氏の略曆がのせてある。その種本はフウズフウによられたものと思ふが、その m r の略字を mother と判じエミリ夫人が氏の母といふことになつてゐる。大きな誤りで他日の訂正を御願したい。

「ウェストン氏日本アルプス登山表」は本書に收錄されたものゝみであるが、讀者としては三回にわたる全部の登山表を掲げて頂きたい。といふのは、そうすることによつて日本アルプス全部にわたる氏の登山が網羅されることになり、表題にも添ふことになるからだ。

最後に挿入された挿圖と地圖であるが。

原書にある圖版並に寫眞は三十五面程の多數に上るけれども、そのうちには我々日本人には珍らしくない風俗ものが可なり澤山含まれてゐた。このうちからそんな物を省いて、二十三面を原書からそのまゝに取入れてある。何れも當時の風景のものばかりで興味も深い、寫眞もよく複製されてゐる。たゞ二三枚省いてもよいと考へられるものもあるにはあつたが。

それから原書にはないが卷頭を飾る三枚の寫眞。著者の肖像、著者よりの書翰、アルパインジャーナルのからの一頁と原著の扉。著者からの書翰のうちに translation of that old book of mine into Japanese by one of the younger members ot the J. A. C. …… とあるが、これはウェストンさんが考へ違されてゐることで、この譯者は日本山岳會の會員ではないことを明にして置かう。

附圖は原版からの、英文の複製地圖なるが故、甚だ不鮮明で、地名など全く雲に包まれた樣に定かでない。これは日本

語の讀書に對する親切な仕方ではない。地名など日本字に改めた、新鮮な地圖を一葉そへられた方がよかつた。

要するに本譯書は嚴密に原書と對照したならば、種々な不當な點も尙見出されるであらうが、全體としては先づこの程度で我慢される譯し方であらう。私は田部氏の云はれる如く、『實際此書を讀んだ人から見れば、此書は決して飜譯に好都合な本ではない。』とつくづく感じたものである。（黑田孝雄）

紀行・隨筆『霧の旅』

松井幹雄氏著

四三四頁・寫眞二十二葉・昭和九年十月

朋文堂刊・定價二圓

松井幹雄氏の遺著が、霧の旅同人の手によつて發刊された。會のルームにも一部贈呈されたので、少し紹介を兼ね批評をして置く。

故人が貴重な多くの時間をさかれて、子供のやうに育て上げられて來た『霧の旅』會の名を、そのまゝこの遺著に題したこと。松井氏の遺著の題名としてはこれ以上に相似しいものはなからうと思ふ。

寫眞は、『天神峠より上越國境山脈の展望』以下二十葉のものが其の卷頭を飾る。何れも故人の自ら苦心に成るものであつて、そのうちの幾枚かには、故人の筆蹟も併せ寫されてゐる。

これについて『霧の旅』會の大先輩、武田、木暮兩氏の序文につゞいて本文にうつる。

本文の內容に三つに分れる。

第一は、『霧の旅』で、故人が「霧の旅」へ寄せた原稿の殆んど全部（既刊「大菩薩連嶺」所載のものを除く）が網羅されて居り、「烏帽子の小屋へ」以下二十九篇が、大體に新しい順序に編まれてゐる。本項は本著の主要內容であつて全體の三分の二を占めてゐる。二は、『薰風帳』で、霧の旅以外、「山岳」、「會報」を初め、「山と溪谷」、「ハイキング」等々の雜誌、或は新聞に發表されたものであつて、「佛像禮讚」以下十編が前と同じ順序に並べられてゐる。

『書簡抄』（目次には書簡とあり）は、神谷、加藤兩氏に宛てられし書信の一部である。

「霧の旅」追悼號によると松井氏のかゝれたものは、「山人閑語」の外まだ多くの遺稿があるやうである。編輯の都合上省

かれて了つたことは殘念に思ふ。

編輯については、とやかく云ふ筋合ではないが少し氣のついた處を述べる。「霧の旅」「蘇風帖」二篇が記述年代の逆の順序であること。このことはこの種の一つの編輯方法と考へられるが私はやはり記述年代の順を追つた方がよいやうに思はれる。それは、この本の性質上、その記述内容は突内記的意味よりはむしろ故人の過去を偲ぶといふ追憶的意味の方が主であるからである。

また書簡抄についてはしかし年代の缺けたものが多く、月日の前後が判然としない。生前多忙で、滅多に手紙を書かれなかつた故人の書信は、多く葉書であつたとの話で、こゝに抄錄されたものもそれと思はれる短信が多い。故人の面影を偲ぶには、餘りに貧弱にすぎはしなかつたか。も少し多くの方面から蒐集したならば、中にはもつと思出深いものもあつたらうにと思ふ。

一たい、遺稿の編輯は、大體二つの方法がある。一は限定出版にして、故人の知人のみに頒布する方法で、一は一般讀書人を對象としての編輯である。思ふに本遺著の如き、むしろ限定版にして、もつと自由な編輯方法をとつたならば、もつともつと私等をして「愛撫」する氣持も起さしめたことであらう。そうすれば、私的な記事も可なり多くのせ得たらうし、また前述の書簡の事も自ら解決されはしなかつたらうか。何れにしても本書の編輯はどつちつかずに終つて了つた。

寫眞については何もいふことはない。しかし故人の面影を偲ぶものの一枚もないのは、故人を知らない一般讀者に對しても、また故人を知る人に對しても一種の物足なさを感ぜしめずには居られない。

裝訂は至つて澁いものであるが「霧の旅、松井幹雄」と故人の筆跡を背に壓した處まではよいが、その上に「紀行隨筆」と持つて來たのは明かに失敗であつた。ない方がどれ丈けよいか。

故人が生きて居られたならば、こんな本も或は世に出てなかつたかも知れない。「つまらないことをしてくれた」とあの細い目をよけい細くして、墓の影から微苦笑されて居ることであらう。然し後に殘つた者にとつては、故人の書き遺されたものを、敢へて紙魚の餌たらしめる事は情の忍び得ないことであら

う。この樣な感情の現れが本著の發行となつたのであらう。

本著の編輯に當られた霧の旅の方々に對してこの無理解な批評の筆を敢へてした事を御宥恕願つて此の稿を終る。

（黑田孝雄）

泉を聽く

西岡一雄氏著

四六判・本文三百九頁・朋文堂發行

定價一圓五十錢

山に入り、溪谷を歩く時、その流れの邊りに、一時腰を下して休む、その近き所から泉が岩を傳ひて落つる滴々の音を聞く、或は、岩の間を流れる潺湲とした音律に聽き入り、山の靜けさを思ふ。まあ、その「泉を聽く」を讀むと斯んな感じが湧いて來る。

本書の裝幀及び書中に散在するカットは、二科會の少壯山岳畫家であり、實踐的登山家である澤村寅男氏の考案されたもので、素人の兎や角口を出す段ではないかも知れない。一體物の趣味と云ふものは、各人によりて異るものであるが故に、假令それがその人の會心の結果とした處が、他の人が之を見れば、異る意見が出ることは當然な話である。それが爲めに、此の書の裝幀等も、見る人々の意見は千差萬別であらう。それが爲めにあゝした方が良かつたとか、斯うした方が感じが出るとか、他人が云つた處が、著者と裝幀者が會議の上、贊成されて作つたものを兎や角と云つた處で仕方のない事である。然し、物には常識と云ふ頗る雜然廣漠とはして居るが大體標準となるべき知識があり、この常識と云ふ標準を餘りに無視した處の所謂凝り固まつた意裝は、其の人だけの滿足に過ぎないものであることをば忘れてはならない。

著者は如何なる人であるかはよくは知らない。僅かに一度山行を共にしたに過ぎないが、西岡氏は、氏の趣味が直ちにその職業となつて居ると謂つていゝ人ではあるまいか。登山具店を大阪に持ち、その好日山莊なる名は大方の登山家に知れて居る處であらう。その人の齡既に五十に近く、尙、現代少壯登山家に伍して堂々と四季を通じて山に登る處の老いて益々盛んなる處の勢力旺盛なる人と見受けられる。「泉を聽く」はこの人の文である。

本文の第一頁、そこに『雪隱五趣』と出てゐて、一寸見ると鼻もちのならぬ感じがする。文する處、赤石岳頂上附近、穗高槍、黑部鐘釣双六谷等の、山小屋に於ける雪隱につき、著者

が其の時々に實驗せる趣を表現したもの。事もあらうに卷頭に雪隱五趣とは、こゝで著者の意する處を一寸考へさせられるのである。偶然と云へば餘りに偶然な文の配列である。然し、考へて見ると、人類が生理上最も重大な事は食物の攝取である。これが生體の總ての原動力となり、或は山に登る事も出來れば、或は學問の研究も出來るので、その最も重大事なる食物の攝取に次ぐものは當然エネルギーの放散と之が排泄と云ふことは又當然考へられることである。そのエネルギーはその一部精神的の力となり、又一部分は手の先によりて文字に現はれて、著者はこの隨筆集を發表する機に立ち至り、その內容として、食物の殘部を排泄する場所、卽ち雪隱をこゝに持ち來つたことを考へると、そこに何等かの因緣はあるかに思はれる。

『水車』山麓地方の田植時頃から、そろ〳〵と方々の田に水を曳く、その小さき流れの所々で、或は、人家の側を流れる溝の所に、山家の小供連か、それ相當な工夫を凝らした水車が廻つゐる。これは、芋、大根等に竹串を通して、之に水車の羽毛をつけて、或は山梔(クチナシ)の花で造つた水車が水の流れに架けられて廻つてゐる。その景色が眼に浮ぶ。單調な樣な山里の小供達の遊びも、山の自然と調和して、靜かな感じを起さす。『紅帛』水電の工事が或は鐵道工事のある山麓地方でよく見かける樣な情景である。旅から旅へ渡り行く工夫、土方連の、電車、汽車內で見受ける姿である。『足』これは、山麓地方の村々では最近ゴム靴、地下足袋が大部分を占めて、小學校の生徒連も素足にゴム靴を履いて、學校の行き歸り、或は、大人達が地下足袋で、山路をいとも平氣に、而も、大地をしつかりと踏みしめ乍ら歩む有樣で、都會人の忙しげに脊を曲げ氣味に歩くのと違ふやうに思はれる。『伐木丁々』山に登る時、大きな山毛欅林の間を通して丁々の音が聞える。近づいて腰を木の下におろして仙人に色々と話を聞いてゐる間に、山の人々と、その山を營利的事業に利用する人達との間に起る話などを聞くことは屢々ある。そして一揆的な妨げを起すこともあり、又輿論を呼び起し、政治的な爭鬪にまで擴がることもある。風致の保存と、生活の爲めの自然開發とは、その見地を異にして、大きな問題となることは現在尙方々で起つてゐる事である。「千年の歲月に堅緻と精剛をほこるこれ等の大木はあふるる激流にもまれて、この堅剛無双を誇るダムを目がけてなだれ打ち、こゝ科學の精髓を以て築いたといふダムと正面衝突をさせてこれをブッ毀さうとするのである。飛州側木材は必ずその勝利を確信し、庄川電力亦ゆづらず……」皆なこれに類する事である。『道』著者はカンにょりよく山に登る。これは、啻に道の

みでない。天候なども、氣象臺發表の天氣豫報などよりはよく當ることもある。山はあらゆる科學的な見識に、その人のカンを混へて行くことが屢々、安全に、愉快を與へることが度々あるのである。山村の人達は、其地勢こそ知れ、余り地圖等によらずして、よく、道を拓き、或は、道なき山を歩く、これもいはば山に馴れた西岡流の山の歩き方であるかも知れない。

『燭を乘つて名斧を鑑賞せんとす、』えらい難しい乘（ヘイ、トルヒトンギリ）と云ふ樣な字を使つたものだ。職業柄、あらゆる外國製の各ピッケルの名前を並べ、後に東北帝大山内製ピッケルを之等名工の作と同列に並べ得たることに限りなき喜びと滿足を著者自らが表してゐる。作者山内氏よ、西岡氏がこゝにかゝげたる一文にそむかざる作品を、より優秀なる逸品を、その型に於て、その實質に於て作るべく努力せんことを夢め怠る勿れ。そして著者と同じく、壁間にこの逸品が燭火に燦然と光芒を放つを眺めて、それが幾度かの登山で、働ける數々の光輝ある歴史を所有者に連想せしむるに充分なる資格あらしめよ。『山と不良』近頃の山で品物の紛失事件が頻々として起ることにつき、或は上高地に於けるキャンプ襲擊事件を、或は山小屋でのストーブ田舍談の有樣を、拾ひ集めたもの。『藤木九三先生』、著者が私淑せる藤木氏の今日までの交友の文であり、敢へて先生と呼び、岳人の多くの友情を述べたるもの。『フィットフエルト締具』こゝに於て、昔から今日まで、現れてゐるスキー締具を一先づ並べて、その品物を商品として取扱ふ西岡氏が、山に行く者として他の式の締具を置いてフィットフエルト締具を第一に禮讃して、自分は頑固であると自稱してゐる。山に行く者の中にも、流行の形式を追ふことに忙しい者があるかと思ふと、斯樣に、自分の商賣上の品物についても、商賣外の立場から（?）頑固な意見をはく人もある。著者西岡氏たるもの老いて益々頑固たりと未頼もしい。『落石』、登山中に落石程不可抗力のものはないとして、色々な、氏が遇つた例をあげて述べたもの。『山岳家と戀』スキー家のはなやかなのに比べて山黨の陰鬱純重さを述べてゐる。それに近時の登山と云ふものが色々な意味に解されてゐることを述べて、山黨は女には余り持てないが、その心は鋼鐵の如く堅剛で、氣持は水晶の如く玲瓏純澄で、一度意氣燃ゆれば粗服に包まれ乍ら肉體は火の如く熱し而も默々敢然として死と闘ひ、毀譽褒貶の外に立ち、眞の男らしさを保つものであると天下の女性に訴へてゐる。『手裏劍』『松野樣子』と筆を運び、『瀧深谷をうかがふ』と云ふ又方面を山の記事に返してゐる。この文は、氏がずつと以前（何年前かははつきりとはわからぬが）に槍平から瀧谷の登攀を、計らずも氏

の尊敬せる藤木氏等と同時に登ることになり、藤木氏は登りしも、氏達は雨の爲めに、落石の爲めに、雄滝の上の第二の滝の下から引返した時の感想並びに紀行で、その登降共に一方ならぬ苦行をした事を氏一流の筆によりて三十二頁に亘つて述べたもの。『山での嗜好品』、山に持ち行くべき食糧並びに嗜好品は、各人によりて色々と違ふが、西岡氏は主食をパンと定め之にバタ、白砂糖をつけて食する習慣らしく、野菜は胡瓜、大根、葱、果物を携行し所謂嗜好物としての菓子類は日本菓子が好みだ相だ。山に行く人で余りに好き嫌ひの多いことは、本人も苦いし事だらうし、又同行者等も余り愉快な事ではない。『不用意な言葉』日本の登山家に對して、日本の山は範圍が狭いから、質的に深まりたいものであると云つてゐる。アルピニズム、大衆山岳家、山ずれ男、山の先輩などと云ふ言葉につき山の氣持を述べたもの。『山の人、海の人』、山の人達は一般に海の人達よりも地味で優柔であり、素朴であるが、近頃登山が盛んになつて來てからは必ずしもその言葉は當らないと云つてゐる。スキー靴や、スキーや、ピッケルが盜まれる時代である。

『スキー靴』西岡氏の商賣としてスキー屋の主人としてのスキー靴論である。それにこの、スキー靴をスキーに合はすことにつき、普通のコバ金に就いて、靴にして眞によき靴ならばそれは無くとも可なりと斷じて居る。これは自分も同一意見で玆數年間實行して來てゐる處であり、何等の不便を感じなかつたのである。否寧ろ、バッケンと靴との合ふ具合が極めて調子がよい。『秋三題』神河内の秋、秩父の秋、七倉澤の秋につき、上高地で蛇に會つた話、秩父は大日小屋の泊りにつき、七倉澤に於て一人の怪げなる人が天秤棒を頭上高く類りに振り廻すに會ひ、余りの氣味の惡さに逃げ出した事を物語る文。『春山の追憶』三項目よりなる。第一は、雪に埋る乙女、この文題と、内容とはしつくり合はない樣にも感ず乙女を取扱ひたると謂ふよりも寧ろ春の山を主題としたかの樣に、この項を讀んだ後に感じ、乙女は最後に僅かにその後姿を見せたに過ぎなかつた。而し、春山の氣分は、著者が文の始まりに書いた通り、山の麓の人里にははや、ちらほら花を見て、何處からとなく暖昧のある陽光と風とに春を感ずるが、一度目を上げると、その向ふにはまだ冬其まゝの姿の山が立つて、その對照の變化に一種引き立つ感じを起さす。而し、その感じも、矢張り、何處となく、春らしい。所は違ふが、四月中旬から下旬にかけて、松本平に立つと丁度この樣な感が迫る樣に湧くことを經驗した人は多い事であらう。雨飾山、之は著者が嚴冬に登つた時の記事をこの章の文題春山の追憶の處に出すことはちと適當しない

感じもするが、如何なものであらう。尤も春になり、自分の登つた冬の山を思ふのかも知れない。思ひ出の農鳥、これは六月頃に登られたもので、先づ春山の中に入れることが出來るかと思ふ。著者の好みから云へばアスナロ澤の初登攀の記事である。『己を省みる』これは著者が大正十年以來のスキー經歷を記述したもので、其間、昔から今日迄の所謂スキー家の名前が一通りあげられ、著者とのスキー上の關係から、その諸大家のスキー技術につき、その態度につき著者の眼によりて批評的に記述したもの。『雨のふる日』著者程の年配になると、雨の降る日などには、靜かに雨を眺め、その音を聽きつゝ、或る時間を過すことを好む樣になると云ふ書き出しで初まり、雨の溫泉宿、雨のキャンプ等につき、その時々の氣分を述べたもの。『女・酒・骨牌』、キャンプの猥談から始まり、山の夜にきく山の人生と云ふ樣なものの中にも必ず多くの女性を見出すことから、著者が女生徒と同行せるキャンプの夜の事など、又女性登山の服裝に話は方向を轉へ、又一轉して山麓の娘達に筆は進む。又酒につき、山から降り、人里近くなつてからのアルコール性飲料はことに美味い相だ。其他知人なる酒豪の事につき二三。骨牌につき、著者はこれを好まない。そして斯かる遊技を山にまで持ち來る登山人を嫌忌の眼を以て見るとし、ことに女學生にあつては撲りつけてやり度いとまで云つて居る。人の趣味にもよることながら、山の宿やスキーの宿の夜を更かしてまでかゝる遊びに精力を消耗するは實に意味のない事である。『彼とベンド』著者の書く樣に、山の道具は大切であるが、中にはピッケルを余りに大事にし、たゞ之を持つことに誇を持つ人も世の中には相當あるらしい。所謂、寶の持ち腐れと云ふ奴である。登山要具などは、必要だから買はねばならぬものであり買つた以上は之が充分の實用上の値を知らなければならない。そのピッケルにしても單に外國品の、高名なる鍛冶屋によりての作品なるが故に必ずしも眞に立派な品物ばかりはない。又こゝで注意を要することは、日本の山と、あちらの山は、山の形、山の質、雪の有樣が違ふ。又、あちらの山と謂つても廣い範圍であればその地方々々で山の特質を異にする、それでその地方々々の山で長い間の經驗から特にその地方の山に使用に適した道具が出來たのでピッケルも其の一例である。その土地での逸品必ずしも日本での逸品であるとは必ず謂へない。『奥山峰月君』登山家の内で體の强大な人々を擧げ、その中の一人に奥山氏なる人の存在を述べ、今は何處の山河に彷徨するかと尋ねてゐる。『ピッケルの常識』著者のお得意とする處で内外色々のピッケルにつきその說明をされてゐる。『山・人』『岳

に額づく。著者が山に接した初期の印象を述べた文。『目標』、山のところどころに立つ目標、或は指導標、これが登山者に對して、一つの山の目盛の樣な役目もし、又或る時は、眞にほつとする安心をも與へて吳れることにつき、又徒に落書的な、廣告的なものに接する時、まことに嫌忌な情を催さしむるとも記してある。『露營地』、『天幕の烟』、『山』、『暴風』、『東澤の哀愁』、と著者が心の泉は滾々として湧き出でる。『天狗は山人也』種々な物語類から、或は山に登り人夫等よりその人々が山で實驗した物語り等から、著者は天狗は山人也と斷定してゐる。その論するところ十三頁に亘り、それらが實在的山人なることの證明に勉めてゐる。『近畿の山々』以前は生駒山邊りも大變面白かつたが最近大衆的登山が盛大になり余りに雜踏する。又六甲山も余りに人里の文化化して來た。之に比べると、和泉金剛、岩湧、大鳴等の山々は、まだ靜かだ、山の深味が味へる、また、琵琶湖北の山比良もよい。少し遠く伊吹山から南方に之と對峙する山々、參宮急行線附近の山々と、著者が尋ねて行つた足踏につき山歩きの味を語る文である。『谷四題』双六谷、武庫川の支流、百間瀑、遠山川、大和谷、の五ヶ所につき、その體驗を物語るものである。『立上秀二氏と一群の女性』著者の親友の一人立上氏と、それを巡る女性の一群を述べたつもりである樣であるが、その女性の一群なるものが文題程にはつきりとしない。『異說、スキー及その附屬品考』こゝにも氏獨特の登山意見及商品知識を以て、リリエンフェルト派より、最近のスキー術を一渡り見廻し、これに使用するスキー及び其他の用具に關し、日本、本來の山勢に適當せる品物を選ぶことも述べてある。『アイスピッケルを讃ふ』ピッケルに關する四度目の文である。本邦製品として、仙臺は山内作、札幌は門田作につき、その國產品の双璧なることを力說してゐる。こゝで云ふ、作者はその名にそむかぬ樣に努力すべきである。『蝶・蝗・蛇・蜻蛉・鷹』文中記する處、たゞ上記の動物に止まらず、羚羊、雷鳥、兎、猿、ミミズ、蚤、ダニに至るまで、山中に棲めるもろ〳〵の動物に及んで居る。文題もたゞ五種の動物のみを揭げて居るのは文意を適正には表してゐない。『小說家と山』泉鏡花、夏目漱石、吉田絃二郎、中里介山、白井喬二、國枝史郎、長塚節等の文士の山を取扱つた作品を簡單に批評せるもので、何れも我々山登りをする者から見れば、余りに、實證的なそして眞に山の氣分を取扱ふ文が少く、只に夫々個人の想像力が強く現はれてゐるとしてある。一般に筆の立つ者は、實際的の知識に乏しい事が多いし、實際的な實行者は只默々として山に行くし、それで近頃の樣に山岳文學などゝいふ新しい問題が、末梢山岳人に至

るまで口にされる樣になつたのではあるまいか。これも著者の揭げた文士の山の記事に類すること遠くないものであらう。『少年時代を顧る』性來何處か山を好みし著者が少年時代より山に關する記事を求めつゝありし時に小鳥烏水氏著日本アルプス第一卷の出版により日本には斯くも山の先覺者があり又日本に高山のあることに驚いたと記してある。その後日本山水論を讀み、自ら日本アルプスへの旅を志し、率加帳を廻して得たる八圓の金で名古屋迄行き引き返した話など、西岡氏の當時の面目が今も目の前に表はる樣だ。『Eispickel と Steigeisen』ピッケルの文題はこれで五度目だ、こゝではそれが如何なる爲めに山に使はれるかにつき述べられ、又外國品の夫夫につき、その型の吟味がなかなかやかましくされてある。而し、夫々の有名なピッケルは自然にその使ひ方がその土地の山に適當する樣に出來てゐてそこに、その結果として型に現はれがあることを忘れてはいけない。著者の云はれる通りシエンクをシエンクとして使ひこなす人以外の批評は机上の物語に過ぎず又その樣な批評をしてもピッケル其物の眞價には何等の影響もないのは當然である。『話』、六題からなつてゐる。溪渡り、岩樂から普通の大衆的登山の出來事、スキーの旅の斷片である。『リリエンフェルト黨』リリエンフェルト・スキー華かなりし時代に於ける伊吹山でのスキー練習の有樣から、近頃のアールベルクスキー術なるものに及び又最新アールベルグスキー術などと云ふものさへ出來た今日でも、昔のスキー術階梯や、How ko ski を讀んで自ら工夫したスキーが懷しく、リリエンフェルトスキー時代から山に入つて居る著者が今日の若い人に向つて「自ら苦勞を買へ」と說いてゐる文である。『想ひ出す人々』著者がその商賈上、並びに山行の機緣によりて結ばれた知人、友人、知己と云ふ樣な人々を揭げての、その時々の話ぶりとか、行ひとかを面白く書いたもの、讀者よ、著者西岡氏と會談する時は、余り脫線してはいけない。その脫線振はやがて「第二の泉を聽く」に揭げられることを忘れぬ樣に、こゝに豫め注意をする。『澤・谷・川』之は此の隨筆最後の文章でこれが、續、續々篇及び補遺となつてゐる五十頁に亘る論文である。澤と、谷と川との名稱の區別を實例を引いて說いたもの。その名詞の說明に言泉、廣辭林、言海等を引用してゐるが、何れも適正なる意味を表してゐないとし、そして著者は澤と、谷と、溪につきその調査を進めて行き、黑部谷、双六谷につきその說明を加へ、その支流の澤々につき又述べてゐる。その澤、谷、川等の說明から、これら澤、谷、川の持つ美しさにつき、又これに步み入る方法につき大部精しく述べてゐる。そして、「谷は深

く、山影に隠れて神祕と靜寂の氣が漂ふ、山はひとり晴れ〳〵として……山は懷しい。親しい。だが谷は矢張り暗い。すげないだらう。」としてある。『續、澤、谷、川』之は前章の續きで、再び澤、谿、谷、溪、澗川などの文字の詮議から始まる。又淵、瀞、釜、壑などの六章も一寸語り、これ等のものが蛇々幾多の屈曲して山地を流るゝ處にその美さがあり、幽邃の感を深からしめるもので、これに、その周圍の岩質、水流の形及その勢を加へて益々その景觀に素因が加はると著者は云ふ。『續々澤・谷・川』前に著者が述べた處に更に天候がその景觀に如何に影響を及ぼすかを說いてゐる。方面は急に轉回してこゝにも亦、澤渡り術につき筆を加へてゐる。最後に著者が山旅の思出の中に於ける印象の深かつた澤二三につき當時の追想を示したものである。『澤、谷、川、補遺』これで四章に亘る澤、谷、川の完結を見たものである。澤を渡るに注意すべきは水深、水速はもとより水溫をも考へる事を要するとし、これが夏季のみならずスキーの山旅に於ても亦注意すべきことにつき述べたもので一讀の價値充分にあることと考へられる。

今、泉を聽くの通讀を了へて、書を閉ぢて考へらるゝことは、著者は氣の向く時に筆をとつたものでゐるが而も各章を通じてその文に一種獨特の所謂西岡流の勢を持つて居ることがよくわかるのであつた。あの志賀高原龍王山上で鉢卷して感極まつてスキー躍りをやつた西岡老を思ひそして、その文章を通して見る西岡氏と、その感じとがよく一致することを知るものである。矢張り、文はその人を現はすものであることを感ずるものである。

（額田　敏）

山！

荒井道太郎譯

昭和九年十月　朋文堂出版

この『山！』の原書――クリンカーのギッシリと並んだ、いかつい恰好の山靴が一箇、表紙の大半を黑々と占領してゐるハンス・モルゲンタールの "Ihr Berge" ――は、登山に興味を持つ程の人ならきつと一度や二度は開けて見られたに違ひない。確か帽子に白線がついて間もない生意氣ざかりの頃のこと。この獨逸語の本を手にしたものゝ、未だデル・デスの變化が難物で、教室の眞中で目を白黑させて立往生してゐた時分だから、書いてある事柄は素より判る筈はない。然し挿入のカットがよく出來てゐて美しいので、カットだけを飽かず眺めてゐた。これ迄はまづ無難だつたが、少し經つて鬚文字の單語の

意味がどうやらこうやら字引から搜し出せる頃になると、並んでゐる單語で自分勝手な文章を頭の中に拵へ上げて判つた氣になり濟ますといふ、飛んでもない藝當を演つた。一入、厄介な獨文法なんて難物は亂暴にも無視してしまつて。――きつと、こういふほゝゑましい思ひ出を持つてゐる人々も尠なくないであらう。この「イーヤ・ベルゲ」は一九一五年に初版、二〇年には再版が出てゐる。この中に漂つてゐるセンチメンタルな氣分、空虛なんだが、何かこう仰々しい言葉をふんだんに使つた所が、我武者羅な山登り一點張りの血の氣の多いロマンチストである頃には、いやに氣に入つて廣く讀まれてゐるに違ひないと想像する。飜譯も大分以前から一二章づゝではあるが各學校山岳部の部報に載せられてゐたが、今度此處に『山！』となつて全譯が出たわけだ。

『山！』を手にして、先づ、カットを一見して少なからず失望した。前に一寸書いた樣に、飽かず眺められる程よく美しく出來てゐて、これを眺めてゐるだけでも本の內容もほゞ判らうかともいへるカットで「イーヤ・ベルゲ」の値打の半分はこれにあるといつて過言ではない。カット、それが『山！』はすつかり台なしになつてゐる。黑一色のペン畫だのに、複製凸版の不出來の爲めにインキはかすれ、線が消えて原畫の氣分をメチャメチャに壞してしまつてゐる。テディ（一四六頁）は煤煙をかけられて泣面した樣になつてゐるし、ピーチホルン（一九六頁）では圖の下方にある筈のピーチホルン・ヒュッテが行方不明になつてしまつてゐる。インキと凸版の惡いせいで原畫にある遠近感とか立體感とかいふものはすつかり無くなつてゐる。一九一頁はシュレックホルンだそうだがどうも判らないと思つたら、何のことだ、右へ九十度傾いてゐる。然し、傾いてゐると判斷する事が一寸難いほどの畫になつてゐる。カットの事を書いた序に一言つけ加へることは、原書の表紙にはクリンカーの並んだいかつい恰好の山靴が付いてゐるが、『山！』の表紙にはないので一寸もの足りない氣がする。これは人々の好みによることかも知れないが。

扨て、原書の値打の半分であるカットをこんな風にしてしまつた責任の大半は、出版屋が負ふべきだらうと思ふ。次に譯文をのぞいて見る。

『自分ひとりだけに好都合な情熱などをもつて氣儘に歪曲せず、出來る限り原作者に固有な考へ方の色彩や調子やを活かすことに努めたつもりである。』と譯者はあとがきで斷つてゐるが、譯文をのぞいて見た感じでは、どうも、原文にないものがチヨイ〳〵加はつてゐる樣だから、これは譯者の御謙遜であら

うと思ふ。一六〇頁の唄なんか大分景色が作りかへられてゐるし、一五八頁六行目の『そんな正月野郎』は原作に見當らない樣だ。一七一頁の『單獨行』でふと思ひついたから、別にこのところがどうこうと云ふのではないが一言述べさして貰ふ。アラインゲンガーにもいろ〳〵あつて、ニッカー一杯に木賊をくつつけてゐる男もあれば、手ごわい岩でいやといふほど擦り剝いた傷痕をこつそり匿して痩我慢を張つてゐる始末のをへない男もあらうと、とりとめもないことを考へた。氣分の喰違ひは時にとんでもない事になる。『一向私には苦にならなかつたものだ。』(九頁四・五行目)は原文には「退屈で苦しんだ」。となつてゐる。『急勾配に聳える跡形――ベルクシュタイガーにとつては神々の辿り給ふ小徑』(一二頁一・二行目)では一寸判りにくい。これは「聳立した支尾根――ベルクシュタイガーに取つては聖なる小徑」の方が意味がよく通じる。そうでないと登山者の登る道がないことになるから。『日暮まで無感覺な虚無のうちにもぐり込み』(一一頁一行目)はどうも文字の誤讀と文法無視で、「たとへ夕方虚無に陷つたとしても」と解釋すべきだ。この流儀の所が一八、二〇、二四、九一、九五、九九、一三九等の頁に目につく。『もしかして太陽が我々の意表に出たとしたら――雪崩を流しでもしたら――それに落石のことがあるぞ――ともあれもつと近づいて見ないことには!』(二四頁六行目)と譯者は『自分ひとりに好都合に』解してゐるが、「太陽が急に照つたら――雪崩が出るだらうし――落石――そら近くに飛んで來たぞ!」と、小舍で、寢つきに明日の山登りを案じてゐて考へが連想の糸を繰つて、太陽、雪崩、と來て、落石が飛んで來たと心に描いて、そら近くに石が落ちて來た、危い!と眞に迫つた個所だ。落石が飛んで來てゐるのに、ともあれもつと近づいたりなんてしちやあまりに無鐵砲すぎる。ハモは可哀そうに氣ちがひになつて死んだんだそうだが、譯文が若しほんとなら、ひよつとするともう「イーヤ・ベルゲ」を書いた時にもをかしかつたのかも知れない。『何と云ふ、それは、高き所へ惹かれるこころであることよ!だ。』(九一頁二行目)は直譯した樣な文體だが、"Hoch"といふ文字があつても常に高いと譯すと限らぬ。"Welcher Hochgehül!"だから「何といふ、うれしさだ!」の方がまわりくどくなくてよく判る。直譯もあれば名譯もあるが。『おのが燦然たる業想ひ、まさに、怡々欣然たる、その山々にあらざるか?』(九九頁六行目)は、とんだ名文になつて了つて、折角の名文調の『晩秋』(九八頁)を最後のところで惜しくも疵ものにして、九仞の功を一簣に欠いてゐる。これは、「山々は今、その燦然とかゞ

やいてゐる自分達の要背を矜らし氣に喜んでゐる樣ではありませんか？」とあるべき所で、譯文の樣に歪めて變に難解にされちや迷惑だ。誤解があれば一々指摘して文句を云へと、譯者の希望だとか、ないとか聞いたが、一寸のぞいたゞけでもこうザラに迷譯があると、一々指摘して此處に書き並べるなんて大變だし、此の批評の讀者もうんざりしてあくびが出るのは必定だから、これ位にして措く。兎もあれ、こんな譯し方では、「イーヤ・ペルゲ」を讀んだ人達の赤インクが『果すべき役目は、まだまだ多いことを知つておかう。』（譯者のことば第一二頁目）卷末の豫告で、同じ譯者によつて、オスカー・エーリッヒ・マイヤーの「タート・ウンド・トゥルム」以外二、三册飜譯されると知つたが、折角、譯本になるなら慌てないで、ゆつくり文字をよく讀んで、それからのことにして貰ひ度いと希望するのは啻に筆者ひとりに止まらないだらう。「タート・ウンド・トゥルム」は「イーヤ・ペルゲ」が足もとにも及ばぬ思想の深みがある。神と惡魔の間を彷徨する獨逸人の懺みを取り扱つたゲーテの「ファウスト」に暗示されて、山を知つた獨逸人の二元性の懺をモーチブとしてゐるんだから――固よりこんなことは譯者はよく御存知のことだらう。妄言多謝。――なるべく判り易く譯して貰はぬと、何のことだか、見當がつかなくなる處がある。

外國語の用法がやたらに日本文に持ち込まれたせいで、超惡文が近ごろ非常に目立つ。主語をあまり使用しない日本文に形容詞をいくつも〳〵並べ立てると一體何のことか見當がつかなくなる。でたらめの句讀點は讀者に文章の意味を傳へることの寧ろ障害となると、誰かゞ書いてゐた。筆者はこの『山！』の『譯者のことば』を拜見して、失敬千萬にも、長い嘆息をついてしまつた。あまりにも『斷片的に』書き並べてあるせいもあるんだらうが、一體譯者は何を云つてゐるんだらう！おぼろ氣乍ら譯者の云はんとしてゐる事は判る樣な氣持もするが、あまりにも難澁すぎる文章で、まともに考へると又判らなくなつてしまふ。もう少し何とか判り易く書けないものだらうか？『譯者のことば』の中に、『彼は、その遺著『山！』の全一册を掲げて……』（第八頁目）とあるが「イーヤ・ペルゲ」はどうも『遺著』ではなさそうだ。ハモの死んだのは一九二八年だし、「イーヤ・ペルゲ」は前に一寸書いた樣に、初版は一九一五年、再版は一九二〇年ともにハモの生前に出てゐる。遺著といはれるものは死後に出版されたものに限ると覺えてゐるんだが、近頃はこういふ用ひ方があるんだらうか？著者が死んだら生前の著作がみんな『遺著』になるなんて聞い

たこともないが。

筆者は流行にうとい方で、恥かしい話だが近ごろはやつてゐる山岳文學がどんなものだかよく知らないんだが、若しも、こういふものが山岳文學なら、新しい山がなくなつたからと云つて物好きにも、『山岳文學の街道』(第一頁)なんかを下手に歩いて迷ひ子になるよりも、何回も歩いた山道でもかまはない、——或は石がゴロ〳〵してゐて滕小僧が笑ひ出す樣な所でもかまはないから、これを辿つて山頂にうづ高くなつたケルンに小石一つを加へる方が性にあつてゐそうだ。(伊藤愿)

北大山岳部々報　第四號

内地の山が悉く歩き盡され、積雪期に於てすら新味のなくなつた今日、未だ殘されたる幾多のルートを持ち、而かも他に擊肘さるゝ事なく自由奔放に山野を馳廻つて居る北大山岳部は幸福と云はなければならない。

從來根據地の關係から比較的等閑視されてゐた大雪山彙が、直井溫泉(愛山溪溫泉)の發見に依つて今後は大いに注目され研究される事だらう。(積雪期の大雪山彙—佐々、村山)

紀行の大半は日高の山々で、夏は執拗な這松に惱まされ、冬はスキーに快適な他の山々を捨てゝ、積雪不足に苦しみ雪中幕營を重ねてまで登頂に精進せるは流石に北大山岳部と云へやう。紀行の他に「日高山脈登山年譜」と「アイスピッケルとシュタイグアイゼンの材質に就て」「高山に於ける風土馴化作用と酸素吸入に就て」の二研究がある。

年報は地方別に分類して約百頁(三一年—三三年)、北海道のみを七分して詳細を極め同地に遊ぶものゝ絶好の參考たるを失はぬ。尙年報を讀んで特に感じるのは小舍の不足とは云ひ乍ら、冬期に於ても大部分幕營をなしてゐる事で、之は北海道の山登りの一つの特色として見る事が出來る。

寫眞は九葉あるが殘念乍ら金光君の「晩秋の大雪山彙」が特に優れてゐるのみで他は餘り感心しない。(田中菅雄)

關西學生山岳聯盟報告　第五號

一九三四・七六頁・寫眞八葉

頒價一圓・昭和九年七月・同聯盟發行

關東の聯盟が解散して各校山岳部・旅行部が夫々部報を復活させてゐる現狀に反し、關西の聯盟が健全な發展を續けつゝ、今年その報告第五號を刊行したことを、同聯盟のために祝福し

たい。

この聯盟各校が、いかに目覺しい活躍をこの三年間に遂げたかは、報告の目次内容によつても明な處である。

内容を簡單に紹介するならば

「南千島の山」は、昨年七月―九月に至る間、國後に於て、チャチャヌプリ、とルルヰとを、また擇捉に於て、アトサヌプリと單冠とに登つた、長谷川君（京大）を含む三高部員の記錄である。長谷川君は、先きに「千島の山」を發表されてゐるから詳細はそれにゆづる。

「餓鬼谷より五龍及東谷山」は今年三月行はれた關大の隊による五龍及び東谷山の登行記錄。

「白馬岳より宇奈月」は白馬より黑部側への下降記錄で、同じ三月、關大のパーティによるもの。

「槍北鎌尾根」は大槍小屋、天上澤露營地を中心とする北鎌の試登記錄。七年暮より八年一月、京大のパーティによるもの。

「冬の飛騨側御岳」は、岳の湯を中心としての飛騨側からの御岳登攀の記錄。八年十二月、岐阜高農のパーティによる。

「臺灣山岳遠征報告、一九三三」は昨年七月―九月に於ける同志大の兒島君のパーティによる、臺灣山岳遠征の記錄。南湖大山（七、一五―二五）、新高山彙（沼井氏をリーダーとする立教大部員との共同登山、七、二六―八、七）、大霸尖山次高山縱走（八、九―二一）、關山（八、二四―三〇）で、隊員中には紅頭嶼までも足を延ばせて居り一夏の收獲としては實に豐富な遠征であつた。その他蕃族小記や蕃語小集などと共に、遠征費用を公表してゐることは、將來のかゝる企に對してよい參考資料となるであらう。尙兒島君は「臺灣の山」を書かれてゐるから、讀者の飜讀をおすゝめする。この他に登行記錄抄、聯盟ノートなども附へてゐる。

以上本文六篇、何れを見たまゝ、感じたまゝに記述され、そこには妙に紛飾された、感傷もなければ、自己陶醉も見られないのは一つにこの聯盟のもつよき若さの故であらう。

聯盟團體となると、單一團體とはまた自ら異つた種々の問題があらう。それらの問題を課せられ乍らの、この報告の編輯には、並々ならぬ苦心の拂はれてゐることが、編輯後記に窺はれる。全く同情に耐えない次第である。

今後一層の活躍と發展とを希望して紹介を了る。

（黑田孝雄）

會報

會務報告

十月定例理事會

十月四日午後六時、赤坂溜池あすならうにて

出席　評議員、高頭、小島、高野、武田、冠、槇、三枝（以下委任）近藤、中村、木暮

理事、松方、鳥山、神谷、田中、伊藤、飯塚、茨木、三田、三木、黒田、逸見（以下委任）高橋、津田

一、山岳第二號編輯

一、會計報告

評議員會

十月四日理事會に引續き評議員のみにて同所に開催

一、會員藤島敏男氏を評議員に推薦の件可決

役員總會

十月四日更に引續き同所に開催

一、來年度新任理事候補者五名を會員中より推薦し、夫々交渉することに一決す

十一月定例理事會

十一月一日午後七時、於事務所

出席　高頭、松方、額田、神谷、黒田、伊藤、田中（以下委任）飯塚、福島

一、山岳第二號發刊、第三號編輯報告

一、來年度理事候補者の件

一、關西小集會の件

臨時理事會

十一月二十日　於本會事務所

出席　高頭、小島、武田、茨木、飯塚、藤島、黒田、額田、松方

一、年次會員大會の件

十二月十三日、午後六時三會堂に開催し、會務報告の後講演會を開くこととす

一、關西旅行報告（松方）

一、山岳舊號處分の件

一、山岳第三號編輯の件

一、事務所移轉の件

十二月定例理事會

十二月六日於本會事務所

出席　高頭、小島、木森、茨木、鳥山、槇、松方、額田、神谷、逸見、三田、飯塚、藤島

一、事務所移轉の件
一、明年度山日記編輯委員の件
一、理事候補者決定の件
一、山岳第三號編輯
一、會員大會の件
一、京大白頭山遠征に金百圓也寄贈の件
一、關西在住理事提案の件

第六十三回小集會

昭和九年九月二十日
午後七時三會堂に於て

一、東北の山二三　　藤島敏男氏

二年秋田に在つて其附近を歩かれた多くの山行のうちから鳥海、八幡平等について語られた。終りに此の方面の山について二三所感を述べられた。講演の後約二十枚に餘る幻燈板について更に補足的説明があつた。講演の内容は「山岳」に改めて執筆される筈であるが極めて有益なものであつた。

終に同氏の友人、會員川喜田壯太郎氏自作の小型映畫（三種）の映寫があつて、九時半ごろ散會した。

出席者

岩永信雄	伊藤秀五郎	藤島敏男	黒田孝雄
小林義正	逸見眞雄	足立源一郎	佐藤誠一郎
飯塚篤之助	島田巽	甲村琴瑚	澤智子
岡本勝二	谷重雄	大澤照貞	山田多市
藤枝義男	淺原重繼	多賀富藏	田邊主計
渡邊達三	高頭仁兵衞	磯野計藏	檜原良一郎
神谷泰	土屋鎭雄	松方三郎	西川信義
茨木猪之吉	笈川一	矢田城太郎	木村一男
額田敏	川喜田壯太郎	橋本晋七郎	堀田彌一
神津得一郎	岩崎京二郎	飛川維之	伊藤朝太郎
槇有恒	中司文夫	會員外十六名	

第六十四回小集會

昭和九年十一月八日午後七時三會堂にて

一、ウェストンと歩んだ頃の思ひ出

浦口文治氏

田部重治司會のもとに小集會を開催す。講演者は、立教大學教授、駒澤大學講師、浦口文治氏で、殆んど四十年前にウェストン氏と信越の山々を登山せる思ひ出につき、一時間半に亙り、氏の專門とする英文學の片鱗を時にひらめかしつゝ、日本を外國に紹介せる外人の功績より說き始め、當時のウェストンの言葉を用ひつゝ、ユーモーア豐かな山の話に魅せられた。本號所載同氏の記事は、本集會の速記に加筆せられしものである。

講演後、一時休憩、今年一月、藤島敏男氏が北海道十勝岳に於いてライカ・カメラによりて撮影された寫眞の幻燈があつて十時過ぎ散會した。

出席者

荒井道太郎　吉田竹志　磯貝藤太郎　黑田孝雄
田邊主計　廣瀨潔　吉田禮二　橋本晋七郎
島田巽　大澤照眞　岡本勝二　角田吉夫
春山仙二郎　前田昌晴　伊藤秀五郎　藤島敏男
武田久吉　谷重雄　木暮理太郎　田中菅雄
松方三郎　高頭仁兵衞　田部重治　冠松太郎
福田嘉四郎　笈川一　額田敏　村尾金二
飯塚篤之助　湯淺巖　鍋倉英夫　佐藤誠次郎
山口成一　川喜田壯太郎　會員外九人

有志晩餐會記事

十月十一日横濱南京町「萬新樓」にて

秋の有志晩餐會は横濱に出向いて開いた。來年は日本山岳會も創立三十年になるといふので、會の創立と因緣の深い此の土地に於いて開いた譯である。折から雨にも拘らず來會の會員二十餘名、三つの圓卓を圍んで歡談を交へた。當年の横濱つ子高野氏が病氣のため缺席されたのが心殘りではあつたが、それでも小島氏が出席されたし、古くからの會員である横濱の片平氏なども見え、横濱に進出した甲斐があつた次第である。次回の世話人は磯野計藏、尾崎喜八、藤島敏男三

氏と決定。

世話人　冠松次郎
　　黑田正夫
　　松方三郎

當日の出席者

廣瀨潔　田邊主計　高頭仁兵衛　岡埜德之助
岩永信雄　島山悌成　冠松次郎　小島久太
原田恭雄　吉田竹志　片平重次　伊藤秀五郎
尾崎喜八　黑田正夫　磯野計藏　神谷恭
飯塚篤之助　足立源一郎　松本善二　塚本繁松
藤島敏男　松方三郎　石原巖　櫻內敏雄
伊藤朝太郎

「山岳」投稿規定

一、投稿は何人も自由とす。日本山岳會員たると然らざるとを問はず。
一、原稿の採否は理事會に於て決定す。
一、原稿は返却せざるものとす。
一、別刷所要の向はその旨原稿に朱記せられたし、その費用は筆者の負擔とす。
一、原稿にはその梗概を付せられたし。
一、紀行には概念圖を添付せられたし。
一、寫眞は光澤印畫紙に燒付けられ度、裏面或ひは別紙に說明記入を乞ふ。
一、校正は編輯者に一任せられたし。
一、地名及び外國語は特に明確に書かれ度、地名には振假名を附せられ度し。

原稿蒐集所
東京市芝區琴平町一、不二屋ビル、三〇七號室
日本山岳會編輯所

原稿用紙所要の向は前記編輯所宛て申込みあり度し。

昭和十年一月二十五日印刷
昭和十年一月二十八日發行

〔定價金貳圓〕

發行所　東京市芝區琴平町一、不二屋ビル內
日本山岳會
電話芝一六四九番
振替口座東京四八二九番

編輯兼發行者　東京市牛込區市谷仲ノ町二八　黑田孝雄
印刷者　東京市神田區神保町一ノ三四　高田壬午郎
發賣所　東京市神保町　東京堂
廣告取扱所　東京市牛込區富久町一四　進恒社

株式會社開明堂東京支店印刷

著作權所有

日本山岳會々則

第一條　本會ヲ日本山岳會(Japanese Alpine Club)ト名ツク

第二條　本會ハ山岳ニ關スル科學、文學、藝術其他一切ヲ研究シ以テ健全ナル登山氣風ノ振興ヲ期シ且ツ會員相互ノ連絡親睦ヲ圖ルヲ目的トス

第三條　本會ハ前條ニ掲ケタル目的ヲ達スルタメ左ノ事業ヲ爲ス

(1)　機關雜誌「山岳」ノ發行、又時宜ニ依リ臨時又ハ定時ノ出版物刊行

(2)　其他登山者ノ爲メ適宜ノ事業

第四條　本會ハ毎年大會及小集會ヲ開ク

第五條　本會ニ左ノ役員ヲ置ク

會長一名、副會長若干名、評議員十五名以内、理事十五名、監事二名以内

第六條　會長ハ本會ヲ代表ス　但シ會長ニ事故アル場合ハ副會長之ニ代ル

第七條　會長及副會長ハ役員總會ニ於テ役員ノ内ヨリ之ヲ推薦ス、會長及副會長ノ任期ハ三ケ年トス　但シ役員トシテ任期滿了シタル場合ハ會長副會長トシテノ任期滿了前ト雖モ交替スルコトアルヘシ

第八條　評議員ハ本會ノ重要會務ヲ審議ス

第九條　評議員ハ本會發起人ノ總テト元役員タリシ會員中ヨリ評議員會ノ推薦セル者ヲ以テ之ニ任ス　發起人以外ノ評議員ノ任期ハ三年トス　但シ重任ヲ妨ケス

第十條　評議員ハ互選ヲ以テ常任評議員若干名ヲ選任ス

第十一條　常任評議員ハ評議員會ヲ代表シテ會務ニ參與ス其任期ハ三年トス

第十二條　理事ハ別ニ定ムル細則ニ依リ候補者中ヨリ會員ノ投票ヲ以テ之ヲ選任ス其任期ハ三年トシ、理事定員數ノ三分ノ一ヲ毎年改選スルモノトス

但シ引續キ重任スルコトヲ得ス

第十三條　監事ハ評議員會ニ於テ會員中ヨリ之ヲ推薦ス其任期ハ三年トス　但シ重任ヲ妨ケス

第十四條　役員總會ハ評議員、理事ヲ以テ組織ス

第十五條　役員總會、評議員會及理事會ノ議長ハ會長之ニ當ル　但シ會長ニ差支アルトキハ副會長之ニ代ル

第十六條　役員ハ任期滿了後ト雖モ後任者ノ就任スル迄ハ其

任務ヲ行フモノトス

役員ニ缺員ヲ生シタルトキハ前各條ニ依リ夫々之ヲ補充ス補缺役員ノ任期ハ前任者ノ殘任期トス

前項ノ場合ニ於テ特ニ補缺ヲ必要トセサルトキハ次ノ改選期迄之ヲ行ハサルコトヲ得

第十七條　役員總會、評議員會及理事會ハ會長之ヲ招集ス

第十八條　役員總會ハ役員二分ノ一以上評議員會ハ評議員二分ノ一以上理事會ハ理事二分ノ一以上出席スルニ非レハ議決ヲナスコトヲ得ス

第十九條　役員總會、評議員會及理事會ノ議決ハ出席者ノ過半數ヲ以テ之ヲ定ム可否同數ナルトキハ議長ノ決スル所ニ依ル

第二十條　役員ハ總テ無報酬トス　但シ其職務ノタメ必要ナル實費及旅費ヲ給與スルコトアル可シ

第二十一條　本會ハ會員ヲ分チ左ノ三種トス

一、通常會員　會費年額六圓ヲ納ムル者

二、終身會員　一時金百圓以上ヲ納メタル者

三、名譽會員　役員會ニ於テ推薦シタル者

右ノ二、三ニ該當スル會員ハ爾後會員籍ヲ有スル間ハ會費納付ノ義務ナキモノトス

第二十二條　本會々員タラントスル者ハ會員二名ノ紹介ヲ以テ申込ムモノトス、入會許可ノ通知アリタルトキハ入會金五圓ニ會費ヲ添ヘ拂込ムモノトス　入會許可ノ通知アリタル後一ケ月以内ニ右ノ手續ヲナササル者ハ入會ノ許可ヲ取消サル可シ

第二十三條　入會ノ許否ハ理事會ノ決議ニ依ルモノトス

第二十四條　本會會則ノ變更ハ役員總會ノ決議ヲ以テ之ヲ定ム

第二十五條　前條ノ決議ハ役員三分ノ二以上出席シ其出席者三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルコトヲ要ス

第二十六條　本會ハ適當ト認ムル地方ニ支部ヲ設クルコトヲ得支部規則ハ役員總會ニ於テ之ヲ定ム

細則

一、會費其他ニ關スルモノ

（イ）會費ハ毎年二月末日迄ニ納付スヘキモノトス

（ロ）毎年一月一日ヨリ八月三十一日迄ノ入會者ニ限リ其年度ノ會費ヲ二ケ月間延納スルコトヲ得　但シ此適用ヲ受ケントスル者ハ其旨入會申込ト同時ニ申出ス可シ

（ハ）毎年九月一日以後ノ入會者ニ對シテハ其年度ノ會費ヲ免除ス

（ニ）本會ハ會員ニ會員章ヲ交付ス會員章ヲ紛失シタルモノ

ハ實費ヲ以テ再交付ヲ受クルコトヲ得

（ホ）本會ハ機關雜誌「山岳」ヲ毎年發行シ毎號一部ヲ本會會員ニ頒布ス　但シ毎年九月一日以後ノ入會者ニハ頒布セス

（ヘ）毎年九月一日以後ノ入會者カ其年度ノ雜誌「山岳」ノ頒布ヲ希望スルトキハ更ニ一ケ年分ノ雜誌代ヲ納ムルコトヲ要ス

（ト）本會會員ハ別ニ定ムル所ニ依リ本會所藏ノ圖書ヲ閲覽スルコトヲ得

（チ）會員ニシテ退會ヲ欲スルトキハ其旨事務所ニ必ス書面ヲ以テ申出ツヘシ

（リ）會員ニシテ本會ノ體面ヲ毀損シ又ハ會費納付ノ義務ヲ怠リタル者ハ理事會ノ決議ニ依リ除名ス

（ヌ）本會ハ既納ノ金品ヲ一切返付セス

（ル）團體加入者ノ代表者交付シタル場合ニハ新舊兩代表者ノ連署ヲ以テ代表者變更届ヲ提出スヘシ

（ヲ）本會集會室及圖書室ヲ東京市芝區琴平町一番地不二屋ビル三階三〇七號室ニ置ク

（ワ）海外旅行其他ノ理由ニヨリ十二ケ月以上、三十六ケ月以下ノ間不在トナル場合ハ、會員ハ其ノ理由、不在期間等ヲ詳記シ、取扱手數料金貳圓ヲ添ヘ事務所ニ届出ツル事ニヨリテ、不在會員ノ取扱ヲ受クル事ヲ得、此場合ニハ不在期間ハ會員章ヲ返納スルニ及ハス、會費納付ノ義務ナキモ本會ノ出版物ノ頒布ヲ受クル事ヲ得ス

二、理事選擧ニ關スルモノ

（イ）理事定員十五名ノ内三名ハ之ヲ關西在住ノ會員中ヨリ選任ス

（ロ）役員總會ハ理事改選又ハ缺員補充ノ際ニ會員中ヨリ候補者ヲ推薦スヘキモノトス

（ハ）會員中十名以上ノ推薦ニヨリ會員中ヨリ一名ノ候補者ヲ擧クルコトヲ得　但シ一候補者ヲ推薦シタルモノハ他ノ候補者ヲ推薦スルコトヲ得ス

（ニ）理事候補者タルヘキモノハ入會後滿三ケ年ヲ經タルコトヲ要ス

（ホ）團體ノ代表者タル資格ニ於テ會員タルモノハ候補者タルコトヲ得ス

（ヘ）候補者ノ氏名ハ豫メ本會ヨリ全會員ニ通知シ投票ヲ求ムルモノトス

（ト）候補者ノ數カ改選又ハ補充セラルヘキ定員ノ數ヲ超過セサルトキハ投票ヲ要セサルモノトス

（チ）改選ノ際五名ノ内一名ハ關西在住ノ理事トス

（リ）投票ハ記名連記投票トス

山岳第二十九年總目次（昭和九年）

本欄

上高地は神河内が正しき說……小島　烏水　號數一　頁一　通頁1
アルバータ遠征の追想(一)……三田　幸夫　一　一三　13
南湖大山の記……田中　薫　一　二五　25
慶長年間の朝日連峯通路に就いて……佐藤　榮太　二　一　143
ウェストンと歩んだ頃……浦口　文治　三　一　229
アルバータ遠征の追想(二)……三田　幸夫　三　六五　293

雜錄

僕達の造る小屋の事を……大島　亮吉　一　五七　57
冬の八甲田山……額田　敏　一　二〇　90
勝道上人と日光の開山……武田　久吉　一　一〇五　105
耳二つの寫眞に就て……武田　久吉　一　一一三　113
上越國境の山名二三……武田　久吉　一　一一五　115
平福百穗氏を憶ふ……茨木猪之吉　一　一二三　123
信濃山岳傳說考……磯部　香坂　二　一五　155
北アルプスの紅葉風景……中野　山堂　二　四五　185
山梨縣對靜岡縣、小富士及富士山項
　爭奪戰評論……二　六一　2.3
スノウドンの思出……田中　薫　三　九三　321
一月の日高山脈……相川　修　三　一〇一　329
上信國境御飯岳四阿山縱走……角田　吉夫　三　一一三　341
大平晟氏の壽像建設計畫……高頭仁兵衛　三　一二一　350

遭難顚末概報

東京農業大學山岳部員の穗高遭難……一　一二五　125
鹿島槍ヶ岳に於ける國澤武氏の遭難報告……三　一二四　352
穗高屏風岩に於ける黑田勝喜氏の遭難報告……三　一三六　364

圖書紹介

邦譯チンダル……松方　三郎　二　六八　210
「臺灣の山」と「千島の山」……伊藤秀五郎　二　七二　214
リュックサック……額田　敏　二　七四　216
書齋の岳人……藤島　敏男　三　一四二　370
邦譯「日本アルプス」……黑田　孝雄　三　一四四　372
霧の旅……黑田　孝雄　三　一四八　376
泉を聽く……額田　敏　三　一五〇　378
山！……伊藤　愿　三　一五七　385
北大山岳部々報第四號……田中　菅雄　三　一六一　389
關西學生山岳聯盟報告第五號……黑田　孝雄　三　一六一　389

集會記事

第六十回小集會……132
第六十一回小集會……133

會員大會……133
新舊理事送迎會……134
第九回關西小集會……219
有志晩餐會……220
關西有志懇談茶話會……221
第六十二回小集會……221
第六十三回小集會……392
第六十四回小集會……392
有志晩餐會記事……393
會務報告……130, 218, 391
新入會員……135, 222, 394
會員計報……136, 223
退會者……136, 224, 394
「山岳」投稿規定……138, 225, 395
日本山岳會會則……139, 226, 396

圖版

對頁
「善光寺名所圖繪」第一卷所載穂高岳及神河内の記錄……8
「善光寺名所圖繪」第一卷にある鎗穂高及び神河内等の挿繪……9
バトマノフ山北方の緩傾斜面バドッノフ山北面より北望(田中薫)……30
シラガン溪源頭の氷河性谷壁と堆石及び持子石(同)……30
南湖大山主峯とカール1(同)……31
シロンマハヤヘン(同)……31
葛川の上流標高九〇〇米附近よりの展望(額田敏)……90
井戸岳の火口壁(伊藤健夫)……100
駒ヶ峯より見たる八甲田大岳、小岳(同)……100
駒ヶ峯との鞍部より櫛ヶ峯(額田敏)……101
駒ヶ峯の頂上(同)……101
勝道上人木像(武田久吉)……112
月夜野から望んだ耳二つ(同)……113
故平福百穂氏……124
朝日古文書(三種)……152
アルバータ東南面(岡部長量)……292
アルバータ西南面(同)……293
ヂャスパーパークロッヂ前の一行(Davis)……296
下降中休息をなしたる唯一の箇所……297
アサバスカ河右岸山火事の跡……302
途中の露營地にて……302
第一圖 (田中薫)……320
第二圖 (同)……321
第三圖 (同)……324
土鍋山より四阿山、根子岳(水野啓治郎)……342
四阿山、東北肩二千二百米附近より望む(同)……343

挿圖

第一圖南湖大山々彙略圖……35
第二圖谷氷河位置想像圖……43
第三圖氷帽説による氷蝕狀態の想像圖並に現在ある熱帶高山の氷帽……54
第四圖ムルロアフより南湖大山に至る稜線上の小地形を示す……55
第五圖ムルロアフ南湖大山間稜線上の地塊運動見取圖……56
八甲田山附近圖……97
谷川コイ澤左峯の堤上から仰いだ谷川岳(武田久吉)……120
現場概念圖……127
朝日連峯要圖……146－147
コロビア・アイスフイールド……306－307
アルバータ附近……318－319
スノウドン山彙概念圖……326－327
日高山脈札内川上流……332
上信國境御飯岳方面……342
鹿島槍ヶ岳概念圖……354
穂高屏風岩略圖……368

カット

坂本直行

The Journal of the Japanese Alpine Club

SANGAKU

Vol. XXIX 1934 No. 3